

東近江市森の文化資源調査報告書 1

民俗調査報告書

令和7（2025）年3月

東近江市

例言

一 本書は、東近江市が実施する東近江市森の文化資源調査事業の一環として、永源寺地区の山間部に位置し、山と関わりが深い生活を営んできたムラの民俗を調査した記録である。主に昭和三十年代以前を対象年代として、高度経済成長に伴う生活様式の変化が起こる以前の暮らしを調査している。

二 本書に記した情報は、原則として、令和三年度から五年度までの間に実施した地域住民への聞き取り調査や現地調査から得られた内容を記している。可能な限り、調査者の見解をまじえず、聞き取った内容をそのまま表記しているが、十分な情報が得られなかった一部の項目については、文献などを参照して補足している。本事業に伴う調査体制は次のとおりである。

三 民俗分野調査員

市川 秀之 滋賀県立大学教授

大塚 活美 元京都府立京都学・歴史館職員

米田 実 元甲賀市教育委員会職員

令和六年度事務局

東近江市企画部長

企画部次長

企画部管理監

政策推進課森の文化博物館整備室

室長

参事

曾羽道明

中堀智之

古川 暁

西川 寛

明日一史

主任

西堀太貴

主任

竹村祥子

四 ムラの配列は、地方公共団体コードを基準としている。地名の表記は年代によって異なるため、明治期の大字名を基礎単位としている。

五 青野町住民への聞き取り内容は、永源寺ダム建設に伴う移住前の居住地（佐目、萱尾、九居瀬）の章に統合した。

六 蛭谷・茨川の章については、東近江市参与筒井正が個別に調査を行った内容を追記している。

七 民俗語彙については原則カタカナで表記し、適宜（ ）内に補注を付けている。

八 資料・行事の写真撮影は映像工房出水に依頼した。

九 本書刊行に伴う執筆・編集については竹村が行い、民俗分野調査員の指導・助言を得た。

目次

例言

調査地域概略図

調査概要

第一章

甲津畑の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

第二節 信仰

- 1 神社・寺院／2 信仰組織／3 年中行事

第三節 生業

- 1 山仕事／2 農業

第四節 イエの暮らし

- 1 衣食住／2 人生儀礼

第五節 その他

第二章

和南の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

- 1 ムラの組織／2 年齢組織

第二節 信仰

- 1 神社・寺院／2 信仰組織／3 年中行事

第三節 生業

- 1 山仕事／2 農業／3 その他

第四節 イエの暮らし

- 1 衣食住／2 人生儀礼

第五節 その他

第三章

高野の民俗

第四章

相谷の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

第二節 信仰

- 1 神社・寺院／2 信仰組織／3 年中行事

第三節 生業

- 1 山仕事／2 農業／3 商業／4 その他

第四節 イエの暮らし

- 1 衣食住／2 人生儀礼

第五節 交通・交易

第六節 その他

第五章

佐目の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

第二節 信仰

- 1 神社・寺院／2 信仰組織／3 年中行事

第三節 生業

- 1 山仕事／2 狩猟／3 その他

第四節 イエの暮らし

- 1 衣食住／2 年中行事／3 人生儀礼

第六章

第五節 その他

菅尾の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

第二節 信仰

1 神社・寺院／2 信仰組織／3 年中行事

第三節 生業

1 山仕事／2 農業／3 茶業／4 その他

第四節 イエの暮らし

1 衣食住／2 年中行事／3 人生儀礼

第五節 交通・交易

第六節 その他

第七章

九居瀬の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

第二節 信仰

1 神社・寺院／2 信仰組織／3 年中行事

第三節 生業

1 山仕事／2 農業／3 茶業／4 その他

第四節 イエの暮らし

1 衣食住／2 年中行事／3 人生儀礼

第五節 交通・交易

第六節 その他

第八章

蓼畑の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

第二節 信仰

1 神社・寺院／2 信仰組織／3 年中行事

第三節 生業

1 山仕事／2 農業／3 茶業／4 その他

52

第九章

第四節 イエの暮らし

杠葉尾の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

1 ムラの組織／2 年齢組織

第二節 信仰

1 神社・寺院／2 信仰組織／3 年中行事

第三節 生業

1 山仕事／2 農業／3 その他

第四節 イエの暮らし

1 衣食住／2 年中行事／3 人生儀礼

第五節 交通・交易

第六節 その他

第十章

黄和田の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

第二節 信仰

1 神社・寺院／2 信仰組織／3 年中行事

第三節 生業

1 山仕事／2 農業／3 その他

第四節 イエの暮らし

1 衣食住／2 年中行事／3 人生儀礼

第五節 交通・交易

第六節 その他

第十一章

政所の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

第二節 信仰

74

45

38

67

59

第十二章

箕川の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

第二節 信仰

第三節 1 神社・寺院／2 信仰組織／3 年中行事

第三節 生業

第四節 1 山仕事／2 茶業／3 農業／4 その他

第四節 イエの暮らし

第五節 1 衣食住／2 年中行事／3 人生儀礼

第五節 交通・交易

第十三章

蛭谷の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

第二節 信仰

第三節 1 神社・寺院／2 信仰組織／3 年中行事

第三節 生業

第四節 1 山仕事／2 その他

第四節 イエの暮らし

第五節 1 衣食住／2 年中行事／3 人生儀礼

第五節 その他

第十四章

君ヶ畑の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

83

92

100

第十五章

茨川の民俗

ムラの概要

第一節 社会組織

第二節 信仰

第三節 1 神社・寺院／2 信仰組織／3 年中行事

第三節 生業

第四節 1 山仕事／2 農業／3 その他

第四節 イエの暮らし

第五節 1 衣食住／2 年中行事／3 人生儀礼

第五節 交通・交易

第六節 その他

1 ムラの組織／2 年齢組織

第二節 信仰

第三節 1 神社・寺院／2 信仰組織／3 年中行事

第三節 生業

第四節 1 山仕事／2 茶業／3 その他

第四節 イエの暮らし

第五節 1 衣食住／2 年中行事／3 人生儀礼

第五節 交通・交易

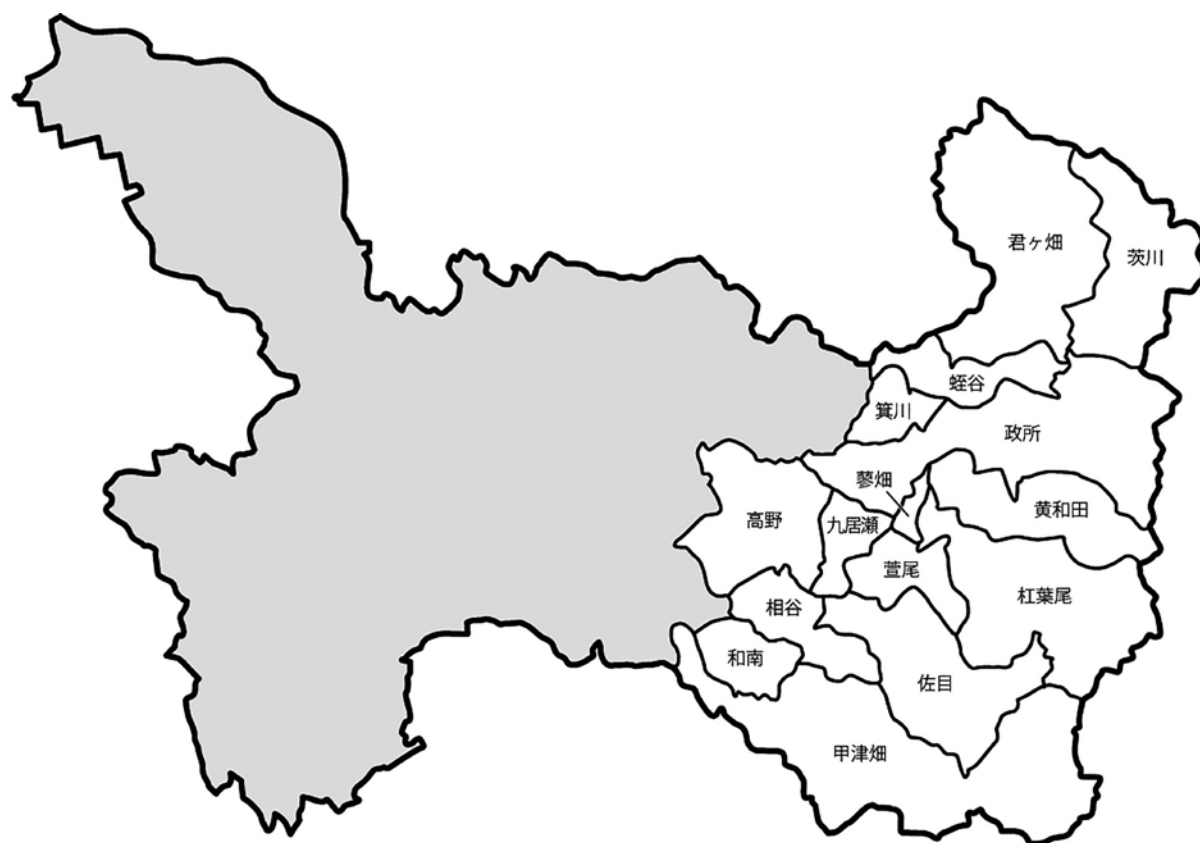
第六節 その他

109

参考文献

協力員一覧

調査員一覧



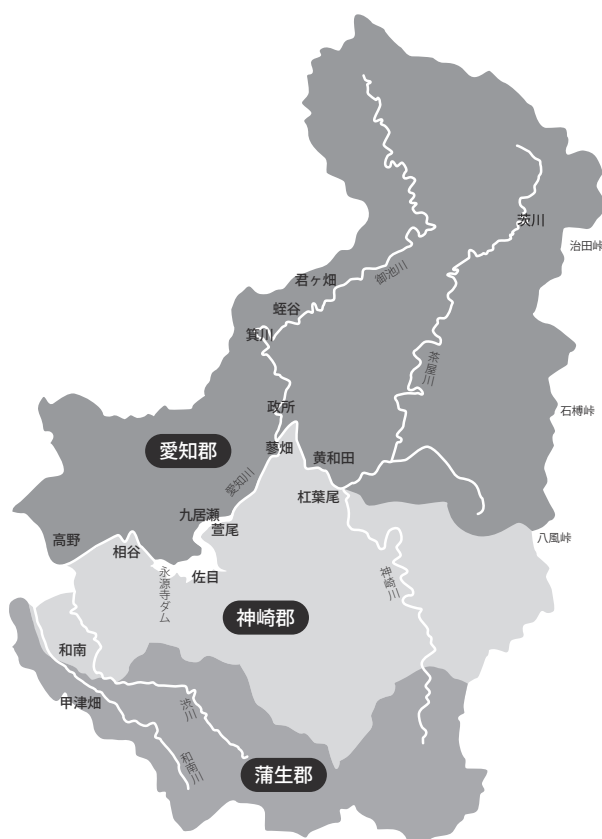
東近江市全体図

調査概要

本調査は東近江市が実施する「森の文化資源調査」の一環として、東近江市の永源寺地区のうち、鈴鹿山脈の山域に位置するムラの民俗を調査対象としている。

鈴鹿山脈は、滋賀県と三重県の県境に位置し、東近江市域では北は御池岳から南は御在所岳まで、約二十八キロメートルに渡って標高千メートルを超える山々が連なる。山と谷が複雑に入り組んだ地形で、街道や集落は谷筋に沿って形成されている。古くから近江と伊勢を結ぶいくつかの峠道が発達し、山奥でも人の往来が盛んだった。

調査地域は、昭和十八年に永源寺村が誕生するまで、三つの郡に分か



調査地域の旧郡域図

れていた。旧神崎郡山上村（和南、高野、相谷、佐目、萱尾、蓼畑、紅葉尾）、旧愛知郡東小椋村（九居瀬、黄和田、政所、箕川、蛭谷、君ヶ畑、茨川）、旧蒲生郡市原村（甲津畑）と、川や山の尾根を境界として郡域が分かれている。インフラや交通手段が発達するまでは人々の生活圏もこれと密接に結びついていた。

どのムラでも面積の大半を山林が占めていることから、古くから山仕事为主要な収入源で、薪炭生産、木材生産、茶生産などの立地を生かした生業が盛んに行われた。また、山菜、キノコ、川魚などの身近なものを食料にしたり、屋根材にカヤや檜皮などの植物が用いられたり、様々な形で山林資源が利用されてきた。信仰に関しては、自然が生活の基盤であることから、山の神、水の神といった自然神への信仰が今でも根強く残る。ムラごとの祭祀組織を中心に、様々な神事が執り行われている。

高度経済成長期が大きな転換点で、昭和中期以降には薪炭や木材需要が激減し、山仕事で収入を得ることが困難になった。また、高等学校・大学の進学率も上昇し、進学や就職を機とした都市部への人口移動が起るようになった。昭和四十年には茨川が廃村になり、永源寺ダムの建設用地にかかった相谷、佐目、萱尾、九居瀬の多くの家が昭和四十年代までに水没した。この時期の社会情勢や生活様式の変化に伴って習俗や伝統文化は大きく様変わりしている。

本調査では、これまで文字に記されることが少なかった山域の人々の生活や信仰などについて、ムラ単位で情報を収集・整理した。主に高度経済成長期以前を対象としているが、その前後の時代の内容も混在している可能性があり、今後の調査の進展に伴って変更や訂正が生じる可能性があることをお断りしておきたい。

第一章 甲津畑の民俗

ムラの概要

永源寺地区最南部に位置するムラで、三重県境まで地先が続く。千草越えで知られる千草街道は、甲津畑を通って東行し、千草（現三重県菰野町千草）に至る。千草街道は、中世には保内商人の道として知られ、近代には鉱山開発の物資運搬にも利用された。集落は谷底平野の突き当りに位置し、ムラの大半が山林であることから、昭和半ばまで炭焼きが盛んに行われた。

第一節 社会組織

戸数 かつては百八十戸ほどあった。令和五年時点は百二十七戸である。
組 上出、中出、塩津々、風呂ノ北、門口、南谷の六組に分かれる。
苗字 黒川姓、田井中姓、速水姓、古川姓、蒲生姓などが多い。ムラの中に親類が多い。

第二節 信仰

1 神社・寺院

藤切神社 主祭神は宗像三女神（田心姫命、市寸嶋比売命、奥津比売命）。境内社に春日神社を祀る。甲津畑は交通の要衝のため、再築の際には遠方からも寄進を受けた記録が残る。御旅所や神輿などはない。

浄源寺 浄土真宗本願寺派。山号 桃花山。蓮如上人に帰依した頓入が開いた道場が始まりと伝わる。

浄光寺 浄土真宗本願寺派。山号 玉尾山。十五世紀に天台宗から浄土真宗に改宗したと伝わる。以前は藤切神社付近に堂があった。

登谷不動尊 和南川左岸の道沿いに不動尊の祠がある。隔年の四月第二日曜日に祠の塗装を修繕している。

桜地藏 千草街道沿いの橋の近くに祀られている。大きな桜の木があったことからその名が付いたと伝わる。鉱山の隆盛を祈願した鉱山経営者からお堂が奉納され、赤金地蔵と呼ばれていた時期もある。

愛宕の祠 ムラの中に愛宕社の祠が三箇所ある。後述のタンパラヘソ行事の時に札を交換する。

山の神 集落の向かい山に、山の神を祀る場所があった。今では藤切神社の境内に場所を移して祀っている。

2 信仰組織

ムラの男性は一定の年齢になると、同年齢集団や宮役に属する。青年団、消防団を経て宮役になり、弓矢、歩役、十人衆、社守、氏子総代の順に役につくのが通例だったが、人口減少によって組織や行事のあり方が変化してきている。

神社の組織

宮役 藤切神社、登谷不動尊、桜地藏の世話を行う組織を総称して宮役と呼ぶ。

弓矢 弓矢は宮役の若手で、三十五〜四十歳くらいの男性が加入する。かつては弓打ちの儀式があり、藤切神社大祭の時に弓矢を持つことからその名がついたと考えられる。一年に三人が加入し、その人の親の歳の順に長、中、穴と格付けられる。主に春祭りの時に参加し、直会の膳を並べたり下働きをしたりする。各役の心得を記した帳面があり、それを読み込んで役を務める。昔は二十五人ほどいた。

歩役 弓矢の次は歩役になる。歩役は定員が三人で、昔は六十歳の祝と

呼び、六十歳になる人が務めた。行事が始まる前に「宮へ参らいな」と声を上げてムラ中に触れ歩くのが主な仕事である。社守の下働きや弓矢の指導をする重要な役で、粗相があれば十人衆から叱られた。歩役は一年で卒業し、十人衆に昇格する。

十人衆 十人衆というが、定員は九人である。リーダーである頭役があり、行事などで発言力がある存在である。頭を務めた人は、そこで宮役を卒業する。現在は人数が減り、弓矢と十人衆を兼ねている。

社守 十人衆の中から一人選ばれる。妻帯者が務めるのが一般的である。社守を決めるクジは八月末に引く。昔は一月上旬にクジ引きを行っていたが、忌などで少しづつ遅れていき、今では八月になった。現在は年齢順に社守に当たる。任期は一年で、終わると宮役を卒業する。

かつては社守に当たると、神さんを家で一年間預かった。十人衆、歩役が列をなして、旧社守宅から新社守宅へ神さんの屋移りをする。預かるためにはオクノマに一間幅の神棚が要るが、無い場合は造作する。社守はその部屋で毎日寝起きし、お光と水を上げる。任期中は、女人禁制、四つ足の生き物を食べてはいけない、仏壇は閉めておくなどの決まりがある。また、毎月二回の藤切神社の参拝に対応し、境内の掃除は二、三日置きに行き、絶えずきれいにしておく。現在では、神さんは各家ではなく藤切神社の帳屋（社務所）にいるように変更している。

氏子総代 ムラの中の選挙で選ばれる。社守や十人衆を終えた人が担当する。

宮役の衣装 宮役は白い服、十人衆は袴、弓矢は紋の入った麻の宮衣を着た。

宮司 甲津畑には專業の神職がいないため、宮司は市宮神社（八日市地区）に依頼している。

寺院の組織

世話方 浄

土真宗寺院には世話方（世話方）がいる。世話方は十人おり、箱番、副、会計の三役を選挙

で選ぶ。寺の行事は年に四、五回ある。八十代以上の人は講衆に入り、仏具などの磨きものをしたりする。

3 年中行事

神社の行事

毎月の行事 毎月一日、十六日に社守が神社へ参る。その日は早朝から午前十時頃まで神社に待機して、ムラの人の参拝に対応する。

元旦祭 ムラの繁栄と五穀豊穡、氏子の加護を祈願する。これは帳屋で行う。

山の神祭り

山の神は、かつてはムラの向かいの山にあった。二股に分かれた松の木を枝を「神体」の「神馬」とする。七日粥の頃に朝五時頃から、社守、十人衆、歩役が藤切神社に集まり、火を焚いてお参りする。ムラの住民もお参りに参加し、木の枝を三本持つて帰ってそれで飯を炊くと豊作になると伝えられる。現在は、山の神を帳屋の裏手に移し、正月に神事を行っている。



写真1 山の神の神馬（平成初期）
「永源寺の歴史探訪」より転載



写真2 福踊り（平成初期）
「永源寺の歴史探訪」より転載



写真3 タンパラヘソ (令和7年)



写真4 タンパラヘソ (令和7年)

福踊り この行事は「ソソソソ」「福蛙」とも呼び、五穀豊穡を願う神事である。一月第一日曜日に宮役全員が帳屋に集まり、神事を行う。弓矢に入った三人の長が踊りを担当する。湯神楽を巫女が舞う。弓矢が鉢と棒を持ち、カエルのように飛び跳ねる動作をする。かつては参加人数が多く、十分間ほど踊ったという。

経木並べ 藤切神社の参道沿いに月ごとの祭神の名を書いた経木を並べる。福踊りと同日に行っていたが、令和七年は元日に並べた。

タンパラヘソ 行事名の由来は不明である。甲津畑で大火が起こった後から始まったと伝承されているが、いつの時代か詳細な記録は残っていない。火災の被害者の供養と鎮火祭を兼ねていると考えられている。焼失範囲の端に愛宕の祠が三つ設置されたと伝わる。以前は一月九日の行事だったが、現在は一月第二日曜日に変更している。

当日の早朝に、三組（カミ、ナカ、シモ）の愛宕の祠の管理者が祠本体を持って自治会館に集まる。神事を行い、木札を新しいものに交換する。管理者は祠を元の場所に持ち帰り、また一年間管理する。神事の供

物は、清水、瓢箪、川菜、埴土と決まっております。川菜は藻のことである。祝詞にこれらの供物の名が記されており、いずれも火に強い

とされるものである。

豊凶占い 一月に行う。女竹に米を詰め、水に入れて一日置く。翌日に小刀で竹を削り、その詰まり具合から豊凶を占う。

晴雨占い 藤切神社のイロリで豆を焼き、晴雨占いをする。かつては二月だったが、今は正月に行う。鉄板に一月から十二月までを表した窪みがあり、そこに大豆を入れて焼くと焦げ目がつく。その結果を紙に写し取って印刷し、必要な人に渡した。例えば、「二月は上旬が晴れ」、「中旬は雨」、「下旬は晴れ」といったように天気の結果を出し、丸の図に墨で線を引くことで表現する。

節分祭 藤切神社で歩役や十人衆が豆撒きをする。その時、「鬼は外」とは言ってはいけないとされており、これは鬼を祀っている場所があるからだといわれる。

春祭り 三月の第一日曜日に行う。米の豊作を祈る。

藤切神社大祭 四月四日が宵宮、四月五日が本祭だったが、現在はその直前の日曜日に行っている。宮役が会議所から神社まで行列をする。宮司、巫女、社守、十人衆、歩役、弓矢の順に並ぶ。太鼓堂で太鼓を鳴らす。番場流しと呼ばれる湯神楽を巫女が舞う。前年に生まれた子供の祓もこの日にする。

直会とは帳屋で行う。弓矢が供物の膳を用意し、ツバキ、ユズリハ、ウラジロなどの葉を供物の器の代わりにして三宝に載せる。葉の器は、社守が事前に準備しておく。

夏の大祓 六月第三日曜日に行う。六月の大祓を「夏越なごしの祓」と呼ぶ。大祓詞をあげ、白紙の人形を用いて半年間の穢れを祓う。

八朔 八月一日に近い日曜日に行う行事で、米の収穫を祈る。巫女の神楽と祓がある。紙型を撫でて、登川（和南川）に流す。

燈明 十月第一土曜日の夜に燈明に火を灯す。燈明の翌日に湯神樂を行う。

秋祭り 新嘗祭。豊作に感謝する神事を行う。

亥の子 十一月の亥の日に、多産のイノシシにあやかっ子孫繁栄を祈る。

冬の大祓い 十二月三十日に、年越しの祓いと正月準備を行う。同日に宮役がしめ縄を作成する。社守が秋からワラや稲穂などを集めて準備しておく。

寺堂の行事

永代経 春と秋に永代経を行う。

報恩講 浄源寺と浄光寺の二箇寺にとつて、報恩講が年間で最も大きな行事である。三日間行い、九時、一四時、夕方と一日三回程を唱える。布教師が来る。

蓮如講 浄源寺には蓮如講、浄光寺には番方講があり、いずれも蓮如上人に關係する蓮如講である。

第三節 生業

甲津畑は圧倒的に炭焼きが多かった。昭和三十年代にプロパンガスが普及するまでは、ほぼ全村を上げて炭焼きに取り組んでいた。多くの家は兼業で、田や畑の作業の合間や冬季の仕事として炭焼きを行った。

1 山仕事

割山 甲津畑は三重県境まで地先が広がり、それを割山として各家に分けている。ムラの六組に対して分けたものを、さらに組の中の二十〜三十軒の家で分けているため、同じ組の家の割山は隣接している。割山

の面積は、ムラに近く便利な場所は狭く、山奥で不便な場所は広く設定されている。当初の分割はクジ引きで決めたと考えられるが詳細は不明で、後世の山の売買によって持ち主が変わっている場所もある。

共有林 ムラの共有林を村山と呼ぶ。今は財産区の財産となっている。現状では杉の植林山になっていて、以前は年に二度ほど間伐に入った。個人山より面積が広い。

惣山 村山、財産区の山とは別に惣山が設定されている。橋などの公共物の近くにあり、修繕用の材を惣山で確保している。

炭焼き 戦中が最盛期で、百八十戸（八百人）余りが炭焼きに従事していた。戦後もムラの七割以上が炭焼きに従事していた。積雪期を除いて一年中炭焼きを行い、雪が溶けるまでは炭俵作りなどの内職をして春に備えた。プロパンガスが普及してから炭焼きは目に見えて減り、昭和三十五年頃には炭焼きはほとんどなくなってしまった。

炭を焼く場所は自分の持山に限らず、雑木山の所有者に依頼して入札を行ったり、山ごと買ったりすることもあった。大河原山（現甲賀市土山町大河原）や、三重県の伊勢山（御在所ロープウェーの下）辺りでも炭を焼いていた。遠く離れた場所には居小屋を建て、泊まり込みで炭を焼いた。伊勢山だと甲津畑から歩いて三時間はかかり、泊まりでないと作業ができない。泊まるほどの距離でなければ、夜明け前にムラを出て、同日中に炭を持って帰り、すぐに業者に売って現金に替えた。

炭窯 炭窯は山の中に築き、周囲の木を切り尽くしたらその窯は放棄して、また違う山に新たな窯を築く。炭窯は生産量で呼称が変わり、四貫俵（約十五キログラム）を二十五俵（百貫）焼ける窯なら百貫窯と呼ぶ。百貫窯が一番小規模で、大きい窯なら百俵分は焼けた。

炭窯作り 炭窯は石積みで基礎を作り、石の隙間を土で塗り込めて土台

とした。その内部に木材を敷き詰めた上にムシロを置き、その上に天井となる土を被せ、板状のもので叩いて土を固めた。この作業をカマツキと呼び、五、六人の炭焼き仲間の手伝い合って作った。昔の窯の天井は全て土で作っており、しばらくすると崩れたため、鉄板で補強するようになった。谷によっては熱に強い性質の土が見つからず、他所から運んでくる必要があった。土や石は試し焼きして、丈夫な土だと確かめてから使った。窯作りの中で一番慎重に行うのは煙出し（煙突）の部分で、煙出しの勾配によって炭の品質が決まった。

炭窯の立地 炭窯は、道沿いや川沿いに築くことが多い。古い窯の跡を再利用することもあった。古い窯の石は高熱に耐えられる石が選ばれているので使いやすかった。窯を設置する場所、木を伐る場所、木を寄せて積んで置く場所と、それぞれに一定の面積が必要である。風向きはあまり気にしないが、焼いている時に煙たくて困る場合がある。

炭小屋 窯ができる、それに屋根を架けて小屋状にする。雑木の枝で合掌を組み、杉皮で葺く。一度炭焼きが行われた場所には杉が二、三本植えてあることが多く、その皮を利用した。杉皮は、天日に晒されると反って雨漏りするので、杉皮の上にカヤを重ねた。現地で杉皮を得られない場所は、近場でカヤを刈って葺く。カヤもない場合は、家からムギワラを持参した。

炭焼きの工程

・口焚き

初日は窯に木を詰め、焚き口付近で火を焚く「口焚き」を行う。窯と木材を乾燥させ、徐々に窯全体の温度を上げていく。

・窯つけ（火入れ）

二日目に、炭になる木材の上部に火を着ける。

・中火

木材の上部に着けた火を下部まで回していく工程を中火と呼ぶ。全体に火が回ると、焚き口を閉じ、覗き穴だけ残す。窯の中は青い火が回って千度を超える。

・窯籠め

三日目に焚き口を完全に塞ぎ、煙出しから出る煙の色や匂いを見ながら、煙突の開き具合を調節する。最終的に全ての口を閉じて空気を遮断する。密封するタイミングの見極めが難しい。窯の作り方や土質が悪いと、空気が流入していつまでも火が消えず、木材が燃え切って灰になってしまう。窯籠めが終わってから一週間ほど放置にして、窯が自然と冷めるのを待つ。

炭の樹種

甲津畑の山に生える木は、杉、ヒノキ、松以外の雑木が多い。炭の材として最も上等なのはカシ（カシ、ヒラカシ）、次いでナラ（コナラ、ミズナラ）、シデと続く。ウバメガシはないため、備長炭は生産しなかった。カシは堅くて重く、火力が強く火持ちもよいため、同じ四貫俵でも別の樹種より高額で売れた。木の「タネ」の良し悪しは重さで分かり、良い木は重く、そうでない木は軽いという。

炭の出荷

炭の寸法と重さを揃えて炭俵（四貫俵）に収め、セタ（背板）で背負って平地まで運び、男性は運搬用の自転車の荷台に五、六俵積んで里まで下ろした。女性は一輪車を用いて運んだ。出荷先は、八日市の問屋が農協が多かった。八日市からトラックで買い付けに来ていた。

炭の販売

昭和前期には、女性が炭、割り木、柴、杉葉などをリヤカーに混載して、八日市まで歩いて売りに行くこともあったという。「炭いらんか」という売り声をかけ、得意先を回った。炭焼きをしていない家が代理販売をしている場合もあったようである。

材木屋 「材木屋」は時代によって定義が変わり、規模も様々であった。戦前の材木屋は山の中で丸太を柱や板に加工して里に下ろしていた事業者のことである。現在の材木屋は、植林した杉・ヒノキを伐採する事業者である。セン（架線）で出すようになったのは外部の企業が入ってからで、それまでは木材は斜面を滑らせて下ろし、平地から馬車で運搬していた。戦時中まで銅鉾山が利用されていたので、かなり奥まで林道が開かれており、牛車や馬車を入れる事ができた。

カヤバ ムラの共有のカヤバは、ヨシガヒラ、ナカジウマヤ、オクジウマヤの三箇所あった。いずれもムラから歩いて一時間半から二時間ほどかかる尾根に近い山奥にあった。現状はいずれも栗林になっている。十五町歩ほどの広さがあり、話者の子供の頃は雪が積もるとそこでスキーができた。カヤは主に炭俵作りに用いられ、一部を屋根葺き用にした。

カヤ焼き 翌年に良い芽を出すことを目的として、青年団が管理するカヤバを焼いた。若草山の山焼きのような光景だった。カヤバに入る時期（口開け）も青年団が管理しており、毎年十一月二十五日頃だった。この風習は昭和三十年代半ばに終わった。

焚き物 生木の採集は各家の持山に限られるが、枯木に限ってはどの山で採っても問題なかった。柴集めは子供の小遣い稼ぎであり、枯柴が少しでも多く欲しいので、生木を伐って枯木のように見せかけたり、早く枯れさせるために木に傷を付けたといった悪さをしたことを覚えている。山から持ち帰ると、それを買う業者がいた。山に入る時期の制限はなかったが、冬の間は雪で入ることができない。

運搬道具 セタは女性用と男性用で分けられ、女性用はホイナワ（追い縄）、男性用はオイネといい、オイネは四俵の炭俵を積むことができた。

話者の妻の嫁入り道具の中には、セタとミノ（雨具、炭の運搬時の背中当て用の二種類）が入っていた。山仕事をする家に嫁ぐため用意してくれたものである。

2 農業

田 田を持つ家は自家用程度の生産量で、平均五反ほどだった。裏作の麦は牛の餌に利用した。

畑 山裾の斜面に小さな畑を作ることが多い。小字堂所^{どうじょう}、ホウナギに多い。

茶畑 茶畑はムラの近くにも遠くにもあった。小字長谷などにあった。食糧難の頃には茶とともにサツマイモなどの野菜も植えた。小字長谷の辺りにあった。

粃穀 粃穀は肥料などに利用した。脱穀後、リヤカーで家まで持って帰り、ムシロの上に広げて乾燥させた。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

食生活

主食 近隣のムラは麦飯や糧飯^{かてい}が多かったというが、甲津畑は麦飯でなく白米をよく食べる地域だった。

川魚 イワナ、カジカ、アカザなどが獲れた。昔はアメノウオ（ビワマス）、ウナギ、アユも遡上してきたが、堰堤が設置されてからは獲れなくなった。

山菜 クサギ、山椒、イタドリ、フキ、タラノメ、イボナなどを採った。
キノコ マツタケ（マツタケ）はよく採れたが、商品にはせず自家用に

した。倒木にはシイタケが自生していた。カワムキ、スドシなどの雑茸も採って食べた。

木の実 秋になると柴栗が米袋一杯に採れた。トチの実は少なく、落ちているのは見かけたが食用にはしなかった。

茶 家の茶畑で葉を採って自家製の茶を作った。

保存食 フキ、イタドリ、ゼンマイなどの山菜の塩漬。大根、ナス、キュウリの漬物。梅干し、紅シヨウガなど。

弁当 山仕事に弁当を持って行つた。おかずは漬物くらいだった。

食事の回数 山仕事をしている人は、一日四回食事をした。

住生活

間取り デ、ダイドコロ、ヘヤ、オクノマ、ニワ（土間）がある。

ニワ カマド（大小）や風呂、牛を飼うマヤ（厩）があった。牛を飼う家のカマドは、牛の餌となるヌカやワラを焚くため大きかった。

ヘヤ 寝所として利用した。

オクノマ 奥に仏壇がある。寝所としても利用した。

ダイドコロ イロリと神棚があった。神棚にはお札（伊勢神宮外宮・内宮、愛宕、荒神山、藤切神社など）を供える。

屋根 かやが入手しにくいため、ムギワラ葺きの家が多かった。

燃料 燃料には薪を使った。炭焼きで出たキジリ（木尻、炭の小端）も捨てるのはもったいないので、自家用の燃料として使っていた。

風呂 丸い形状の桶風呂で、焚口は外にある。水道が整備されていない頃は、井戸、川、水路の水をバケツで汲んで入れた。

水の確保 水路の水は、洗い物にも使った。家の前に水を堰き止めて小さな池を作り、そこで野菜や茶碗を洗った。飲み水には井戸水を利用し

た。井戸がない家は他所の家に水をもらいにいった。ムラの山手は粘土質で湧水が出るため、そこに汲みに行くこともある。

ツシ 甲津畑には二階建ての家はほとんどなかった。ツシのような物置きはあった。

蔵 多くの家に蔵があり、米などを入れていた。

2 人生儀礼

葬儀 葬儀は家で行い、親類や隣組を合わせて五、六軒が手伝った。墓地までの一キロほどの距離を行列で遺体を運び、血縁の濃い人が先頭で松明を持った。通夜（夜番）は葬儀から四日間行う。四日目の晩が「七日」になる。

棺桶 棺桶は縦棺で、形状は四角だった。

墓 墓はサンマイと呼ぶ。土葬の頃の旧墓地と、火葬になってからの新墓地がある。土葬用の共同墓地はムラの西の方にあった。造花、果物、饅頭などを供えた。隣組の者が穴掘りを手伝った。空いている区画に遺体を埋めた。昭和十八年生まれの話者は、父の葬儀を行った頃はまだ土葬だったことを記憶している。

忌明け 男性は四十九日、女性は三十五日で行う。

第五節 その他

シナの利用 漁に用いるビクは、麻もしくは科しなの繊維で作った。シナの木はムラの周辺に生えている。

第二章 和南の民俗

ムラの概要

甲津畑と相谷の間に位置し、集落は和南山の山裾にある。旧神崎郡山上村に属した。多度神社の東方尾根には和南城跡がある。ムラの面積が狭く利用できる山地や農地が少ないため、兼業農家が多く、茶業、養蚕、炭焼きなど複数の生業を兼ねることで収入を得た。また、松山が多く、マツタケの出荷量が永源寺地区の中で最多であった。

第一節 社会組織

1 ムラの組織

戸数 令和五年時点で六十二、三戸あり、話者の子供の頃が七十戸ほどだったので、大きくは増減していない。

区分け 古くから上出^{かみで}、中出^{なかで}、寺出^{てらで}の三つに分かれている。

組 昭和の頃は十三組（二組当たり五戸）に分かれていたが、令和になつてから九組（一組当たり約七戸）に変更した。

2 年齢組織

若い衆 かつては、男性は中学卒業から数え年の二十五歳まで、女性は二十三歳くらいまで所属した。二十五歳以上の男性は消防団に移行した。神社の祭りや、寺の境内にある地藏堂で行う地藏盆に深く関与したほか、共有林内の一部を「青年の山」として管理育成させていた。昭和前期には運動会を開催したり、会誌を発行したりしていた。

青年団 祭りの世話や、ムラの境界回り^{けいかい}をした。祭りの幟の木棒を立てるのは青年団の仕事だった。境界回りは主に十一月頃に十人ほどで歩き、

ムラの境界に杭を打ったりした。今でも三〇五年に一度、ムラで境界回りを行っているが、徐々に分からなくなりつつある。昔の境界回りは、春祭りの後宴の日に片付けが終わってから行った。



写真5 和南全景（昭和30年代）
横山鉄男氏提供

第二節 信仰

1 神社・寺院

多度神社 主祭神は天之御影神。境内社に日吉三山王社、天神社、綿津海社を祀る。

光明寺 臨済宗永源寺派に属す。山号 龍燈山。元は天台宗和南寺だったが、十五世紀に臨済宗に改宗したと伝わる。境内に白山大権現などを祀る。

2 信仰組織

神社の組織

社守 字神主のことを社守と呼ぶ。社守の任期は四月十六日から一年間である。事前の準備が必要のため、三月十六日にクジで社守を決めておく。三十〜五十代の男性の中から、三、四人の候補者を氏子総代があらかじめ選んでおく。名簿を本社に供えて、社守が供物と一緒に下げて氏

子総代のところへ持って行く。昔は当たらずに終えた人もいたが、今は人口が減ったので必ず回ってくる。

毎朝、多度神社に参る前に水で体を清めるため、朝に風呂場で水をかぶる。夜に参る時は風呂に入ってから参る。話者の父親の代は、川や池で清めを行い、冬場で氷が張っているとその氷を割って水をかぶったという話も聞いたことがある。社守の仕事は厳しく、仕事をしながら朝晩参らなければならないのは辛い。社守を務める間は女人禁制で、妻とも別部屋で寝なければいけない。多くの家は、社守の夫はザシキで、妻はヘヤ（ナンド）で寝起きした。ザシキには用もなく女性が入ることを禁じた。

昔は月二十回ほど行事（燈明など）があった。白装束を着て素足に下駄を履くのが正装で、神社への道中で人に出会っても無言で通さなければならぬ。祝詞を上げ、ムラの安全祈願と水難・火難除けを祈る。本殿を含めて四、五箇所ある参拝場所をそれぞれに同じように参る。

宮司 ムラには専業の神職がいなかったため、山上の歳苗神社に依頼している。宮司が来る行事は春祭り、五月休み、土用三郎、秋休みの四回である。

3 年中行事

神社の行事

春祭り 四月三日がヨイミヤ、四日がホンビ、五日がゴエンである。宵宮は夜に百灯を灯す。ホンビは神事と湯祈禱を行う。ムラの人は神事の前に参拝する。昔は五日に片付けをしてから山に行っていた。

五月休み 麦の収穫後に行う神事を五月休みと呼ぶ。

土用三郎 夏の土用の三日目のことを指す。この日に神事を行う。

秋休み 米の収穫後に行う神事を秋休みと呼ぶ。

行者講 昭和四十年頃まで行っていた。行者講は講員の数も少なく、好き寄りだった。講員集合の後、般若心経を唱える。数年ごとに大峰山参詣に行った。

愛宕講 愛宕講は平成の終わり頃まで行っていた。愛宕神社を祀る講中で、般若心経を唱えた後に会食し、愛宕神社の札とお下がりをもらった。愛宕講と神明講は、ムラの組ごとに分けて行われた。

神明講 神明講（シメ講、伊勢講）は平成の終わり頃まで行っていた。天照大神を祭る講中の集まりで、神明講から派生した講もあった。ここでは飯と酒が出た。昼食の後、ムラの住民が集まりマツタケ山の競売を行っていた。

代参 愛宕講と神明講は、毎年代参を行っていた。昔は愛宕講に当たると、女性は着物を着て下駄を履いて代参したという。話者の父親の時代には、行者講に行く家人を集落の端まで送迎して、代参の間の三日ほどは家で待つ者も精進料理を食べていた。

山の神 今は山の神も野神も祀っていない。かつては山の神があったと聞くが、詳細は不明である。

寺堂の行事

正月 光明寺と多度神社に年頭の挨拶をする。

白山祭り 白山祭り（白山講）は会員になっている人のみ参加する。光明寺の境内に祀られている白山権現は、鎌倉時代の勧請と伝えられ、三月五日に白山祭りが行われている。

盆行事 八月七日頃に僧侶が家に来るので、一緒に墓に参る。八月十三（十五日はオシウライサン）が来るので、十三日にお飾り、十四日に僧侶の読経、十五日に和南川に送る。かつては供物を川に流していたが、



写真6 盆行事(昭和30年代)
横山鉄男氏提供

近年では線香とロウソクを上げるくらいになっている。また、盆前には夏祈禱を行っている。

地藏盆 光明寺の境内に地藏堂がある。地藏はムラのあちこちにあるが、地藏盆は光明寺だけで行う。

第三節 生業

農家が多かったが、田は多くても一町歩程度で、一戸当たりの平均は四、

五反ほどだった。兼業農家が多く、明治十二年の『滋賀県物産記』によると、和南の全戸が農家で、製茶や炭焼と兼業する例が多く、手工業や商業を行う家はなかった。

1 山仕事

共有林 和南の山は三百町歩ほどで面積が小さく、大部分が共有林である。相谷と佐目の境界辺りにも和南の山があった。共有林の割り当ての仕組みは、五人組ごとにクジ引きで決めたため、毎年山の場所が変わる。山の口開けの当日の朝、現地でクジを引いて場所を決めた。マツタケが盛んに出ているような山は除き、マツタケの出が止んだ山の木を皆伐して、伐採した跡地に植林を行った。木の葉を集めたり枯れ木を伐って割り木にしたりして、セタで持って帰って燃料にした。

材木生産 昭和四十年代までは五、六軒あったと思われるが、詳細は分からない。昭和四十五年には、和南生産森林組合が設立されている。

山の口 止め山(入山禁止)が終わることを「山の口があいた」といった。区長から「何日から山の口があくぞ」と触れがあった。十二月十一日頃

が多く、終わりの時期は特に決まっていなかった。マツタケの時期が終わった頃に山の口をあけて木の葉かきをした。

山の入札 炭焼きに使う雑木の山や、マツタケが多い山は、競りにかけた。雑木も松も分けずにまとめて売った。炭山は、多い時で一、三町歩ほどだった。

炭焼き 炭焼きは昭和四十二、三年頃までやっている人がいたと記憶しているが、昭和五十年には途絶えていた。終戦後から昭和三十年代が最盛期で、ムラの中で五、六軒が従事していた。夕方に炭俵を背負って山から下りると、山の下で仲買業者が待ち構えていて、業者同士で取り合いになるほどだった。業者が炭俵を自転車一杯に積んで帰っていったことを覚えている。

炭焼きを専業とする「炭焼きさん」は、米を生産するより収入が多く、一日作業すると米三俵分の手間賃になった。昭和半ばの頃は炭焼き、農家、勤め人の順で高収入だったといわれるが、技術が必要で危険が伴う仕事でもあり、従事する人はそう多くなかった。火を使うのを怖がる人もいた。炭焼きの技術は親の仕事を見て覚えた。歩いて一時間以内の場所で焼くことが多いため、泊りがけで行くことはなかった。鍛冶屋・瓦焼き用に松炭を生産していた人も一、二人いた。

炭の材料 松、クヌギ、コナラ、カシなどの雑木を用いた。炭にはクヌギが適していた。カシの木は、幹の太さ・長さによって値段が決まるので、幹の周囲に縄を巻いて径を測った。炭用に伐採した場所は植林して、十年後にまた伐採できるように育てた。栗は爆ぜる炭になるのであまり使わなかったが、こっそり栗炭を混ぜて売っていた人もあった。それほど炭の需要があった。

炭窯 炭窯跡は今でも山のあちこちに残っている。石垣を積んで上に土

を被せて叩き、ドーム状に成型した。この作業をカマツキといった。カマツキは、炭焼き仲間と酒を飲みながら協力し合って作った。窯の大きさは様々で、通常は三十俵分（四貫俵）焼ける窯を作り、大きいもので五十俵分、小さいものは十俵分程度だった。屋根は杉皮で葺いた。一メートルの積雪に耐えられるように作った。

炭焼きの工程 木を既定の長さに切って窯に詰め、火を入れてからは、煙の出口と窯の入り口を埋め、焼き加減を調節した。夜中でも火の様子を見に行くことがしばしばあった。煙の色を見てみると、だんだん白くなっていく。やがてその煙が細く引くようになり、煙突の口に渡してある細い枝が炭になっているのを確認してから、窯の空気を遮断する。この作業を「籠める」といった。この時、空気が十分に遮断できていないと、炭にならず燃え尽きてしまい、窯をあけたら何もなかったということもある。四、五日経って窯の熱が冷めたら炭を出す。

居小屋 炭小屋に接した居小屋いごやと呼ばれる小屋を作った。焼けた炭を保管したり、食事をしたりする仮小屋のようなもの。泊まることもあった。**カヤバ** 周辺のムラのカヤバより狭く、二、三町歩しかなかった。

枯れ松 和南は松山が多く、秋になると松を切る場所をクジ引きで決めた。立枯れの松が最も良いが、無ければ生木を伐って自家用の燃料にした。

マツタケ山 和南のマツタケは有名で、旧永源寺町の中で最も出荷量が多く、秋の大きな現金収入だった。共有林のマツタケ山は十数箇所あり、毎年競りを行った。毎年九月十五日に神明講が開催され、昼食後にマツタケ山の競りが行われる。区長代理者が山林委員として執行し、売上はすべてムラの収入になった。多い時は一シーズンに三百万円近くで落札されたこともある。競りに参加できるのはムラの住民に限られ、入札し

た人の家族だけが入山を許可された。マツタケの窃盗が発覚した場合は、盗んだ人が山代をすべて負担するという罰則があった。山の値打ちは、毎年の松茸の出具合やその年の天候などを勘案して決めた。応札する者はだいたい決まっており、基本は一軒単位で、集団での入札はしなかった。シンドカゴが満杯になるほどよく採れた年もあれば、不作になり山の代金で大損する年もあった。収穫期間は二ヶ月と決まっていたが、山によって生える時期に差があるので途切れることなく収穫できた。

マツタケの出る場所はいいたい決まっている。マツタケが輪のように生え、盆踊りをしているように見えるのでオドリマツタケと呼んだ。この輪は一年に十センチほど広がっていき、隣り合った輪同士が接すると生えなくなるといわれている。マツタケ山の入札は昭和五十年頃までやっていたが、それ以降は松枯れが相次ぎ、マツタケも取れなくなってしまうた。

マツタケの出荷 八百亀（山上）や八百駒（八日市）といった食料品店や仲買業者が仕入れに来て、マツタケの出来を厳しく見極めていた。ヒラキ（傘が開いたもの）とコロ（小粒のもの）に分けて目方を測って出荷した。大きくてまだ傘が開ききっていない状態のものを選んでいた。

柴・薪 枯れ木の枝は柴にし、残った幹は割り木にして薪として使った。薪は松よりもクヌギ、コナラ、カシなどの雑木の方が使いやすく、火持ちがよかった。売りに出す薪は、長さ、束の径、本数などの規格があった。長さは尺六（一尺六寸）、尺四（二尺四寸）などと決まっていた。

木の葉かき 松葉や雑木の落ち葉を自家の燃料として集めることを木の葉かきと呼び、これは主に年配女性の仕事だった。朝早くからテコマデ（手熊手）を手にして木の葉かきに出た。

運搬道具 背板（セタ、セイタ）で木材を運搬した。



写真7 収穫風景（昭和30年代）
横山鉄男氏提供

2 農業

田 水田で米を作った。稲の収量は昭和三十年頃で反当六、七俵程度だった。昭和四十年頃までは、裏作で麦や菜種を作った。裏作をしていた頃は田植えの時期も遅かった。麦畑の前で水苗代を作った。わずかししか植えられないような小さな田をたくさん作った。

麦 多くの家が裏作で麦を作っていた。高畝を作って植える。色は黒く、

味はおいしくなかったが、一、二年で多量に貯蔵することができた。裏作で小麦を作ると田の土が荒れる（痩せる）といい、必要な量を畑で栽培する程度だった。最後まで作っていたのはビール麦で、ビール会社と契約して栽培していた。

菜種 裏作で菜種も作った。菜種はカマスに入れて、八日市から回ってきた油屋に油締めをしてもらい、絞りがすは肥料にした。

茶 近代以降、製茶が盛んだったと聞く。昭和二十四～四十五年までムラの中に茶工場があった。現在では自家の飲み茶を作る程度である。

肥料 昔はマヤゴエ（牛馬の糞）、菜種カス、ニシンカスなどが主な肥料だった。戦前にはニシンカスを用いたようだが、戦中に一度途絶え、戦後にも少し使った時期がある。マメカス（大豆カス）が満州から輸入されたこともあった。愛知川に落ちている石灰石を拾って焼き、生石灰を作ったこともある。大正時代の記録には、惣草（そうくさ）といって、村人が総出で山の草を刈って肥料にしていたとある。

3 その他

養蚕 昭和三十～四十年代まで、多くの家で小規模な養蚕を行っていた。春、夏、秋の三回行った。デノマに棚を置いた。桑の葉が濡れていると蚕が弱るため、朝露に濡れる前に起きて葉を摘んだ。

漁法 アユ、ビワマス、イワナ、アマゴなどを獲った。夏から秋にかけてはアメノウオ（ビワマス）が遡上してきた。渋川や和南川の奥の水たまりのような状態になった場所にイワナやアマゴがいた。

アユやアメノウオはシャクリなどで捕まえる。ハコメガネ（カガミ）は大工に作ってもらい、水の中をのぞきながらシャクリで引っかけてアメノウオを捕まえた。シャクリの針は魚によって大きさが異なり、アメノウオ用は自転車のスポークや針金で自作していた。投網は夜に行ったが、明るい月夜はまったく獲れなかった。ネムの葉、チョウメの実といった魚毒植物をすり潰して川に流して魚を取ることもあったが、現在はこの漁法は禁止されている。フナ・コイは和南の川では獲れなかったが、屋敷の門口の池などで飼育して保存食とした。

鉄砲撃ち 昭和中期には、鉄砲撃ち（猟師）がムラに一、二人いた。鹿やイノシシは、肉を目的として撃った。猟は基本的に集団で行動する。戦前には鹿笛（ヒキガエルの腹の皮で作ったもの）を使っておびき寄せたという。鳥専門の鉄砲撃ちは高野に一人いて、散弾銃を使った。現在は基本的に獣害対策として猟を行っている。

罾猟 毛皮を目的として、キツネ、テン、イタチなどをトラバサミで捕まえた。

家畜 牛は多くの家で一頭飼っていた。岡山方面の博労から世話してもらったと聞く。飼うのは温厚な雌牛で、肥料作りや耕作などに用いられた。雄牛は気が荒いため農耕には使えず、木の運搬などの力仕事に使った。

た。牛以外の家畜は、鶏（卵や食肉用）やウサギを飼う家が多かった。戦後は乳を目的としてヤギを飼った。

チンチラ 戦中にチンチラを配られ、五、六年育てたことがあった。軍用の襟巻などに用いる毛を集める目的だったという。

土工 台風の後、河川の修繕作業には女性も参加し、男性に混ざって力仕事をしていった。

商店 かつては呉服屋、食料品店などがムラの中にあつたが、昭和のうちにほとんど廃業した。平成二十六年に食料品店の横山商店が閉店になり、和南から商店がなくなった。

諸職 ムラに左官屋、屋根屋、大工、指物屋などがいた。屋根屋（草屋根葺き）は三軒ほどあり、集団で仕事をしていった。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

食生活

主食 主食は麦飯だった。白米は減多に食べられず、正月でも麦飯を食べていた。

キノコ マツタケは近くの山でたくさん採れるので、特に珍しい食材ではなく、「またマツタケ飯かいな」といわれるくらいのものであった。センボンシメジ（シヤカシメジ）、クリタケ、シメジなどの雑茸が近くで採れた。マツタケ以外は売り物にはせず、二杯酢に漬けて保存食にした。

栗 話者の子供の頃は、共有林に自然生えの山栗（柴栗）の木がたくさんあった。保存食や子供のおやつとして利用するため、秋になると母親たちが栗を拾いにいった。多い人は何俵分も取っていた。湯がいて渋を抜き、糸に通して竿にかけて干した。実は小さく固かった。湯がくこ

とによって渋気はなくなり、渋皮もうまく取れた。四十年ほど前からムラの裏山にも猿が出るようになり、害虫のクリタマバチも発生して、山栗が採れなくなった。

肉・卵 鹿やイノシシの肉を販売する人が近所にいたので、たまに口にした。鶏は卵・肉用として飼育した。ウサギ（ノウサギ、イエウサギ）も食料とした。

川魚 アユは、小さいものは煮付けに、大きいものは塩焼きにした。ビワマスは焼いたり刺身にしたりした。

クズ 山でヨシノクズが採れた。

住生活

間取り 四間の家が多かった。デノマ、ヘヤ、ダイドコロ、オクノマに分かれる。その他、オクドサンやドマ（作業場）、エンがあった。

屋根 和南ではカヤは使わず、ムギワラ葺きだった。麦は、自家で刈ったものを二、三年分貯めておいた。屋根葺きは屋根屋に任せた。ムギワラ、カヤ、ヨシの順で長持ちする。ヨシはメンテナンス次第で五十年持つこともあるが、ムギワラは五、六年ほどしか持たなかった。相谷でも裏作の麦を使ったムギワラ葺きをしていた。

ソトマヤ 農耕用の牛は、土間で飼ったり、ソトマヤ（家の外で牛馬を育てる小屋）を作ったりすることもあった。

イロリ ヘヤやダイドコロなど様々な場所にイロリが設置されていた。

水の確保 渋川から堀越井を使って和南に水を引いている。永源寺ダムができるまではこの水が川下の相谷、山上などの農業用水にもなっていたため、昭和三十年代までは水争いがあった。

惣蔵太鼓櫓 多度神社の前に、太鼓櫓やぐら付きの蔵がある。棟札には安政



写真8 惣蔵太鼓櫓（令和6年）

三年の年号が表記され、昭和八年に改築されている。寺や神社の付属建物ではない櫓はこの近辺では珍しい。

行事や祭り、寄合いなどの始まりの合図として太鼓を鳴らした。太鼓の叩き方に決まりはなく、人によってまちまちだった。近火の時は半鐘を打ち、ムラの中の火災の時には光明寺の釣鐘を乱打して緊急事態を知らせる。

2 人生儀礼

婚姻 話者の親世代はムラの住民同士の結婚が多かったが、話者の時代からは他所との結婚が増えた。

出産 コイの煮付けや刺身を食べると母乳がよく出るといわれ、経産婦用にもらいにくる人がいた。

葬儀 家で葬儀を行っていた頃は、隣組や親類が葬儀の手伝いをした。土葬は約四十〜五十年前まで行い、布引斎苑が建設されてからもしばらくは続いていた。光明寺の先代の住職が亡くなった頃から葬儀会社に依頼する例が増え、親類の少ない家は葬儀をするのが難しいこともあり、火葬に移行した。

墓 サンマイと呼び、埋め墓と参り墓で分かれている。明治時代に旧サンマイに県道（現相谷原杣線）が接することになり、現在地に移動した。参り墓は光明寺の横にある。

第五節 その他

災害 昭和二十八年の台風十三号で、和南でも多くの田が流された。前川橋が流れ、現在の橋に変わるまで仮設の橋で通行していた。台風の際に橋が流れ、昭和三十四年の伊勢湾台風でも大きな被害が出た。

学校 山上小学校和南分校があり、小学一〜三年生が通った。それ以降は山上小学校本校に通った。中学校は青野中学校に通った。

惣草 ムラ総出で草刈りを行う惣草という行事があった。大正時代には山の草も肥料として利用した。

山の神 昭和中期には山の神の行事はなくなっていた。話者の父親の世代が山に行っていたのは覚えていたが、何をしていたかまでは分からない。

雪かき 雪が降ると、子供たちが通学するために保護者が学校までの道を雪かきした。

渋川 渋川は和南川より水量が多く、ムラまで水を引いて利用している。和南と相谷の境目の水はよく濁るので「にぎり川」と呼んだ。

第三章 高野の民俗

ムラの概要

高野山山麓には古くから紅葉の名所として知られる臨済宗永源寺派大本山があり、その門前に商店や露店が立ち並び、秋の観光地として賑わってきた。周辺のムラと比較して祀られる神仏や堂・庵の数が多く、それに伴う行事も数多く残されている。愛知郡に属し、東小椋村から分村して一字一村となった。集落は愛知川右岸段丘上に位置し、ムラの面積の九割は山林であり、農林業も盛んだった。

第一節 社会組織

戸数 令和五年度時点で百十戸ほど戸数があり、約三百五十名の住民が住む。話者が子供の頃から大きな増減はない。かつてはムラの中に学校や役場があった。

組 興源寺東組、興源寺西組、上高野^{かみ}、下高野^{しも}の四組に分かれる。小字とは別の区分・名称である。

班 組をさらに班で分ける。上高野の場合、三つの班に分かれており、回覧板を回す単位として使っている。

トナリ 自分の家から向こう三軒両隣をトナリと呼ぶ。かつてはトナリが冠婚葬祭などの手伝いを行った。

第二節 信仰

1 神社・寺院

高野神社 本社、東小宮、西小宮があり、ほかに多くの神を祀る。古い宝篋印塔があり、キヤキ（忌明け）の時には最初にそこに参ってから

高野神社に行く。

永源寺 臨済宗永源寺派大本山。井伊家の墓があることから、地元の人には永源寺のことをイイサンと呼ぶ。

興源寺 永源寺派四派本庵の一寺。疱瘡の観音さんの石碑がある。

2 信仰組織

神社の組織

室人 高野神社の行事を担う役を室人（ムロト、モロトとも呼ぶ）という。四名の男性が選任され、その中大神主、小神主、^{まろと}際人、ハッコウ（八紘・初講）という役に分ける。任期は一年間である。人口減少のため、平成二十七年頃に室人の数を四人から二人に減らした。大神主は本社に上がるが、小神主以下は拝殿までしか上がることができない。大神主が本社に上がる時は、白い装束を着用すると決められている。かつては組ごとに役が回ってきて、際人、ハッコウに選ばれた時は親類を祭りに呼んだ。

社守 社守（神主）は年齢順に務める。神事で祝詞を上げる。昔は神事の前に水をかぶっていた。任期は一年間で、九月一日に交代する。

ミヤワカイシ 神輿を担ぐ若者をミヤワカイシという。神輿が出る春祭りは参加するが、それ以外の年中行事は特に参加しない。

宮司 黄和田の日枝神社の宮司に依頼している。

3 年中行事

神社の行事

年頭行事 十二月三十日から一月三日まで毎日行事がある。正月の準備、本社の神事、山の神神事、勧請吊り、カリカリシヨウジなどを行う。



写真9 ブトヒネリ (令和7年)



写真10 山の神神事の神饌一式 (令和7年)

昔はミヤアルキと呼ばれる人がゴクムシを配っていた。ミヤアルキが回る家の順番は決まっていた。令和五年現在では、各組の組長が配り歩いている。

・山の神神事

ハゼウルシの枝で作った折敷に神饌を載せるのが特徴的である。酒と洗米、水を供える。ハゼウルシの膳は、以前は十一膳分作ったが、令和五年現在は二膳に減らしている。

室人が社の前で煙を焚き、カラスが鳴くのを待つ。鳴かない場合は神主が代わりにカラスの鳴き真似をする。昔はこの日にムラ中が餅を搗いて祝ったという。山の神は複数あり、野神山の神、御吉山おきの神などがある。

・ブトヒネリ作り

山の神神事に作られる餅菓子の神饌をブトヒネリと呼ぶ。米粉を練って虫のような形を造形し、山椒の実で目を作り、油で揚げる。米粉を練る時に水気が多いと油に入れた時にはねるので、固めに練る。

・ミヤアルキ

十二月三十一日に蒸した米をワラでくくったゴクムシと呼ばれる供物を作り、集落内に配る。

かつてはカメ、カブト、ヘビ、ブトなどいくつか種類があったようだが、現在では一つの形を大小で作る。

・勧請縄吊り

病や災いを防ぐことを目的に、勧請縄を高野神社の参道に吊る。

・カリカリシヨウジ

一月三日に行う行事。神主と室人が高野神社から勧請地蔵まで歩き、カリカリシヨウジと唱えながら矢を投げ

る。矢は筒状の青竹に美濃紙で作った矢羽を付けたもの。高野神社の参道で、勧請縄に吊るしたトリクグラブという竹枠に矢を通す。その後、移動する途中の辻々で田や木立の中に矢を投げ入れていく。勧請地蔵は、村の結界の役割をしていると考えられており、到着したら札と矢を奉納する。「カリカリシヨウジ」の語源は、「貸し借り正直」と考えられている。

・神饌

神饌は二十一品ある。橙だいだい、ホンダワラ、ミカン、串柿、小豆餅、トチ餅、白餅、筭餅そうが、若餅、大花弁（花びら餅）、小花弁（花びら餅）、大ブト、小ブト、ザクロ、ジネンジヨ、野老、洗米、神酒、灯明、甘子蜜柑こうじみかん、栗、トチ。これらを本社、小宮、山の神に供える。ジネンジヨは近隣の山で掘る。ホンダワラは海藻で、八百屋や米屋に頼んだり、近年では通販で購入したりしている。その年に手に入らなかったものは、品名を書いた紙を代用とする。花びら餅は成形するが難しい。今は餅屋のもち源（愛東地区）に一括で頼んでいる。



写真11 カリカリシヨウジ (令和7年)



写真 12 火祭り（令和7年）
木村與志雄氏提供

七草粥 一月七日に高野神社で行う。本社、小宮にそれぞれ供える。

粥占い 一月十五日に行っていた行事。おとしけ女竹の竹筒に米や小豆を入れて煮て、竹筒に入った量でその年の豊凶を占う。たくさん入ると豊作、少ないと不作とされる。

ドンド 高野神社の境内で札や正月飾りなどを燃やす。今は一月十五日付近の日曜日に行く。

火祭り 各組で愛宕の堂を祀っており、二月に火祭りを行う。西組の堂を代表として、各組の組長と興源寺住職が集い、愛宕の札を収めて経を上げる。その後、各組ごとに宿（当番の家）に集まり、持ち帰った愛宕の札を床の間に飾ってお参りする。仏式と神式が混合した行事である。

冬祭り 一月下旬～二月の日曜日に、エベッサン（恵比須神社）、ダイショウゴ（大將軍）、ツボイサン（壺井神社）の祈念祭である冬祭りをを行う。自治会長、氏子総代、大神主、小神主、宮司、巫女が参加する。

春祭り 年間でもっとも大きな神事である。かつては四月七日がヨミヤ、四月八日がホンビだったが、現在は四月の第二土・日曜日に変更している。

・ヨミヤ

ヨミヤの晩に、ミヤワカイシ（ミコシカキ）が籠り堂（毘沙門堂）で神輿を担ぐ位置を決める。神輿かきのリーダーをイロツケ、先頭を担ぐ人をハナボウ、ハナボウの尻にいる人をハコと呼んだ。供物を運ぶブシヨワタリの後、ミヤワカイシが神輿を担ぎ、拝殿の周りを三回まわ

るヨミヤワタリを行う。この間に拝殿では巫女の舞などの神事が行われる。神饌の他にウノハナ（ウツギ）、櫛、櫛を供える。

・ホンビ

ホンビの神事や祈祷は、日枝神社の宮司に依頼している。昔は氏子総代の家に集合して祝詞イハコトをしていたが、昭和三十三年頃から公民館に変更になった。祝詞の後には自治会長が挨拶して、伊勢首頭を謡いながら高野神社へと向かう。神社での神事が終わると御旅所に行く。御旅所を出ると、在所を回って区長の家などに寄って酒を飲んだ。

現在は下高野の集会所、公民館、自治会館、番場の上高野の集会所の順に回り、神社へ戻る。ワタリの後には、ミヤワカイシが集まってシユウシを行う。芋や豆の炊いたもの、塩、洗米、リョウブの木のおひたしが出る。

・ゴエン

祭りの後始末などをする。

夏祭り 涼みの湯という湯神楽を行う。冬祭りと同様の内容である。

戦時中の参拝 戦地へ赴く前に高野神社で武運長久を祈る式を行った。一戸から一人は見送りに行った。高野神社は南を向いているので戦死しないとわれ、山上の人もよく高野神社まで来ていた。

寺堂の行事

盆行事 盆行事は八月十三日から十五日まで行う。

・オシヨウライサン

八月十三日にオッサン（僧侶）が来る時にオシヨウライサンも一緒に来る。晩にご詠歌を上げる。十五日の朝に河原へ送りに行く。オシヨウライサン用の弁当を用意する。弁当の内容は、オハギ、漬物、刻ん

だ大根の葉を入れたご飯を柿の葉で包んだものなど。

・地蔵

河原の石を積んで地蔵に見立てたものを作り、花や供え物をした。昔は十四日に作ったが、近年では十五日の朝に作る。

・墓参り

八月十一日に行う。

お彼岸 シンコ団子、イガ（エガ）マンジュウ、オハギ、イバラモチを食べる。シンコ団子は、米粉に塩を少し入れて湯がいたものに、砂糖をかけたもの。

彼岸汁 春に彼岸汁という行事を好き寄りの二十軒ほどで行っている。お鍋方なべのかたに関する行事とされる。お鍋方は、信長の側室になった人物で、本能寺の変の後に高野の屋敷に住んだと伝わる。

第三節 生業

かつての生業は多くが山仕事で、炭焼きや薪の切り出しを行っていた。プロパンガスが普及してからは、山仕事を辞めて外に働きに出る人が多くなった。高野には農地が少なく、農林業従事者以外はムラの外に働きに出ていた。多くの農家は自家用の米を作る程度の規模で、これを飯米はんまいと百姓と呼んだ。

1 山仕事

炭焼き 昭和三十年代までは炭焼きが盛んで、多くの家が炭焼きを行っていた。炭窯に使った石積み跡が今でも五十箇所以上残っている。山を区画で割って一年ごとに入札し、購入した山で炭焼きを行った。季節を問わず一年中焼いて売っていた。現在も有志で試験的に炭焼きを行って

いる。

・炭焼きの方法

雑木を切って長さを整え、炭窯に入れて焼く。火を入れてから炭が冷めて取り出せるまで七〜十日ほどかかるため、焼いている間に次に焼く木を切って準備する。焼き上がった炭を一定の長さに切り、炭俵に詰めて持ち帰る。戦前生まれの話者は、炭焼きは中学校卒業後に親から習った。失敗して小屋が燃えたこともある。俵詰め作業などは女性も行った。

・炭の樹種

あらゆる雑木を炭にした。樹種によって火持ちに差があった。カシが最上で、ササガシ、シロガシ、アカガシなどの種類がある。割り炭が多いが、丸炭も焼いた。丸炭は高級品で、十〜十五センチ径の細い木を焼く。伐採後の植林は行わず、切株からヒコバエが生えて育つのを待った。

・炭の販売

昭和二十年代は炭焼きの全盛期で、八日市などから来る業者が山の下で待ち構えておりその場で売り切れるので、街まで売りに運ぶ必要がなかった。出来がいいものは炭屋・仲買人に売り、それ以外は農協に売る。それによって十〜二十円の差がついた。炭焼きの上手下手があり、高値で買ってもらうためには良い炭窯を築いて良い炭を作る必要があった。

・松炭

赤松を焼いて作る松炭は、鍛冶屋が使う。すぐ焼き切れるが火力が強い。市辺（八日市地区）の炭屋が買い付けに来ていた。

・木尻

煙が多くすぐに燃え尽きる炭を木尻きじりという。炭窯の中の水をしっかりと除去できていないとよく燃えず木尻になる。窯の底付近の水気が多い場所にはどうしても木尻ができるが、少しでも歩留まりが上がるよう工夫した。

・炭窯

炭窯は、木を寄せ集めやすい場所に作られる。旧式の炭窯をジョウガマ（丈竈・常竈）、在来竈さいらいがまと呼んだ。在来竈は十尺（約三メートル）ほどの大きさで、構造的に中のガスが一気に吹き出して山火事が起こるリスクがあつたため、焚口と出口を分離させた改良竈かいりようがまを用いるようになった。

・炭窯作り

炭窯は親類などで手伝い合つて作つた。昔の窯跡があれば、そこに築くことが多い。窯の底面は山の斜面に作るが、山から染み出してくる水をきちんと排水できるかどうかによつて炭の出来が変わつた。地ならしの段階でしっかり排水し、排水路となる溝を作る。窯が密閉できていないと空気が入つて木が燃え尽きてしまい、炭の量が減つたり、全てが灰になってしまつたりする。

・炭焼き小屋

小屋を作つて泊まりがけで作業する人もいた。カヤを持っていき屋根にしていたが、途中でトタンに変わった。飲食用に火を焚くところを作つておき、到着したらまず谷の水を汲んでヤカンで湯を沸かす。その間に山仕事の道具を研ぐ。

・運搬道具

背板（セータやセツタと呼ぶ）を使う。約百キロの荷物を一人で背負うことができる強度がある。炭俵は四貫俵（約十五キロ）を作り、

女性は背板で二俵、男性は桐製のオウコ（棒）に四俵ほどを持って山を下りる。

字山 高野山、永源寺山、日本コバなど三つほどあつた。

割山 字山を割り当てる個人の山にする「割山」をしていた。炭焼きをしない家は、炭焼きをする人に割山を売つた。字山を他所の人に貸すこともあり、その場合の収益はムラのものになった。割山の場所は選べず、遠ければ歩いて一、二時間ほどかかる場所に当たることもある。

山の地名 人に貸す山は外、大覚寺、平尾などが多かつた。炭を焼く谷は、堂ノ後どうのしろ、松尾谷まつおだになどが多かつた。

キダシ 山から木を出して薪にする作業のことをキダシという。

柴 字の山ならどこでも拾つてよかつた。ヒライシバともいった。口開けの日は決まっていなかつた。八日市からお金を払つて柴を刈りに来る人がいた。

2 農業

田 地形や水利に恵まれず、他のムラと比べると耕地が少なく自家用にも足りないほどの米の収量だった。田を持たない家も多く、畑の方が多かつた。昔は水が足りず、梅雨で雨がたくさん降つた後に田植えをしたという話もある。川のそばに田があつたことを覚えてる。裏作で冬にはビール麦を作つていた。稲刈りが終わると二株ずつ三本鋤で起こす。春になって田を始める前にそれを一つ一つ崩していく作業をコカジと呼び、辛い仕事だった。肥料は畦草を発酵させたものを入れる程度だったので、肥やしが足らず立ち枯れてしまうこともあつた。米が足りないので、菓子や佃煮などと物々交換で入手することもあつた。

畑 多くの家が自家用の畑を作り、畑仕事は女性が担当した。茶、小麦、

大麦などを作っていた。自給自足の生活のため、いろんな食材を植えた。茶、カボチャ、サツマイモ、ジャガイモ、フキ、ミョウガ、山椒、ウコン、シユウガ、コンニャク、マンリョウの木などを栽培した。

牛 田を鋤くために、二軒で一頭を共有して牛の世話をしていた家もあった。家の離れなどに飼っていた。糞は堆肥にした。牛の代わりに運送用の馬を借りて田を鋤いたこともあるが、牛に比べて扱いにくかった。昭和四十年代には機械化していた。

コンニャク 茶畑の畝が日陰になるので、横にコンニャクイモや桑の木などを植える。コンニャクイモは良い収入源だったが、育つまでに三年かかり、病気になりやすく植替えが必要で手間がかかった。

カヤ カヤは育てたり河原で採ったりした。河原で採るのは自由だった。個人の山でカヤ畑を作る人もいた。茶の木の下に肥料として敷いたりして使う。

獣害 イノシシが田を荒らしに来るので、夜に火や音が出るものを鳴らしたりして追い払った。

3 茶業

茶畑は集落を囲うように広がっている。この周辺の土は色が黒く、茶などの栽培に適しているといわれる。かつてはムラの中に製茶屋（製茶工場）が大小八軒ほどあり、他の地区からも製茶の依頼があった。今では政所の農協に依頼している。

木の種類 在来種が三割、ヤブキタが七割である。在来種栽培に失敗したことを契機に、ヤブキタを植えるようになった。

収穫 政所などの上手の集落より一ヶ月ほど早く、五月頭頃から摘み始める。在来種は葉が伸びないので手摘みし、ヤブキタは機械で刈る。昔

は番茶を三回摘んでいたが、今は一番茶のみで、全て機械で刈る。玉露は生産していない。

肥料 油カスや茶用の肥料を使った。

炉 炉を使っていたのはずいぶん昔のことだが、この家にも炉があった。炭火を使って茶葉を揉んだ。家にロウシ（焙炉師）が来ていた。揉み賃が高かった。

茶縁 茶摘みの手伝いには、外（愛東地区）や市原（永源寺地区）から若い女性が来た。ロウシの男性と出会って結婚することもあった。

4 商業・観光業

観光業 永源寺の門前町で多くの観光客が来た。明治時代の終わり頃からバスで団体客が来るようになり、参道として賑わった。料理旅館などが何軒もあった。滋賀県内の観光地として人が来るのは、かつては彦根城、石山寺、永源寺くらいだったので、他のムラから羨ましがられた。

商店 観光客向けに小規模な個人商店が軒を連ねていた。何を並べてもよく売れ、柿、古漬け、たくあん、魚、駄菓子などを販売していた。雑貨屋や荒物屋、米屋、魚屋、仕出し屋（東屋、近江屋）などもあった。

コンニャク かつては家庭でコンニャクを手作りしていたが、昭和二十年代頃から観光用の土産物として商品化していった。大正から昭和初期にかけて、田口こんにやく、上田こんにやく（現株式会社永源寺こんにやく）、岡本こんにやくが創業する。昭和三十一年代から商売として盛んに



写真 13 観光客で賑わう旦度橋周辺
（昭和 30 年代）「永源寺日和」より転載

なるが、原料の芋の自給率が減少していき、群馬から仕入れたこともある。

諸職 近江屋は料理屋から大工になり、大工から土建屋に変わっていった。土建屋は集落内に四軒あったが、どの家も近江屋に技術を教わった。指物屋も一軒あった。クルマヤ（運送）、ヒシヤ（醤油屋）、ゲタヤなど、各家の屋号に家業の名残を見ることが出来る。

運送 昭和十七年生まれの話者の曾祖父は、運送用に馬を使っていた。ノタビキといって材木を引き出す用途に使った。

5 その他

丁稚 高野は近江商人との繋がりが強い土地である。豪商である外村与左衛門は高野出身で、外村市郎兵衛は高野に別荘を持っていた。高野の男子は、学校を卒業すると都市部の呉服商に丁稚奉公することがあった。昭和四年生まれの話者が最後の丁稚経験者であり、京都の室町通りの呉服店で勤めていた。裕福な家の女子は行儀見習いのために女中奉公に出た。戦前に県内で道路が舗装されていたのは県庁前と高野だけだったという話があり、上田与兵衛という商人が高野にいたことが関係しているといわれている。近江商人が地元へ寄附を行うことが多く、紡績が盛んだった頃が全盛期だった。

養蚕 昭和二十年代末頃まで、どの家でも盛んに行っていた。養蚕の指導員がいた。茶生産の隙間で、春、夏、秋と年に三回行った。畳を外して板の間に換え、その上で蚕を飼った。人間が寝るところがないほど場所を取る。ツシでも飼っていた。蚕の餌にするために、村の中に桑畑がたくさんあった。繭から糸や真綿に加工する。きれいなものは糸に、色が悪いものは綿にした。戦前生まれの話者は、祖母が繭から糸や綿を作っ

ていたのを覚えている。建部（八日市地区）付近に紡績工場があり、そこに繭を出荷した。

漁法 魚獲りは子供の遊びだったが、良い魚は料亭に持っていくと買ってもらえた。アユは竿釣り、ヒツカケ、シャクリなどで獲った。アユなどは、堰堤の上に箱を仕掛けると飛び跳ねて中に入る。台風の後にはゴリなどが獲れるので、ニゴリヅクリという大きな網で獲りに行く人もあった。ダムができてからは水量が減り、魚があまり獲れなくなった。

冬仕事 縄^{なわ}緋^ひい、履物作り、炭俵の俵編みなどをした。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

衣生活

日常の服 新しい服が買ってもらえるのは正月くらいで、洗濯も毎日するわけではなく、同じ服を何日も着ていた。

衣料切符 戦時中は服も配給品で、受け取るには衣料切符が必要だった。**炭焼きの作業着** シャツと乗馬ズボンに紺パッチといった服装の人もいた。昔はフンドシで行っていた。

食生活

食事の回数 かつては一日四食だった。茶業や山仕事をする人が多いので朝食が早く、お昼が十時、コビル（コウビル、コウハン）が十四時、その後夕飯があった。昭和三十五年頃には一日三食に減り、昼食は正午になっていた。

弁当 昼飯には、オカワ弁当（曲物の弁当箱）を持って行っていた。朝早く山仕事に行く場合は二食分持っていた。サツマイモご飯や麦ご飯

に、刻んだタクアンやスルメ、梅干し、カツオブシなどが入っていた。イワシやスケトウダラなどの塩干物を新聞紙で包んで持って行き、現地で焼いて食べた。

夕食 夕食は一人ずつ箱膳で出された。麦ご飯に梅干し、タクアンなどの漬物が多かった。魚が好きな人はジャコ、アユ、サンマなどをおかずにしていた。箱膳は蓋付きの四角い膳で、蓋は台として使った。

正月の食事 ブリ、タコ、ドロガイ、黒豆、昆布巻、叩きゴボウ、田作り、自家製のフナズシなどを食べる。ドロガイは琵琶湖産で身を剥いたものを買う、家で炊く。鯛も炊く。梅干し茶を飲む。

雑煮 白味噌か赤味噌で仕立て、タイモ（サトイモ）、大根を入れる。昔はサトイモの親芋を入れた。出汁はジャコでとった。雑煮の代わりにぜんざいを食べる家もある。

餅 家で作った。正月と祭り用にもち米を作っている家もあった。

ご飯 主に麦飯やサツマイモご飯などの混ぜご飯だった。麦をあらかじめ湯がいてから米と炊く。昭和二十八年頃まではオクドサンで炊いていた。

麦 畑で育て、パン屋に持って行ってパンと交換することがあった。

山菜 フキ、ワラビ、ゼンマイ、ヤマブキなど。高野周辺ではイタドリ以外の山菜があまり採れず、遠方まで採りに行く必要があった。

ヤマブキ 畑のフキよりおいしい。根元が赤くて上が青いものが上等とされた。

芋類 サトイモは保存がきくので重宝した。サトイモやヤマイモは、山に引きに行く。茎芋は今でも食べる。

タケノコ 山で採れるが自家用程度の量しかない。

木の実 どの家にも柿の木があり、甘柿が多かった。甘柿の種類はオ

テラガキ、マスカラなどがあった。渋柿はツルンボシ（干し柿）にした。河原に生えているグミ（カワラグミ）、クワイチゴ（桑の実）、スモモ、ホオズキの実などが子供のおやつだった。

山椒 実、花、葉をいろんな方法で調理する。

キノコ マツタケは宇山に大量に生えており、自由に取って食べていた。そのほかにクロタケ、シロタケ、スドシ（アミタケ）、クロカワ、シメジ、コウタケ、ヒラタケ、ホンシメジなど。クロタケはマツタケより高級とされた。

川魚 カワアユはよく獲れた。アマゴ、ウナギ、ウグイ、アメノウオ（ビワマス）、ゴリなどを食べた。アメノウオを獲るには鑑札が必要だった。

アユ 天ぷら、塩焼き、炊き物などして食べた。コアユは佃煮にした。

肉類 鶏を飼っている人があったが、祝い事など以外で食べることはあまりなかった。卵はお見舞い品として使った。

味噌 家で作った。豆は購入したものを用いる。

味噌汁 タイモ（里芋）やカボチャの味噌汁をよく食べた。朝は八升鍋で味噌汁を作った。油揚げが入っていたら豪華だった。

漬物 細切りにされてご飯や弁当に乗っていたり、大きい鉢に盛り付けて食卓に出されたりした。ドボヅケ（ぬか漬け）や梅干しは家で作った。梅干し弁当は比較的贅沢なものだった。

発酵食品 味噌、納豆、麹などは家で手作りした。フナズシも家で漬けていた。

祭りの食事 ヨモギ餅やニッキ餅などを食べた。

葬儀の食事 精進料理を食べる。麩のカラシ和え、ナスのシヨウガ醤油、ズイキのセンバなど。葬式の手伝いをするなどで覚える献立も多かった。

おやつ サツマイモをサイコロ状に切って団子に入れた蒸しパンのよう

なもののや、ご飯に醬油をかけたものを食べた。グミ、そら豆、かきもち、トウモロコシの粒を乾燥させて炒ったものなど。

住生活

間取り 六畳四間をヨロクと呼んだ。デ、オモテ、ザシキ、ヘヤ、ダイドコロなどの呼び名があった。ダイドコロにはムシロを敷いた。

屋根 カヤ葺きの家が多かった。

オクドサン 昭和三十六年には残っていたと記憶しているが、その後はガスコンロに変わっていった。

風呂 桶風呂の上から三角傘（バチガサと呼ぶ）を被せたものだった。

米の研ぎ汁や井戸水を風呂に使っていた。湯量も少なく、炭焼きの煤で汚れた家族が何人も入るので水が濁っていた。風呂の水は便所に流した。昭和四十年頃にはガスで沸かすようになった。

水の利用 高野は水の確保に苦労した。大きな溜池などもない。山に水路を掘り、谷水を集落まで引き込んだ。集落の下にある川からツルベやポンプで水を汲む家もあった。

芋の保存 サツマイモは寒さに弱く、土間の一隅に掘ったイモツボにモミガラと一緒にに入れて保存した。サトイモを貯蔵する時は、畑に穴を掘って芋を入れ、土、モミガラ、ワラ、杉皮の順に被せた。これを指す語は特にない。

戦中の生活 集会所に防空壕があった。ラジオを持つ家が一軒だけあり、そこまで放送を聞きに行った。軍人が講堂に駐在していた。農家が多かったため、戦中でも食べ物には困らなかった。

2 人生儀礼

婚姻 昭和十二年生まれの話者が結婚した時には、家紋付きの提灯で出迎えられた。リヤカーで嫁入りの荷物を運んだ。戦後だったので、婦人会で購入した着物を借りた。

出産 昭和三十年代には、病院で出産する人と、産婆さんに取り上げてもらう人が両方いた。布団や浴衣の布をオムツに利用した。

通夜 トギ（通夜）にはおかずを詰めた重箱を持参した。

葬儀の変化 昭和五十年頃まで土葬だった。土葬の頃には、トナリから四軒ほどがコシカキと穴掘りを手伝った。コシカキの時はワラジを履いていき、それを六体地蔵に置いてそこから裸足で棺を担いだ。現在の八風の湯の隣に共同墓地ができてから火葬になった。

墓 永源寺の十六羅漢、六体地蔵とともにサンマイが並ぶ。土葬の頃は石塔を置いた。埋め墓と参り墓は同じである。遺体を埋める人を「山行きさん」といい、まかないと弁当を用意した。

第五節 交通・交易

行商 愛東などから行商人がリヤカーに商品を積んで売りに来ていた。八日市の市場で仕入れた魚を自転車で売りに来る人がいた。

商店 昔の高野に酒屋や呉服屋はなく、隣の山上まで買いに行っていた。魚屋もなかった頃は、山上の魚屋から塩干物を買っていたという。

京都行のバス 昭和三十五年頃には高野から京都三条行きの通勤バスが出ていた。高野の時点で満員だった。

橋 昔の旦度橋や紅葉橋は木造で、増水した時にはよく流された。足止めされた人は近くの旅館で泊まることがあった。

第四章 相谷の民俗

ムラの概要

鈴鹿山脈の山間地と平野部の接点に位置し、八風街道沿いに二キロ以上にわたって民家が立ち並ぶ。昭和前期には問屋街が形成され、山奥で生産された炭や材木などが相谷に集積された。また、商業も盛んで、昭和三十年代以前には三十軒ほどの商店があり、相谷の中で生活用品が揃ったため、愛知川沿いの近隣のムラからも買い物が集まった。一組の居住地が永源寺ダムの建設用地にかかり、七戸の住民が移住した。

第一節 社会組織

戸数 多い時で百五十戸ほどあったが、今は百戸ほどである。昭和三十年代が最も人口が多く七百人を超えたが、現在は三百人を切った。

組 一〇九組まであったが、永源寺ダム建設により一組が欠番になっている。隣組は上から二組、三組の順に並ぶ。谷や道の境目で分けている。九組だけ飛び地になっている。組ごとの戸数は少ないところで五戸、多いところで二十数戸ある。「五人組」を構成していた頃の名残と思われる。**集落** 上、中、下、熊原に分かれる。上は二、三組、中は四、六組、下は七、八組、熊原は九組が属する。

自治会 自治会長に選ばれると、一年間の見習い期間の後に自治会長を一年間務める。毎年三月十五日に選挙で決める。

年齢組織 若い衆や青年団といった組織は、昭和五十年代半ばになくなった。戦前には、年齢順に青年団、消防団、宮座、老人会、寺世話と役が当たったといわれている。

第二節 信仰

1 神社・寺院

熊原神社 熊原彦神、熊原姫神を主祭神とする。

小社の合祀 小社は一箇所統合した。以前は若宮さん、稲荷、秋葉さんなどが神社の近くにあった。

宝珠寺 臨済宗永源寺派に属す。山号 淵龍山。

西光寺 天台宗西光寺があったが、現在は廃寺になっている。

地藏 地藏はムラに何箇所もあり、近隣住民が世話をしている。地藏盆は、寺と地藏を合わせて三箇所で行っている。

オカネドウ オカネドウ（オカネ明神）が雨乞いの山で、相谷と佐目が共同利用していた。県境近くにある奇岩がご神体で、遠く険しい道のりを歩いていく。昭和三十年頃まで雨乞いにいった。

野倉大明神 宝珠寺に野倉大明神がある。安産を司る狐の神であり、世話人の女性が管理している。

山の神 現在祀っている場所はないが、祝詞の中に「山の神」という文言が出てくる。かつては佐目子谷の祠など三箇所ほど祀る場所があり、山行きの時に拝んだ。

家の神 家の神棚には様々な神を祀る。熊原神社、お伊勢さん、恵比須・大黒、三宝荒神などの札がある。

屋敷先祖 ある話者は、購入した家がシンヤだったので、屋敷先祖（敷地内に住んでいた他人の霊）を祀っている。日常は台所に、盆には床の



写真 14 愛知川上流部
(昭和 30 年頃) 寺田清司氏提供

間に祀る。

2 信仰組織

神社の組織

宮座 熊原神社には宮座があり、かつては全戸の長男が三十八歳になった時点で加入した。定員に決まりはなく、人数が多い時も少ない時もある。加入から十年で卒業する。今は二十人に満たないため三十八歳以下の年齢の住民も入れるようになり、徐々に若年化している。

宮座の仕事は、祭りの世話、供物や正月の松、しめ縄の準備などがある。宮座の中でも役割があり、責任者に当たる年長者をいちはんじょう一繁昌と呼び、年下の人に指示を出す。同い年が複数いる場合は、生年月日の順で決まる。宮座に入ったばかりの人を中老と呼び、酒の爛をしたり、茶を出したりといった下働きをする。

神主 相谷では、神主と社守は同義である。神主に当たると、毎日家で祝詞をあげる。昭和の終わり頃までは、オクの間の縁側を出たところに半間四方ほどの屋根付きの簡易な建物を作り、そこで毎日水ごりをした。毎月一日、十六日、二十三日に神社へ朝詣りに行く。二十三日は月例祭で、白装束を着て朝から神社まで歩いていく。烏帽子を被り、白い着物を着て、背中には袴と浄衣をたたんだものを担ぎ、白扇を着物の衣紋に刺し、そこに神を移す。右手に神酒徳利を持つ。家に帰ると神棚に白扇を立てて拝む。

神主を務める間はオクの間に一人で過ごし、女人禁制で年配女性くらいしか部屋に入れなかった。肉食は禁忌とされたが、鴨肉は食べてもよいとされていた。

神主クジ 宮座に加入して二年目から神主クジを引く。毎年九月一日に

神主クジを引いていたが、現在はその前後の日曜に行っている。紙を人数分丸めておく。御幣ごへいのオをしこいて紙に垂らすと、静電気でクジが引く。それを十人ほどの候補者で引き、「〇に大」の文字が書かれた紙を引いた人が神主になる。クジの当日から神主の仕事が始まる。三十八〜四十七歳までの十年間のうち、クジを三回引いて当たらなければ神主になることはなかった。現在は簡略化されている。

祝詞 口頭で教わったものを自分で紙に書いて読み上げる。

氏子総代 氏子総代の制度は残っているが、仕事は多くない。宮座の人がなる。

宮司 現在は黄和田の日枝神社に依頼しているが、以前は山上の歳苗神社に依頼していた。勧学祭と春祭りに来てもらう。

寺院の組織

寺世話 総代三人を中心に宝珠寺の世話している。寺の行事は少ない。

3 年中行事

神社の行事

正月行事 神主は大晦日から神社に泊まり、日が変わると水ごりをする。神前に供えた鏡餅を細かく切ってムラの中で配った。

厄除け祭 二月に厄除け祭をした。厄年の人に来て、神主が順番にお祓いをする。祝詞を紙に書いたものが残されている。

勧学祭 三月十九日に行う。歳苗神社の宮司が来る。

春祭り 春祭りは四月二十三日に行っていたが、今はその前後の日曜に変更されている。もともと神輿はなかったが、子供が多かった頃に他のムラを真似て子供神輿を作った。話者が子供の頃には三〜六年生が担い



写真 15 春祭りの子供神輿 (昭和 34 年)
寺田清司氏提供

だ。ムラが一番上まで行き、二股に分かれる道では行きと帰りで異なる道を通ったと記憶している。道中で結婚した家や新築の家などに寄って休憩すると、子供はアイス、大人は酒で接待してもらえた。子供は途中で疲れてしまうので、最後は大人が担ぐことになる。集会所には必ず寄る。

植付祭 五、六月辺りに植付祭をした。自治会長、宮役、神主が集まって

参拝を行う。近年では植付けの時期がもつと前倒しになっている。

愛宕講 中の組(四組)は愛宕講を行っている。毎年三月二十二日に行う。昭和中期には、京都まで観光バスを借りて行くほどたくさんの家が参加した。現在は七軒で継続している。愛宕さんでシキビ(櫛)と御札をもらってくる。年に一回当番を決め、三月に当番の家に集まって御札を分け、御神酒をいただいて食事をする。掛け軸などの拝む対象はなく、その家の神棚を拝んでいる。

寺堂の行事

正月 正月には神社に詣り、その次に寺に行く。

初観音 一月に初観音がある。主に老人会の女性役員が世話役をする。一時間ほど経を上げる。昔はご詠歌を唄った。

盆行事 八月十二日に墓参り、十三日に施餓鬼があり、他所から僧侶が四人来る。十四日の棚経では僧侶が全戸を回る。盆の供物を置く棚を作る。大人の盆踊りと、子供の盆踊りがある。山に行き、イバラの葉を採つ

てきて、蒸したマンジュウを載せ、仏前に供えた。地藏盆には、「まめ進ぜとくれ」と言いながら太鼓を叩いてムラを回ったことを昭和二十三年生まれの話者が覚えている。

彼岸法要 彼岸に寺で経を上げる。

第三節 生業

農業、林業、商業が主な生業だった。山仕事は炭焼き、柴作り、割り木作り、材木出しなどをしていた。炭焼きは、昭和三十五年あたりまでは盛んだったが、昭和四十二年頃にはプロパンガスが主流になって炭を使わなくなり、全ての家が炭焼きを止めた。

1 山仕事

共有林 共有の山は惣山そうやまといい、八百町歩の広さがあり、競売で立木を伐る権利を分割した。木を切る人は、ムラに代金を払って立木を買った。ムラ近くのなだらかな場所は値段が高く、山奥の岩場は安かった。三十年ごとに場所を移した。造林公社が雑木の山を切って植林を行ったため、造林公社とムラで利益を分配する契約になっていたが、木材の値が急落してしまい、今では大半を造林公社の利益としている。共有林の管理は永源寺森林組合に委託していたが、木を運搬するのも大変な場所ので、令和四年に返上された。林道も途中までしかなく放置されている。

佐目と共有している山もあり、天狗岩がある附近(小字谷尻)の山である。

個人山 個人山もたくさんあった。個人山はムラ周辺にあり、近いところはムラから歩いて十分ほどで到着する。

割り木 割り木(薪)は、家の軒に積んで保存していた。自家用としてカマドなどで使うこともあれば、販売もした。相谷に仲買がいて、オー

ト三輪で運搬した。

炭焼き ナラ、カエデ、ブナ、カシなどが生えていたが、炭焼きにはナラやカシが良いとされた。炭窯は各家が持っており、住民同士で手伝い合って作った。昔の窯跡も利用した。泊り込みではなく、日帰りで焼いた。昭和五年生まれの話者は遠い山まで行っていたので、行きで二時間半、帰りは三時間かかるため、朝の暗いうちから家を出た。別の話者は、佐目子谷を一時間半ほど登った途中にある姫ヶ滝まで行って炭を焼いていた。炭は背負子で背負って山から下り、御園（八日市地区）や日野に出荷した。昭和三十五、六年までは炭の値が高かったが、それ以降はプロパンガスの普及で炭焼きで生計を立てることが難しくなり、勤め人になる人が増えていった。

俵編み 雪が降ったら山に行けないので、家で炭を入れる俵を編んだ。

柴刈り 子供の頃は、自分の家の山で柴を刈った。山を持たない家は、落ちている柴を拾いにいった。

木挽き 昭和五年生まれの話者の父は木こりをしていた。スギ、ヒノキ、松などを切って、柱に仕立てた。材木は重いので、山の中で柱に挽いて、肩に背負って山から下りた。山の下からは大八車に乗せて運んだ。大八車を引くのは子供も手伝った。八日市辺りに大きい材木屋があり、相谷まで買いに来た。

製材所 製材所がムラの中にあった。木を切って製材所に持っていき、加工してもらった。

中継所 昭和五年生まれの話者の家は、中継所をしていた。相谷より上のムラには車が入れないため、様々なものを中継所の倉庫に運び入れ、それを買に来る人がいた。

2 農業

田 住民の多くが兼業農家だった。耕地はそれほど広くなく、自家用米を作る程度だった。相谷には一町歩以上の面積の田を持っていた人はいない。話者の家の田は四反くらいだが、それでも多い方だった。別の家では二反ほど田があったが、子供が多かったので足りなかった。一反当たり五、六俵分しか採れなかった。ムラに米屋が一軒あったので、足りない分はそこから買った。

田は農業用水が確保できる位置に作るため、佐目子谷の谷水（新井）と、渋川の水（旧井）を引いている。公民館の北側はシンダといい、大正時代の耕地整理で新しく田に変更したところで、佐目子谷から水を引いている。昔は桑畑だった。熊原神社周辺は昔からの田で、渋川上流の水や溜池の水を引いた。

裏作 田では裏作で麦を作っていた。

畑 家の周りに畑があり、大根などの自家用の野菜のほか、桑や茶を植えた。

肥料 山で草を刈ってきて、ワラと混ぜて田に漉き込んだ。

茶生産 茶畑はたくさんあった。家の周りに茶畑があり、自家用の茶を作った。茶葉は手摘みした。国道を挟んだ山沿いに畑があった。茶畑の間にコンニャクイモを植えた。

3 商業

昭和二十〜三十年頃には三十軒ほどの商店があり、生活用品の大半はムラの中でまかなえた。魚屋三軒、菓子屋四軒、製材屋二軒、酒屋、豆腐屋、塩屋、醬油屋、料理旅館、床屋などがあった。山と平野部の間に位置するため、愛知川沿いの集落から買い物客が集まった。高野にも商

店が多かったが、あまり交流はなかった。

魚屋は、八日市の卸市場まで自転車に乗って仕入れに行っていた。行商をしていた時期もある。近年では仕出しなどしているが、昔は塩漬の魚や鯨肉などを扱っていた。

店の業種は少しずつ入れ替わり、昭和三十年頃には、クリーニング店、指物屋、醤油屋、タバコ屋、塩屋、左官屋、駄菓子屋、米屋、魚屋、大工、製材屋、トラック運送、材木屋、産婆、呉服屋、時計屋、獣医、仏具屋、自転車屋、豆腐屋、馬車引きなどがあつたと記憶している。国道沿いにある永源寺タクシーや今若時計店は、相谷出身者が経営を始めた。

問屋街 相谷は材木の集積場になっており、ダムの下辺りが問屋街になっていた。丸太が並び、加工し終わった材木が壁に立てかけられていたことを覚えている。昭和四十年頃までは稼働していた。

4 その他

漁法 ダム建設までは、ムラ付近の愛知川は泳げるほどの水深があり、魚がたくさんいた。アユ、アメノウオ（ビワマス）、ムツ、ウナギなどが獲れた。アユとアメノウオはシャクリで獲った。ウナギは、刺し針にアユを付けたものを夜の間にしかけて翌朝に取りにいく方法で、上手な人は一秋で八十四ほど釣った。ムツはビンツケで獲った。

戦前は京都の料亭や近隣の料理旅館などにアユを売っていたと聞か、昭和中期頃には自家用で食べていた。家にイケスを作り、そこに入れておいた。

養蚕 かつては蚕を飼っていた。繭を買いに来る人がいた。

牛 牛を飼っていた。奥州産の子牛を育ててバクロサン（博労）に売った。市辺（八日市地区）から借りる人もいた。

鶏 それぞれ家で鶏を飼って卵を得た。卵はヘビに食べられることもあった。病人の見舞い品として持つて行つた。鶏が卵を産まなくなつたら、ジュンジュン（すき焼き）にして食べた。

狩猟 昭和の頃には猟をした。昔は他のムラから猟師が来ており、相谷には専門の猟師はいなかった。今は獣害対策として、数名が免許をとって罾猟などを行っている。

相谷は動物がよく出る場所で、ウサギが茶畑や松林などに出たが、捕まえて食べることはなかった。キツネ、タヌキ、アナグマなども出る。

獣害 以前は愛知川の対岸だけに鹿がいて、畑で野菜を作つていても被害に合うことはなかったが、いつの間にか集落側にも入ってくるようになった。鹿は車にぶつかる被害も起こつたので、柵を立てて対策した。イノシシは捕獲するので、近年は被害が減少している。猿は、昔は山奥でも減多に見なかったが、今は家の周辺にも出るようになった。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

衣生活

履物 学校には草ゾウリで通つた。夏は学校から帰ってからゾウリ作りをした。昔は蓑もワラジも自分たちで作つた。クツゴメと呼ばれる指先だけの靴も作つた。雪の日は、濡れた足袋を履くよりも素足の方が冷たくなかつた。

ハバキ ハバキ（脛当て）はシンメイ藤（神明藤か）という細くて粘り気のある強い藤を使つて作つた。

炭焼きの服装 炭焼きの作業をする時の服装は、男性は紺の法被に木綿の紺パッチで、若い人はズボンを履いていた。女性は紺のハンテンにモ

ン。だった。

雪の日 雪の日は、親の黒いマントを着て、ワラの深靴か長靴で学校に通った。手袋はしなかった。

食生活

食事の回数 食事はアサメシ、ヒルメシ、コウビル、バンメシの四回食べた。コウビルは午後三時頃だった。アサメシはご飯、漬物、おつゆを食べた。

正月の食事 お節料理は、タツクリ、ネゴンボ（大根、ニンジン、ゴボウ、コンニャクなど七種の根菜を炊いたもの）、黒豆、ニシンの昆布巻きが入っていた。雑煮の具は豆腐、ネギ、サトイモを入れた。味付けは、醤油の家と味噌の家があったが、多くの家は醤油だった。話者の家では雑煮にカシワを入れた。

餅 正月には餅を用意した。十二月二十九、三十日頃に、七、八臼分搗く。もち米は購入したものをを用いる。また、厄年（四十二歳）、還暦（六十一歳）、喜寿、米寿の時には、二の正月（小正月）に親類を呼んで、神社に参ってヨビシ（宴会）をして、餅を搗いて親類などに配る「餅配り」があった。

米 米は大きな鍋で二、三升炊いた。十人家族だった家では、毎日三升は必要だった。水分が少ないと米がたくさん必要になるため、粥のように柔らかく炊いた。飯には麦、サツマイモ、カボチャ、リョウブ、ヨモギ、クサギ、豆などを混ぜてかさを増した。麦ご飯が特に多かった。浅漬けをご飯に混ぜたものはおいしかった。「木挽きの一升飯」といい、山仕事をする人には毎日一升の飯が必要だった。

汁物 味噌汁の具は大根、カボチャ、クサギ、イボナなどを入れた。

弁当 漆塗りの曲げわっぱの弁当箱の身と蓋の両側にご飯を詰め、ヒルメシとコウビルに分けて食べた。サンマやスケソウダラをおかずにした。炭焼き小屋に生魚を持っていき、その場で焼いて食べることもあった。**キノコ** マツタケはよく採れた。また、シメジ、カイタケ（コウタケ）、クロコなどを食べた。仕事が忙しく、山まで採りに行く時間があまりなかった。

魚 アユ、アメノウオ、ムツ、ウナギなどを自分で捕まえて食べていた。アユは山椒と醤油で炊いて食べた。アメノウオは煮付けにして食べた。ムツは炊いて食べた。ドジョウは豆腐と一緒に炊いた。

フナズシ 魚屋がフナの塩漬けを売りに来るので、それを買って家でフナズシにした。昔は川のフナを使ったが、次第に業者から買うようになった。いつ頃からかウグイも漬けるようになったが、愛知川にウグイが上がってこなくなった。昭和五年生まれの話者は、今でも安曇川の漁業組合までウグイを買いに行つて漬けており、ウグイの方が臭みが少なくおいしいと感じる。

おやつ クワイチゴ（桑の実）やツツジの花の蜜などが子供のおやつだった。イタドリを皮を剥いて塩をつけて食べることもあった。また、柴栗や柿など身の回りにあるものを食べた。ご飯に醤油や味噌をかけて食べた。

贅沢品 豆腐は貴重品で、冠婚葬祭の食事の時しか食べなかった。また、卵やバナナも病気の時しか食べられなかった。

ヨモギ餅 春祭りの日には、アンコが入ったヨモギ餅を重に詰めて親類同士で配りあう。アンコは家で炊いた。

住生活

間取り 多くの家が六畳四間のヨロクだった。オクノマ、ヘヤ、カマド

など。デノマの入口付近に六畳ほどのウマヤがあり、牛を育てた。裕福な家にはエンガワがあった。部屋は壁ではなく戸で仕切っていた。裏口はセドクチといった。

屋根 裕福な家だとカヤ葺きで、一般的にはムギワラ葺きだった。カヤは、秋に共有のカヤノへ刈りに行った。二十〜三十年に一度葺き替えた。古いカヤは茶畑に敷いて、雑草除けや肥料とした。建前と屋根葺きは大工に頼み、親類も手伝った。大工はムラに何人もいた。

水の利用 生活用水は谷水か井戸水を使った。大正七年に農業用水路ができ、佐目子谷から水を引いたと聞く。水が湧きやすい立地のため、深く掘らなくても水が出る。井戸を掘っている家は少なかった。旧井と新井があり、マンボ（横井戸）もある。何軒かで共用する洗い場があり、これをカワトと呼んだ。竹トコを使って谷から水を引いている家もあった。家の土間に水を貯めるカメがあった。

水道 永源寺ダム建設の際に、旧農林省に交渉してムラに水道を引いてもらった。上水道が整備されてからは、佐目子谷から引いたものを濾過して使っている。

布団 綿布団やワラ布団だった。話者の家では、肥料の布袋でシーツを作っていた。寒い時は、温めた炭を入れた萬古ばんこを入れて寝た。

風呂 風呂は各家にあり、毎日入った。風呂の水汲みは子供の仕事で、愛知川の水や谷水をバケツで汲んできた。五右衛門風呂で、上に傘がついていた。浮き蓋を踏み沈めて入った。風呂の水は小便場に流れ、さらに外便所の大便の方へ流れた。それをコエモチして畑に撒いた。

燃料 風呂やオクドサンに使う燃料（薪、柴、杉葉など）は、近隣の村山で調達した。枯れ木を切り、割って軒で乾かした。焚き物はツシに置いて保存した。焚き付けには杉葉を使う。

電球 電灯は一軒に一つしかなく、電球が切れたら発電所まで買いに行った。夕方にならないと切れていることに気付かないので、暗い中買に行ったことを覚えている。

雪かき 雪が降ると、保護者は子供が小学校に行くまでに雪かきをしなければならなかった。

2 人生儀礼

婚姻 昔はムラの中での結婚が多く、外から嫁いで来る人はほとんどいなかった。

葬儀の変化 かつては土葬だった。平成初期以降は火葬のみになった。

墓 埋め墓と参り墓で分けている。現在愛知川沿いにある墓は参り墓で、その横に埋め墓があった。墓参りは今でも両方に参っている。昭和十一年に墓の調査が行われ、その時点では百五十区画あったようである。山沿いには昔の墓跡が二、三箇所あり、明治時代の五輪塔が残っている。

第五節 交通・交易

勤め人の増加 昭和三十年代から八日市の企業に勤める人が増えた。ダム水没集落の人は、村田製作所などへ就業する人が多かった。

道 八風街道がムラの中を通っている。国道四二二号線は、昭和四十五年頃に開通した。山手の農道は、大正時代の発電所の水路跡を利用していると聞く。

橋 対岸の高野に繋がる旦度橋は、今も昔も同じ場所にあるが、かつては今より低い位置に木製の橋がかかっていた。また、九居瀬に行くための吊り橋が上流にあった。

第六節 その他

相谷分校 現在の集会所は、元は山上小学校相谷分校の建物だった。分校は昭和五十六年に閉校した。小学三年生まで通い、四年生からは山上の本校まで行った。昭和半ばが最も人数が多く、百人近くの生徒がいた。

川のフチ 愛知川にはフチ（流れが遅く水深の深い場所）とセ（流れが速く水深の浅い場所）があり、フチごとにイドノシタ、ツバハラ、リョウモン（竜門）、ビョウブ、カヤノキ、ホトケ、ナガブチ、クリガセなどの名が付いている。

生活圏 隣接する佐目まではよく行ったが、川向いのムラに行くことはあまりなかった。

鉱山 話者の祖母の時代（戦時中）には、近くの鉱山で採れたマンガンをオイネで運搬する仕事をしていたと聞いている。

相谷発電所 大正七年から昭和四十二年まで稼働していた水力発電所で、小字熊原にあった。



写真 16 相谷分校（昭和 35 年）
寺田茂信氏提供



写真 17 相谷発電所全景（大正 8 年頃）
寺田茂信氏提供

第五章 佐目の民俗

ムラの概要

愛知川左岸の河岸段丘上に位置するムラである。佐目の山は深く険しい箇所が多く、材木生産より炭焼きが生業の中心で、冬仕事として狩猟が盛んに行われていた。ムラ自体の面積は広いが、愛知川沿いの民家の密集地域が永源寺ダムの建設用地にかかり、十一戸が佐目に残ったが、多くの住民が離村することになった。

第一節 社会組織

戸数 昭和四十年には五十九戸、二百七十五人いた。現在は七戸である。
集団移住 ダム建設により、昭和四十八年に集団移住した。佐目の住民の多くは青野（永源寺地区）や春日（八日市地区）などに移住した。

地区 北出、西出、前出（奥出）、南出（ナンデ、ムナンデともいう）の四地区に分かれていた。若宮八幡神社は西出にあった。講は地区で分けて行った。

自治会 佐目に住む住民の自治会がある。これとは別に、離村者を含めた集まりも行い、神社、寺、山の管理などについて話し合っている。

第二節 社会組織

1 神社・寺院

若宮八幡神社 主祭神は応神天皇、息長姫命、武内宿禰命。境内には御金社がある。ダム建設に伴って現在地に遷座した。鳥居や狛犬、玉垣などもそのまま移動させた。青野、春日、佐目に支社がある。

大龍寺 臨済宗永源寺派。山号 広沢山。ダム建設に伴い住職が移住す

ることになったため、昭和四十七年に青野町に移転した。佐目の住人は全て大龍寺の檀家である。

オカネサン 御金社には塔尾金大明神という雨乞いの神を祀っており、ムラの人はオカネサンと呼ぶ。昔は雨の少ない時に参りに行った。

地蔵 ムラの中にいくつかの地蔵がある。津島社横の祠の敷地内にある地蔵は疫病退散を司り、下から悪いものが運ばれてくるのを防ぐ。

集会所や神社の入口にもある。墓には六地蔵がある。「目の地蔵さん」もムラのどこかにあった。

山の神 佐目子谷にあった杉の巨木をご神体とした。十一月二十三日にしめ縄を張り、神酒と餅を供える神事を行った。男性のみで餅について供えに行った。正月には餅、ミカン、神酒を持って行き、猟の安全を願った。

2 信仰組織

神社の組織

宮座 宮座という組織は、ダム建設に伴う移住前の時代にはあった。一の組に中学卒業後に加入する。家督を継ぐ長男が入った。分家の男子は、ムラから認められたら加入できた。二の組一・二があり、三の組は定員が十人で、五十歳になると宮座を抜ける。

元服式 若衆に入ることを元服という。話者は十五歳の時に元服式をし



写真 18 佐目全景（昭和 30 年頃）
「あおの」より転載

た。サカキで頭を剃る真似事をして大人の仲間入りをする。酒の注ぎ方などを習った。

若衆 正月は朝まで火の番をしたり、参拝者に神酒を配ったりといった役目があった。年長者から作法を厳しく教えられた。

社守 一月一日から三日まで祝詞をあげる。以前は専任の社守がいたが、その人が亡くなった後はムラの住民の中での交替制になった。社守は毎月一日と十五日に神社に出ていたが、現在は十五日のみになった。今は十五日付近の休日の朝三、四時頃に参拝する。神主の衣装を着る。

宮司 山上の歳苗神社の宮司に依頼している。

3 年中行事

神社の行事

正月行事 正月行事は社守が担当し、宮司は参加しない。十二月三十一日が晦日祭で、晩に五、六人が集まって行う。元旦は朝十時から数人で参拝して、昼頃に終了する。三が日が明けたら社守がお光を行った。以前はお供えの酒や米、餅、ミカンなどを置いていたが、猿が奪っていくので内容を変更した。

節分祭り 年の数分の豆を供えて、社守が節分の祝詞を上げ、供えた豆をムラの住民が持つて帰る。大雪の季節の平日に行うため、人があまり来ない。令和二年から中止した。

春祭り 春祭りは三月末から四月初旬の間の休みに行う。宮司による神事とシウウシがある。以前は幟をあげていたが、現在は簡素化している。**大祭の供物** 海、山、畑のものを供える。以前はダム付近で釣ったコイを池で飼い、祭りの時に生け造りにした。跳ねるコイをくくって供え、池に逃がした。コイは、以前は煮つけなどにして食べた。皆コイを持ち

帰るのを嫌がり、押し付け合いになる。

五月祈禱 豊作を祈る五月祈禱は宮司が神事を担当する。五月に行っていたが、現在は六月に変更した。

秋祭り 秋祭りは新嘗祭でもあり、山の神を祀る日でもある。十月から十一月中下旬に実施する。ダム建設以前からあった行事を縮小してやっている。以前は組ごとに山の神があった。昔はトンネルの上に法華経塔があり、そこまで松明行列をして山の神の木まで行った。石塔は、ダム建設時に集会所の位置に移動させた。青野では山の神を個人で祀っている人もいた。

津島迎い ムラの下から疫病が入ってくるのを防ぐために津島さんを祀っている。トンネルの近くの津島社から若宮八幡神社まで、本尊を移動する。日の暗いうちに行列を作って移動する。この行事はダム建設以前から行っている。以前は八月二十三日と決まっていたが、現在は八月下旬の土曜日に変更している。移住した住民も帰省し、全部で二十人ほど集まる。

社守、鉦・太鼓で囃す人、提灯を持つ人、空砲を打つ人などが列をなした。ムラ中の人が提灯を持つて行った。惣蔵に鉦、太鼓を入れていて、練習をしていた。調子が狂うと「トーサイ」という掛け声がかかり、一からやり直しさせられるほど厳しかった。若宮八幡に來ると、神を本殿に預け、神主のシウウシをする。

雨乞い 神崎川上流の山の中に雨乞いの場所がある。ある話者は、降水量が少ない時に参りにいったことを覚えている。佐目子谷から天狗岩を通って行く道があったが、今は崩れて道の痕跡が分からなくなっている。紅葉尾からも登ることができた。テングノトウから大戸谷を下がり、その狭間にトリカケ場がある。出谷にゴリカキをする場があり、そこで少

し登った尾根の裏側の手前の池で禊ぎをした。今は三重県側から自動車
で迂回できる道がある。

日待講 ダム建設以降はなくなったが、話者の母親は日待講に入ってい
た。住民同士の交流の場でもあり、朝まで酒を飲んだ。

湯の神 樋の谷の湯水取入口の近くにある、カシの巨木をご神木として
祀った。今は湧き水をタンクに貯めて飲料用に使っている。湯の神の水を
水車の動力にして米をついた。

寺堂の行事

盆行事 八月十日より前の日曜日に墓掃除をして、八月十日に施餓鬼を
行う。

・八月十三日

夕方に先祖が帰ってくるといわれており、仏壇にナスやキュウリ、
素麺などを供え、西国三十三箇所のご詠歌を唱える家もある。

・八月十四日

大龍寺住職が棚経を上げに六十五戸ほどまわる。

・八月十五日

朝八時にオシロイサンを送る。かつては愛知川の下りやすい場所
に花、線香、蠟燭を持っていき、供えて流したが、近年は流さない。
現在は土に還るものだけを供え、場所もダムの近くに変更した。青野
で行っている家もある。親兄弟や親類が集まる。

地藏盆 ダム建設以前の子供が多かった時代に行っていた。八月二十三
日に決まっていた。それぞれの地藏堂にムシロを敷き、提灯を下げた。

盆踊り 佐目の盆踊りは有名で、近隣のムラの人も来た。ダム水没以前
は、津島迎えの前に津島社前で江州音頭を踊った。音頭取りを呼び、踊

り手がない時は若い衆が踊った。同日に津島迎いを行うので、盆踊りが
終ると津島さんを送った。

第三節 生業

佐目の住民の多くは、農業と炭焼きを中心に生計を立てていた。林業
も行っていたが、山が険しく林道がないためあまり盛んではなかった。

1 山仕事

共有林 共有林はたくさんあった。佐目共有林経営組合があり、自治会
とは別の組織で、組合長は青野や春日に移住した人も選ばれる。組合に
は、宮座に加入して元服を終えた長男しか入れなかったが、次男以下や
分家の人も認められれば加入することができた。組合の山のほかに、宮
山、寺山もあった。相谷との共有林もある。

アタリヤマ アタリヤマという制度があり、個人山を持たない人はアタ
リヤマを借りて炭焼きを行った。宮座に入っていないとアタリヤマを借
りる権利がもらえない。

個人山 個人山は、持っている家と持っていない家があった。木を売る
場所は個人山が多く、共有林の木を売ることはない。

炭焼き 個人山またはアタリヤマを借りて炭焼きを行った。かなり山奥
まで入り、炭が焼けるまで泊まり込んだ。炭焼きをするための道を作り、
荒れてきたら普請して直した。ジカタビを履いて山に入った。女性はモ
ンペに紺のハンテン、頭には手ぬぐいという恰好で作業した。

材木屋 立木を買い、丸太にしてセン（ピアノ線）で下に降ろした。三
輪トラックで運んだこともある。相谷に山長という製材所があり、そこ
に持って行って加工してもらった。

木馬道 アシ谷の上には前に木馬道があり、百年ほど前から利用してい



写真 19 割り木の運搬（昭和 30 年頃）
「ふる里の写真集」より転載

たという。植林をして佐目子谷の奥まで木が植わっている。今は森林組合が管理している。

運搬 焼いた炭や割り木はセンを使って山の下に下ろしていた。女性もオイネで背負って運んだ。

冬仕事 雪があると山に行けないので、家で炭俵やゾウリを編んだ。編み機を用いることもあった。

2 狩猟

ダム建設以前は多くの猟師がいた。冬期にできる仕事は少なく、かつては大事な収入源だったが、銃の規制が厳しくなり猟師が減った。昔は十一月十五日から二月十五日までの冬期の仕事だったが、今は年中可能になった。昭和二十三年生まれの話者は猟師であり、親も猟師をしていた。昔は人数が多く、昭和中期には一組十二、三人ほどいた時期もある。冬になると決まった時間に狩猟場所に集まる。以前は大小屋で待ち合わせた。狩猟解禁前に組合の総会があり、寺で供養を行った。組、ムラごとの縄張りが決まっていた。

・ 狩猟方法

猟銃や罟を使った。罟はアシワナ（ククリワナ）やハコワナなどがあった。獣道で待ち伏せする方法もある。

・ 猟犬

七、八人で組を作って、犬を使った巻狩をした。鳥獣を追い立てる勢子役が猟犬を飼い、話者の家では八

匹の犬を飼っていた。犬で獲物を追い出して撃つ。谷の合間に獲物を追い込むため、足が早い犬は下から追いかけ、足の遅い犬は山の上でぐるぐる回る。犬の力量次第で収穫量が変動した。猟は疲れるので、仕事は半日ずつ行なった。

・ 獣の種類

鹿やイノシシなどを狙った。佐目周辺ではイノシシはあまり獲れない。昔はキツネやテンは襟巻き用に獲り、日野町の業者に渡した。現在では猿やアライグマ、ハクビシンなどを駆除している。

・ 鳥撃

トリウチ（鳥撃、鳥類専門の猟師）もいた。佐目には五、六人はいた。キジやヤマドリを獲る。昔は大物ばかりだった。紅葉尾、黄和田などにも鳥撃がたくさんいたので、そちらの縄張りに行くのは遠慮した。

・ 肉の分配

かつてはイノシシ肉が貴重だったので、あみだクジで決めて分けた。犬の取り分もあった。イノシシや鹿は秤で量って分けていた。

・ 肉の売買

獲った獣は山の奥から担いで出し、甲良町の仲買人に渡した。角や皮、内臓も丸ごと売った。大きな収入源だった。

・ 永源寺猟友会

現在は永源寺猟友会として、毎年何百頭もの害獣の駆除・埋葬をしている。猿、鹿、アライグマ、ハクビシン、カラスなど。猟友会は甲津畑の人が多い。

3 その他

田 田の面積は広く、山の斜面に棚田があった。田の水は、佐目子谷



写真 20 牛による田鋤 (昭和 30 年代)
「ふる里の写真集」より転載

生えていたので採りに行った。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

食生活

お節料理 献立は家によって異なった。コンニャク、豆、ゴボウ、ボウダラ、タツクリ、黒豆、栗、大根、タイモなど。鯛はなかった。

雑煮 すまし汁に丸餅が多い。豆腐、油揚げ、カマボコ、サトイモが入っている。神棚にも雑煮を供える。

米 米の収穫量は多く、白米をよく食べた。麦飯や糧飯を日常的に食べることはなかった。

鶏 鶏は家で食べるために飼っていた。祭りの時や、来客がある時に絞めて肉を食べた。

住生活

と樋の谷から引いた。田を鋤くための牛も飼っていた。

脱穀 足踏み脱穀機とディーゼルエンジンの脱穀機があった。唐箕とうみも用いた。

茶 茶も作っていた。ムラを囲うように茶畑があった。

肥料 カマドの灰を畑に撒いた。

養蚕 養蚕は梅雨頃にデの間で行った。糸繰りをして、繭玉から糸を取った。餌になる桑の葉は山裾に固まって

間取り 六畳四間の家が多かった。デ、ダイドコロ、ヘヤ、ザシキ（オクノマ）、ニワなどがあった。ダイドコロにはイロリがある。仏壇はザシキにあった。

オクドサン オクドサンにはカマドとナガシがあった。カマドの上に火の神を祀っていた。

風呂 ニワに入ってすぐのところに鉄製の五右衛門風呂があった。蒸し風呂ではなかった。風呂の水は川や水路からバケツで汲んできた。風呂の水は便所や洗い物にも使った。

便所 外便所で、汲み取ったものは畑に撒いた。

牛小屋 風呂の奥にあった。牛小屋の戸は格子になっていて、牛の様子が見えた。餌はワラを与えた。

ツシ ツシ（屋根裏）でワラなどを収納した。煤で真っ黒だった。

蔵 裕福な家には蔵があった。

屋根 カヤ葺き屋根が多かった。ススキはムラの近くにたくさん生えているので、刈って枯らしておいた。かつてはどこかにカヤバがあったと聞くが、詳細は分からない。葺替えは高野の職人に依頼した。徐々にトタン屋根に代える家が増えていった。

水利用 生活用水は谷の湧き水を利用し、タンクで貯めて各家庭へ供給した。

2 年中行事

正月 大晦日は、夜八時頃から神社に集合して年越しした。餅を搗く日は、十二月二十九日を避け、三十日に搗くことが多かった。餅搗きは行事のようなもので、親類と手伝いあって作った。鏡餅は、神棚、床の間、仏壇に加えて、車、机の上、山仕事や畑仕事の道具の上にも飾った。繭

玉を作り、門松、笹、梅と一緒に飾った。これは十年ほど前まで行っていた。神棚にはカケダイ（干した鯛）を飾る。

七草粥 一月七日に食べる。清水しみづという場所にセリなどを採りに行った。

節分 二月三日にヒイラギとイワシを飾り、歳の数より一つ多い数の豆を食べた。

3 人生儀礼

結婚 ムラの住民同士で結婚することが多かった。以前は家で結婚式を行っていたが、昭和四十年頃には神社や結婚式場などで式をするようになっていった。披露宴の翌日に親類やトナリを回り、翌々日に親類の女性を呼ぶカカチヨビを行うので、終わるまでに三日かかった。シンルイアルキやトナリアルキといった挨拶回りには、姑か仲人の妻が付いていた。

里帰り 結婚式が終わった後に嫁の実家に帰る。結婚式から何日目かは特に決まっていなかった。昭和五十〜六十年くらいまではまだこの風習があった。

出産 産む前に、氏神に安産祈願に行った。親元からハラオビをもらった。話者が子供を産む頃には、多くの家は病院で出産するようになっていた。相谷にいた産婆がトリアゲババアと言われていたのを覚えている。

成長儀礼 宮参りは、舅か嫁の母親が氏神に参った。女子は生後三十三日、男子は生後三十二日と、一日ほど日がずれていた。生後百日の食い初めには、赤飯と焼き鯛を用意した。

葬儀の変化 土葬だった頃は両墓制で、遺体を埋めるサンマイと参るための石碑の場所が分かれていた。サンマイは家ごとに場所が決まっており、石で区画が分かるようにした。埋葬の時には親類や近所の人が土を

掘った。掘る人に一升瓶を持っていく風習がある。葬式が続くと、先に埋めてある遺体が出るかもしれず怖かった。石碑を立てる場所は寺の中にあつた。火葬の時代になってからも土葬を希望する人があつた。火葬へ移行した後は、小田荻（湖東地区）の火葬場を利用したこともあるが、今は布引斎苑へ移った。今は遺骨をカロート（石棺）に入れ、板塔婆だけ立てる。

墓 墓地は愛知川の近くにあつたが、ダム建設に伴い昭和四十五年に集落の上に移転した。佐目から移住した人の遺骨も、同じ墓地に埋葬した。移住先に遺骨を持ち帰った人や、大本山に分骨した人もいる。以前は墓参りや神事を通して移住した人とも交流があつたが、現在は繋がりが薄れつつあるという。

年忌の通知 年忌の案内が寺から届く。

第五節 その他

商店 ムラに二軒の商店があつた。一軒は仕出し屋、もう一軒は駄菓子などを売っていた。自転車で八日市の市場に買出しに行っていた。

分校 若宮八幡神社の横に、山上小学校佐目分校があつた。佐目と萱尾の小学生が通っていた。昭和四十五年に廃校になった。

佐目の地名伝承 佐目という地名は、左の片目だけの人物が暴れ牛を倒したという伝承が由来といわれている。牛ヶ下という小字がある。

シンガキ 佐目の周囲には、鹿、イノシシなどの侵入を防ぐための石垣がある。宝暦十年に構築された記録が残る。一里（約四キロメートル）ほどある。

第六章 萱尾の民俗

ムラの概要

永源寺地区中部の愛知川左岸沿いにあるムラである。永源寺ダム建設に伴って二十三戸が移住し、十二戸が萱尾に残留した。萱尾では材木生産が盛んだったため、林業をしていた家は残留し、農業を始める人は青野に移住して土地を開墾する例が多かったといわれている。ダム建設以前に見られた「萱尾の大滝」は景勝地として有名で、水神や雨乞いの対象として信仰を集めていた。

第一節 社会組織

戸数 昭和四十年には二十四戸、百二十七人が住んでいた。

集団移住 永源寺ダム建設に伴って外へ移住する家と残留する家で分かれた。青野（永源寺地区）に九戸、春日（八日市地区）に五戸、集落の上側に七戸、そのほかは槌の宮（湖東地区）などに移住した。

組 古くは四組あったが、戦中にカミデとシモデの二組になった。

自治会 萱尾在住者のみの自治会と、移住者を含めた集まりがある。

第二節 信仰

1 神社・寺院

大滝神社 主祭神は角凝魂命、天湯川祈命。大滝さんと呼ばれる。ダム建設の際に野倉神社と乙姫神社を合併している。神社の場所はダム建設前と同じだが、以前より一メートルほど上の高台に移している。かつてはムラの中に参道があった。

野倉神社 大滝神社の境内社である野倉神社は、野倉さんと呼ばれる。

祭神は宇賀魂命で、正一位野倉稲荷大明神の神号を持つ。大滝神社の本殿左に祀られる。

乙姫神社

野倉神社の境内社で、祭神は玉依姫命。かつては萱尾の滝の上にあり、竜神信仰と結びついていた。祭神は女神といわれる。乙姫神社では、七月一日の大祭りの時に瀧飛をしていた。

溪雲寺 臨済宗永源寺派。山号 吟龍山。溪雲寺を青野と萱尾の両方で祀っている。現在のコンクリート製の本堂は、昭和に建て替えられた。

津島 津島を祀っている。祀るための土地を川の周辺に確保している。ダム建設以前のことは不明。

地藏 墓地を移転する際に現在の位置に移動した。地藏盆は昭和後期までしており、テントを立てて食事をしたり、花火や肝試しをしたりした。

御札 伊勢神宮、愛宕神社、荒神山神社のお札を定期的に購入し、送ってもらっていた。神社の役の人に送ってくるので、それを配って回った。

2 信仰組織

宮座 宮座という言葉は伝わっているが、組織についての詳細は昭和中期には分からなくなっている。かつては若い衆、肝煎、考老の役に分



写真 21 萱尾全景（昭和 30 年代）
「滋賀県文化財調査報告書」より転載



写真 22 萱尾全景（昭和 30 年代）
「滋賀県文化財調査報告書」より転載

かれていた。若い衆は、長男が十四歳になった年の暮れに勧誘に来る。三十一歳になると肝煎に、六十一歳になると考老に上がる。

社守 かつては大滝神社の社守と野倉大明神の社守で分かれていた。若い衆は中学を卒業して十六歳で入会し、入ったばかりの時は野倉大明神の世話をする。別の年長者が大滝神社の世話をするなど、地位や年齢によって役が分かれていた。自治会長と社守は重ならないようにしている。また、社守と自治会長以外の人が氏子総代をする、区長の次は役を持たないなどの細かい決まりがある。

現在は萱尾に住む住民だけで社守を行っている。四人一組で行う。一年間の任期で、毎年一月四日に交替する。毎月二回（一日、十五日）、境内の掃除や草むしりなどの神社の管理を行う。

氏子総代 氏子総代と社守は分かれている。神社の供物の準備は氏子総代が担当する。総代は三人ずつ順番にまわる。

宮司 神職は年に三回呼ぶ。山上の歳苗神社の宮司に依頼している。

3 年中行事

神社の行事

正月行事 若い衆と神主が大晦日から神社で総通夜（夜を明かすこと）をしており、肝煎が三人以上参ってこないと家に帰ることができなかった。

勧請吊り 明治後期まで勧請吊りを行っていた記録が残る。一月四日に若い衆が各家を回って新しいワラを集めて束を作る。それで勧請縄を作って、佐目との境界の「カンジヨウ谷」と呼ばれる場所の、大きなカシの木に勧請縄を吊った。

山の神 かつては一月七日（十二月七日の記録もある）が山の神を祀る

日だったが、現在は行っていない。家や小屋で山の神を祀り、台に道具、お飾り、供物などを置いた。この日は一日山仕事を休んだという。神社の裏から山に上がり、峠を下りた谷をカラタキと呼び、しめ縄を張ったカヤの木が一本ある。話者の祖父がしめ縄を張り替え、社があつた時期もあると聞く。この日には供物としてシトギ（水に浸した生米を搗いて固めた食物）を作った。

春祭り かつては三月三日に行ったが、今は三月の第一日曜日になり、神事のみ行っている。勧学祭や厄年の神事も兼ねて行う。

大祭り 大滝神社の神事で、昔から七月一日に行っている。現在は一般的な神事のみ行うが、昔は青年による滝飛、素人相撲、巫女の舞などを行った。神輿や御渡はない。

・萱尾の大滝

ダム水没前には「萱尾の大滝」があり、愛知川が五段になって流れる景勝地として有名だった。水神信仰の対象でもあり、愛知川下流のムラからも広く信仰を集めた。雨乞いの神としても有名で、干ばつの時には他のムラからの参詣が増えた。

・滝飛神事

大岩の上から滝ツボに飛び込む「滝飛神事」をしていた。若者がふんどし一枚になって飛び込んだ。太鼓橋から飛び下りられるようになった



写真 23 萱尾の大滝（昭和 30 年代以前）
木村與志雄氏提供

ていた。昭和二十年生まれの話者が若い衆に入った頃（昭和四十年頃）に中止になった。

新嘗祭 十一月二十六日に収穫祭として新嘗祭を行う。昔から氏子で行っていたが、現在は有志のみで神事を行う。現在も愛宕神社と荒神山神社の札は継続している。

太郎坊の献茶祭 かつては茶を生産する家が多かったので、太郎坊の献茶祭に招待されたこともある。

総通夜 十二月三十日に総通夜をする。三十一日の昼に神主が神社の正月飾りをして、若い衆と神主で通夜をする。

寺堂の行事

施餓鬼 八月の第三日曜日で、十六日以降に行う。佐目の大龍寺の僧侶が来て法要をする。以前は施餓鬼棚を吊り、飾り物をして櫓やぐらをしていた。僧侶はかつて四人来ていたが、それが二人に減り、十年ほど前から一人になった。この時に地蔵にも経を上げる。

講 以前は講が月に一回あった。男女共に参加し、御詠歌をあげていた。山の神講、神明講、愛宕講、地蔵講などがあった。

第三節 生業

萱尾では、林業（主に材木生産）と茶業が盛んだった。山仕事は一家の父親の仕事だった。樽丸や下駄製造を行っていた家もあるようだが、詳細は不明である。

1 山仕事

共有林 銚子ヶ口の上（杠葉尾の南側）に惣山（共有林）があった。尾根続きにあるので、尾根沿いに歩いて行くと早く着ける。大滝神社の上

にも共有林があった。現在は森林組合が広域の森林を管理しており、その中に萱尾の共有林も含まれている。一部は個人山として分配した。複数人の共有名義の山もある。共有林は「サンナイ」と呼ばれた。

材木 林業が盛んで、材木商をしていた家もある。かつては一人親方や親類の手伝い程度の規模が多かったが、戦後は親方―子方の構成が増え、話者の祖父は木材屋の親方として十人ほど雇用していた。話者も昭和三十年代半ばまでそこで仕事をしていた。静岡県などから山師や人夫が来ていたことを記憶している。

・木の種類

杉、ヒノキ、雑木を出していた。

・伐採

昔は手作業で木を切っていたが、チェーンソーが導入された。直径が一尺（約三十センチ）、周囲が三尺（約九十センチ）ほどの木が最もよく売れた。

・運搬

昭和中期以降は架線を使って道まで出して四輪車や三輪車で運搬し、四日市や鈴鹿、長浜などに出荷していた。山からは索道があった。索道がないところは木馬道を作った。仏谷はセンが張れず、ソリに材木を積んで滑らせたこともある。トビという道具で材木を引っ張ったり、オトシをかけたりして運搬する。

・加工

板材に加工する時は、製材屋に持ち込み、前引鋸で製材していた。話者の親世代は改良鋸を用いた。雑木のチップ加工もしていた。

植林 昔は雑木林が多かったが、五十年ほど前から植林を始めた。木を伐採した跡地に植えたり、雑木林を刈り払った場所に植えたりした。あ

る話者は、中学に上がってから自分主となって植林や下草刈りなど山の管理を行った。

・ 苗

地苗といって、自分の土地で一から育てた苗を使う。気候が異なる場所で育てた苗は弱いといわれる。三年ほど育てると山に移植できるようになる。苗木を山まで持つて上がって植えた。

・ 枝打ち

秋の彼岸頃から十二月末まで枝打ちをする。樹高が三、四メートルの段階と、六メートルの段階で二回行う。木に綱を使つてのぼり、枝打ち鎌で刈る。かつては八専はっせんの日には虫が湧くといつて枝打ちをしなかった。

・ 伐採

三十〜五十年生に成長した頃に皆伐する。

・ 木の種類

萱尾では主にヒノキを植林し、杉は溪雲寺の上辺りに植えていた。杉の方が育つのが早い、土質がヒノキに向いているようである。

・ 獣害

鹿とウサギによる苗の食害が起こるようになり、木に新聞紙を巻いて保護していた。

割木 立地的に割木や柴の運搬は割に合わないで行わなかった。

炭焼き 戦後しばらくまでは、林業より炭焼きの方が従事者は多かったが、昭和中期以降は炭焼きをする人は激減し、昭和四十年には一軒しかなくなっていた。

かつては米を売るより炭を売る方が収入になった。不動谷や神社の参道、周辺の個人山などで炭を焼いていた。金銭的な理由で山や木をかう

ことが難しい人も多く、その場合は他者の炭焼きや炭運びなどの手伝いをした。九居瀬や相谷の人が萱尾の山まで来て焼いていたこともある。

炭を運ぶのは主に女性の仕事であり、昭和中期まで山上や相谷の間屋まで歩いて運んでいた。セタ（背負子）で山から降ろした。

俵編み カヤで炭俵を編むことはあったが、米の空き袋などを再利用したので、編むことは少なかった。

瓶栓工場 杉の木を材原料にした瓶栓を作る工場が一軒あった。

背負子 背負子のことをオイネ、セタと呼ぶ。

カヤバ ムラ共有のカヤバが小字滝ノ谷にあった。二町歩あり、広面積のカヤバだった。毎年ムラ総出で刈り取りを行う。

萱尾の講 「萱尾の講」というカヤを刈るムラの年中行事があった。屋根葺き用のカヤを鎌で刈って集め、山から降ろしてきた。学校が終わった後に見に行った。神社の上辺りに五百メートルほどのセンを走らせ、カヤを板に乗せて滑車で降ろした。

2 農業

田 水田は少なく、大滝神社の下に四、五枚ある程度だった。クチタキ谷にもあった。大正中期までは一町歩ほどの水田があり三、四戸が稲作をしていたが、田を止めて植林した。

桑畑 養蚕用の桑畑がたくさんあった。茶畑の間にも桑を植えた。

コンニャクイモ 小規模だが植えていた。

3 茶

茶作り かつては茶畑がたくさんあり、溪雲寺の下辺りに固まっていた。年間三十〜四十キロ生産していた。ある話者の家は、茶生産で半年、養

蚕で半年働けば十分暮らしていた。製茶まで行なう家は五、六軒で、あとは生葉のまま出荷していた。今は茶を作る家が少なくなったが、令和五年度時点で四戸が生産を続けている。

茶の種類 主に煎茶で、一番茶と二番茶を生産した。一番茶は進物にしていた。

炉 昭和四十年代までは炉で手揉みしていたことを記憶している。炉は土間にあった。小屋に炉と機械があり、隣家と二戸で共用していた。機械を導入してからも、仕上げ工程は炉で行った。

茶摘み 昭和二十九年生まれの話者は今でも手摘みをしており、摘んだ茶葉は政所の茶工場に持って行って仕上げをする。昔は親類に頼むか、八日市から摘む人手を集めた。他のムラでは三重県から茶師を呼んでいたが、萱尾はそこまでの人出を必要としなかった。ムラの年配女性が蓼畑の茶摘みを手伝いに行くこともあった。

出荷先 山上に卸し、そこから八日市や京阪神方面に販売されていた。

4 その他

養蚕 養蚕は、比較的裕福な家が行っており、ムラ全体で取り組んでいた訳ではない。昭和三十八年には八軒が行っていた。茶業も兼ねる家は夏蚕だけだったが、そうでない家は秋蚕も行った。ダムによる移住の前には養蚕をする家はなくなっていた。

養蚕をしていた家では、家の二間を使って蚕を育てた。蚕に桑の葉を与えると、葉を齧る音がした。蚕が幼い時は葉を刻んで与え、成長したら葉を丸ごと与えた。六畳間に繭棚を置いて回転させ、繭玉を作った。繭の検査をして出荷した。

萱尾では、その年に生えた桑の量によって飼う蚕の量を決定した。多

い場合は六貫の桑を一日五回与える必要があり、不足する場合は他所から購入した。

漁 アユやイワナを獲って食べた。

ダムができるまでは琵琶湖のアユが愛知川まで遡上していた。佐目の堰堤（相谷の水力発電所の取水口）で魚つかみをした。イワナは不動谷、佐目子谷などの支流にいた。

内職 積雪期の内職は、テゴや履物などの日用品を作った。

テゴ 昭和の頃には、テゴという籠を作っていた。横糸にはワラ、縦糸には科皮しなかわを用いた。

萱尾発電所 関西電力萱尾発電所ができてからは、萱尾、相谷、黄和田、杠葉尾の住民はそこに勤めに行くことが多くなった。



写真 24 萱尾発電所（昭和 30 年代）
「滋賀県文化財調査報告書」より転載

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

食生活

主食 主食は麦飯で、米に麦を三〇五割混ぜた。

野菜 自家用の野菜を畑で育てた。

魚 アユやウグイは焼いたり煮付けにしたりした。ウナギは背割りにして砂糖醤油につけて焼く。

イナゴ 秋に捕まえて、焼いて食べたり、甘辛く煮て食べたりした。

おやつ 柿やカヤの実、桑の実などをおやつとして食べた。

山菜 イタドリ、スイハ（スイバ）を食べた。

雑煮 味噌かすまし汁だった。具は豆腐、大根、サトイモ（頭芋）を入れた。

住生活

間取り 六畳四間が基本である。

家の位置 平地が少ないため、道路に接して住宅が建てられていた。

カヤ葺屋根 カヤを刈って保管しておき、毎年二戸のアタリ番の家が順番に屋根を葺き替えた。高野からヤマシヨウという屋根屋が来て、屋根を葺き替えていた。

風呂 明治時代には、戸棚風呂と呼ばれる戸付きの蒸し風呂を使っている家が一戸だけあった。昔は風呂がある家が少なく、もらい風呂をした。風呂を炊くと近隣の家から風呂に入りに来た。昭和には桶風呂になり、麦ワラで編んだフタを被って入った。昭和中期には五右衛門風呂が普及していった。

燃料 割り木や柴、流木、杉葉などを用いた。

水の利用 湧水と井戸水を利用している。

2 年中行事

正月 餅は十二月二十九日か三十日につく。鏡餅は神棚に供える。天照や荒神にはいなり寿司を供える。

節句 米粉を蒸した団子を笹の葉で包んだツマキ（チマキ）を作る。六月二十九日に神社に供える。その翌日を節句といい、ツマキを家の門口に吊るした。

厄年 男性の四十二歳の本厄には、厄落としの儀礼を行った。親類や知人を選んで結婚式並みの大振舞いを行った。この習慣は昭和中期にも続

いていた。

3 人生儀礼

婚姻 ムラの中に親類が多いが、昭和中期には山上、黄和田、佐目、九居瀬など外のムラの人と結婚することが多くなった。

嫁入り 嫁の入家は、家のカドグチからニワ、オクニワ、ダイドコロ、ヘヤの順で通る。

結婚式 祝言はヘヤで行う。盃を交わし、席を改めて披露宴を行う。

披露 式の翌日にオナゴシヨビ（女性の集まり）がある。

三日帰り オナゴシヨビが終わると三日帰りをして三日ほど休息をとる。

通夜 枕元に檜のイッポンバナと一本線香を供える。遺体は北枕の西向きに寝かせる。枕元でヨトギを行う。

仏の飯 死者に供える飯を「仏の飯」といい、カドに北向きのクドを作つて飯を炊き、土器によそつて生味噌とともに膳に乗せる。

棺桶 ヨトギの夜に入棺する。棺桶は座棺で、四つ縄で閉じる。

埋葬 組の人がアナホリをする。四尺ほどの穴を掘って埋める。埋めた場所に石を置いて墓じるしにする。

墓 墓はサンマイと呼ばれ、山手の道路沿いにあった。姓によって埋める区画が決まっていた。ダム建設の際に集落の上手に移動させた。

葬儀後 葬式の翌日をハイソウマイルといい、家の男衆一人が永源寺へ参り、女衆や手伝いの人はサンマイへ参った。三日目はミツカノシアゲといい、親類などで集まり法要を行う。忌明けまでヨツダンゴを作つて毎日仏前に供える。

第五節 交通・交易

行商 ムラに商店が一軒もなかったため、行商から食品や生活用品を購入した。八日市、彦根、京都などから行商人が来て、萱尾を含めた周辺のムラを回っていた。行商人の多くは泊りがけで来た。

交通路 かつての交通路は、萱尾トンネル、佐目子谷橋を通り、佐目・相谷に通じる県道があった。

第六節 その他

地名の由来 カヤがたくさんあったので地名に「萱」が付くといわれている。黒尾山からカヤ畑が続いている。

水力発電所 水力発電所である関西電力萱尾発電所は小字大瀬にあり、永源寺ダムの位置よりさらに上流の水を利用していた。

学校 萱尾の分教場があったが、昭和十八年に山上小学校佐目分教場に合併された。小学校一〜四年生までは佐目に通った。一、二年生と三、四年生の教室に分かれ、各室に十名ほどいた。五、六年生になると山上小学校まで毎日二時間ほど歩いて通うようになる。中学校に上がると青野中学校まで自転車を通った。

子供の遊び 川で魚を釣ったり、山菜を採ったりした。夏は川遊びをした。冬は雪がよく降るのでソリ遊びをした。

雪かき 学校までの雪かきをするのが親の奉仕活動だった。

共有文書の虫干し 佐目、萱尾、蓼畑、杠葉尾、相谷の五箇村の共有文書の虫干しをしている。当番の年は、八月末の日曜に溪雲寺で虫干しする。僧侶がオショウネを抜いた後、また書類を入れ直して押んでもらう。目録と鍵の袋、箱の紐に割印する。下のムラから上のムラへと当番が移り、次の当番の自治会長が鍵を持つ。

村普請 十五歳以上の男性は、道、カヤノなどの手入れの普請に参加する必要があった。

第七章 九居瀬の民俗

ムラの概要

愛知川右岸に位置するムラで、永源寺ダム建設に伴って全戸が移住し、現在は山林のみが残る。七つの地区で成り立ったことから「七九居瀬」とも呼ばれ、約四キロに渡って民家が立ち並んでいた。主な生業は農林業や茶業だったが、「九居瀬の桶屋に高野の大工」と例えられたとおり、桶や竹細工といった手工芸品の生産を行う工人もいた。

第一節 社会組織

戸数 昭和三十年には八十一戸、三百八十五人の住民がいた。

集団移住 永源寺ダム建設に伴い、全住民が移住することになった。青野（永源寺地区）に約四十五軒、槌の宮（湖東地区）に八軒、藤ノ森（八日市地区）に七、八軒が移住した。昭和三十五年頃から移住が始まったが、話者の家は集落の上の方にあつたので移転の時期が遅く昭和四十一年だった。

小字 小代、牧、棚池、中九居瀬、鍛冶屋、切通（古くは小舞台とも）、新田の七つに分かれる。

第二節 信仰

1 神社・寺院

八幡神社 主祭神は神武天皇、応神天皇、神功皇后。近世までは若宮大明神といわれた。ダム建設に伴い昭和四十五年に青野に遷座し、藤ノ森分社、槌の宮分社に分霊されている。

退蔵寺 臨済宗永源寺派。山号 仏日山。永源寺派四派本庵のひとつで、

二十一の末寺がある。創建以来寺地の移転が多く、明治三十五年を高野から九居瀬に移り、ダム建設に伴って青野に移った。ムラにあつた地蔵も青野の退蔵寺の境内に移動した。

2 信仰組織

神社の組織

氏子 九居瀬の全住民が八幡神社の氏子で、青野や槌の宮に移住した人も、今も氏子として属する。

宮座 かつては厳格な宮座運営が行われていた。昭和前期までは、宮座に加入できるのは、モロトと呼ばれる裕福な家庭の男子だけで、氏神祭祀だけでなく、村落運営などとも密接に関わる組織だった。モロトは、年齢により六つに分類され、十五衆、若い衆、中老、肝煎、考老、七人衆と上がっていく。

・十五衆

モロトの家の長男は、十五歳で十五衆に加入する。

・若い衆

十八歳になると十五衆から若い衆に上がる。若い衆になることを「モロトを張る」といい、一人前として様々な権利が認められるが、家庭の経済的負担も大きくなった。定員は二十人で、筆頭をワカイシガミといった。祭りの世話や下の者の教育などを担った。

・中老

若い衆の次は中老に上がる。

・肝煎

中老の上位十名を肝煎と呼び、神主・小神主は肝煎の中から選ばれる。肝煎以上になると羽織を着られるようになる。宮座の決め事など

の決定権を持つ。

・考老

四十六歳になると考老になる。

・七人衆

考老の年長者七人を七人衆という。宮座の頂点であるが、実質的な権利はない。

神主 神主・小神主は肝煎の中から選ばれる。任期は一年間で、神主の仕事は年四十回以上行う。任期中の他行や肉食が禁止されている。

寺院の組織

檀家 九居瀬の全住民が退蔵寺の檀家だった。

3 年中行事

神社の行事

春祭り 毎年四月九日と決まっていた。神社の前に幟が立ち、鳥居の手前辺りに露店も出て賑わっていた。拝殿に宮役の人が並んでいた。

日待ち講 講はまとめて行う。

小社 九居瀬には祠や山の神などはなく、山の中にもないと思われる。雨乞いも行わない。

寺堂の行事

彼岸 彼岸の法要は行わなかった。

盆 墓参りくらいしか覚えていない。

座敷音頭 夏に寺で座敷音頭（江州音頭）を踊った。音頭取りが四名ほど来ていた。平尾（愛東地区）にいた話者の兄婿がそのうちの一人だった。

た。この行事は盆踊りではなかったと思われる。近隣では佐目の盆踊りが有名で、話者も見に行ったことがある。

第三節 生業

多くの家は林業、茶業などを生業としていた。桶生産、竹細工生産などを行っていた家もあるが、多くは兼業で、そのみで生活することは難しかった。

1 山仕事

林業 佐目の個人山まで木を伐りに行った。山の中で木挽きをしていた。昔は大木を二本切ったら一年間暮らせるほど儲かった。

炭焼き 炭焼きをする人は佐目に多かったが、九居瀬にもいた。

共有林 惣山（共有林）がいくつかあった。日本コバにもあった。今は役員が時々見回りに行く程度になり、山の境界が分からなくなっている。

個人山 個人山もあるが、管理が困難になっている。

カヤバ 共有のカヤバが日本コバにあった。日本コバより少し下にあるオオキノという場所にも草原があり、そこでも採取していた。

燃料 学校から帰ると、タキモン（燃料）として使う杉葉や柴を採りに行っていた。柴はツシに上げて保存していた。

2 農業

田 日本コバの南斜面、小字牧の上に広い棚田が作られていた。一枚ずつ石垣で階段状に築かれ、一段の高さが二〜四メートルあった。一枚一枚は小さい田で、合計一町歩もなかった。小字山田にも田があった。田が少ないので九居瀬には専業農家が少なく、百戸あった内で米を自給



写真 25 棚田（昭和 30 年代）
「滋賀県文化財調査報告書」より転載



写真 26 田植え風景（昭和 30 年代）
「滋賀県文化財調査報告書」より転載

できる家は数戸だった。種まきは春の祭りが終わってから行い、苗代を作り、手作業で植えた。裏作は行わなかった。

農具 田の荒起こしを四月末から五月上旬にかけて行う。棚田には農耕用の牛や耕運機を使えなかったため、人力で作業した。ミツグワやヨツグワなどで土を起こした。佐目では牛を使っていた。昭和中期には耕運機が導入されていた。

田の取水 田に水が入るところをミズカミ、水が出ていくところをタジリといった。谷水が豊富で竹のトユを作って田に引いた。

稲刈り 戦前は十月末から十一月頭に行ったが、昭和中期には九月末まで早くなっていた。刈った稲はおいねて（背負って）持ち帰り、家の前でハサ干しして水分を抜いた。山の田では、通常は六俵分、多くて八俵分収穫できた。

畑 家の横に畑を作り、自家用の野菜を栽培していた。

肥料 ニシンカスを田に撒いていた。また、人糞も用いた。便所は大便秘を分けて、風呂の残り湯も便槽に流す。タゴオケに糞尿を入れ、天

秤棒で担いで運んだ。発酵させず、直に撒いていた。一週間に一回は撒かないと便槽から溢れてしまう。

コンニャクイモ 畑でコンニャクイモを育て、市原野まで売りに行っていた。米と交換したこともある。

ワサビ 水がきれいなのでワサビがよく生えた。

3 茶業

茶作り 近世初期には政所に次いで九居瀬の茶の生産量が多かったといわれる。「宇治は茶所、茶は政所、味のよいのは九居瀬の茶」と茶摘み唄に歌われたように、九居瀬の茶は品質が良いとされた。茶摘みの人が泊まり込みで来ていた。どの家も少量ずつだが茶を生産していた。

茶の時期 五月下旬から六月初旬までは、田や畑より茶業を優先した。

炉 家に茶用の炉があった。縦一・五メートル、横二メートルほどの大きさの木枠に渋紙を貼ったものだった。紙の上に茶葉を広げ、炭火で蒸したものを手揉みする。何戸かで共同で使うこともあった。茶摘みはよそに頼んだが、茶揉みは家の人が行っていた。

茶の行商 茶商をしていた人が、能登川まで大八車に茶を乗せて歩いて売りに行っていた。

茶の木の移植 昨年、小字牧に残っていた四本の茶の木を退蔵寺の裏手に移植した。うまく根付いてきている。

4 その他

桶職 桶職人の家が八軒ほどあった。桶作りは小字棚池、鍛冶屋、中九居瀬、切通といった農地の少ない場所で行われた。春の茶業、夏蚕、秋蚕が終わってから桶作りをすることが多かった。

昭和十六年生まれの話者の父親が桶職人だった。五右衛門風呂などの大物は現地で修理する必要があり、遠方まで泊まり込みで修理に行つて



写真 27 箕製作（昭和 30 年代）
「滋賀県文化財調査報告書」より転載



写真 28 箕製作（昭和 30 年代）
「滋賀県文化財調査報告書」より転載

いたことを記憶している。話者の家には、当時の桶や製作道具が今でも残されている。小型の桶も生産しており、一人櫃という講の時に使う桶もよく作っていた。甲津畑では一人櫃を使う人が多かったようだ。

・材料

杉材が多く、愛知崖より奥の政所や箕川から購入して用いた。これらの土地の杉は木目が細かく通って節も少なく、色味が良かったといわれる。風呂桶など大型のものにはカヤ、モロギ、アテなどを用いた。タガに用いる竹は、真竹と淡竹^{はちく}を用いる。高野神社の近くの竹林のものや、佐目の河岸の真竹が適していた。

・作り方

丸太を扇形に割り、削って厚みを揃えたクレ材を作る。竹で仮輪を作り、輪に沿ってクレを立て、米糊で仮止めする。接着したら仮輪を外し、内外の段差をカンナで削って、仕上げの輪をはめる。最後に底板を作ってはめる。桶の用途や大きさによって作り方は多少異なる。

箕屋 ミーヤ（箕屋）と呼ばれる、箕や籠などの竹製品を生産する家が四軒ほどあった。箕作りは、大正時代に桑名市の住民から教わったといわれている。竹製の箕は、茶の運搬に用いられたワラ製の箕を改良したもので、丈夫で長持ちするため注文が入るようになったといわれる。箕

屋は青野に移転した後も数年は生産を続けていたが、時代が変わりプラスチック製品などが台頭したため廃業した。

・材料

ムラの近くの愛知川河岸の竹林から材料を入手していた。三年竹以上のもので、十月から十一月にかけて切る。三月まで湿気の多い場所で保存し、四月以降は水に浸けておかないと乾燥して割れる。

・種類

主に箕を作り、そのほかにザル、シンドーカゴ（大きいカゴ）、茶摘みカゴ（小さいカゴ）、洗いカゴ、魚獲りカゴなどを生産していた。箕は、米や豆を散らしたり、粉を飛ばしたりするのに使う。

・販売

製品は得意先の農家に販売することが多かった。政所で茶業を行う人も九居瀬から茶摘みカゴを購入していた。話者の父は日野まで売りに行っていた。昭和中期には農協や荒物屋に卸していた。

大工 大工が一、二人いた。集落の外で技術を習って帰ってきた。昭和半ば頃までは大工の手間賃が七百円ほどで高級とりだった。大阪で大工をしていた人が、移住する住民の家を建てるために帰ってきた。退蔵寺が移転する際には、旧の寺の部材を一部利用して新しく建てた。

土工 戦前の世代は土工で稼ぐ人もあった。女性の土工もいて、力仕事で稼ぐしかない時もあった。

鍛冶屋 昔には鍛冶屋があったようだが昭和前期にはもうなくなっていた。「鍛冶屋組」という言葉と、「鍛冶屋段」という小字が残っている。

養蚕 かつては養蚕もしていたが、昭和二十年代後半には終わっていた。畳を上げて板の間にして、蚕棚を置いた。餌になる桑の木は畑にあった。主に繭の状態で売っていたが、糸も紡いでいたかもしれない。繭を湯に

つけていたのを覚えている。出荷先は不明である。

漁法 谷川は水が冷たく魚があまりいなかったため、愛知川本流で漁を行った。釣りやシャクリで捕まえた。アユはシャクリとジャカゴでたくさん獲れた。ウナギはあまり獲れなかった。毛針を使ったアユ釣りもした。ムツもよく獲れて、ミミズを餌にして釣った。九居瀬あたりで獲れたアユは、桶に入れて山上、八日市を経て京都、大阪に運ばれたと聞く。

狩猟 ムラに二、三人の鉄砲撃ちがいた。罾猟でイノシシを捕まえる人もあり、名人がいた。イノシシ肉は売りに行っていた。鹿は罾では獲らない。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

衣生活

服売り 八日市などから服を売りに来る行商人がいた。

神主の服 昔はムラの人が神主の衣装を手縫いで作っていた。

モンペ 幼い頃はモンペを着ていたが、小学校高学年になる頃には洋服になった。終戦後で物がなく、母親が着物を仕立て直したり鞆を手作りしたりしていたことを覚えている。

食生活

正月の食事 お節料理は、たたきゴボウ、カズノコ、コンニャク、豆カマスゴ（イカナゴの成魚）を田作りにしたもの、イワシを焼いたものなど。鯛が出たこともあるが、これは何かの祝いの時だったのかもしれない。尾頭付きの魚を付ける家もある。

雑煮 雑煮は元日だけ食べる。味付けは味噌で、具は餅、アブラゲ、ネ

ギなど。餅の形は特に決まっていなかった。細い伸餅を切り分けて入れることもあった。これは今でもやっている。

七草粥 雪が多いので七草を集めるのが難しいが、母がなんとか集めて七草粥を作っていた。

日常の食事 戦後すぐは貧しい暮らしだったが、食事は基本的に三食食べることができた。三食とも同じような献立だった。イワシ、サンマなどが出たらごちそうだった。

汁物 家で採れた野菜や川魚などを具にした。団子汁も作った。

コンニャク コンニャクは売りに来る人がいるので買っていた。自分で作っていた時代は、コンニャクイモを杵と臼でついた。コンニャク作りは農閑期の仕事だった。

弁当 弁当のおかずは漬物だった。

おやつ 桑の実などを食べた。

川魚 ウナギ、アメノウオ（ビワマス）、アユなどが川で獲れた。ウナギはかば焼きにした。アユは獲ってすぐに食べて、保存食にはしなかった。塩焼き、天ぷら、煮付けなどにした。アユを干して出汁ジャコの代わりに使う家もあった。

フナズシ フナズシはたまに食べたが、高級品だったのでウグイを寿司にしていた。

肉 鹿やイノシシの肉を食べた。

住生活

屋根 カヤ葺屋根が多かった。カヤを刈ってオイネ（背負子）で三束ずつ持って帰り、何年もかけて集め、屋根を葺き替える時まで倉庫かツシで保管しておく。二十年に一度くらいの頻度で葺き替える。四面あるう

ち一面ずつ交換していく。葺き替えは高野の屋根屋に依頼して、四人ほどが作業にきていた。

間取り 多くの家が六畳四間で、これをヨツズマイといった。四間の各部屋はデノマ、ダイドコロ、ヘヤ、オクノマと呼び、ダイドコロ以外は畳の間だった。ドマに風呂と芋穴があった。

ドマ 茶や桶作りの仕事はドマで行った。

別棟 別棟（作業小屋）のある家が何軒もあった。そこで茶や桶の仕事をしていた。

風呂 五右衛門風呂で、上に傘が付いていた。風呂の水汲みが当時の子供の仕事だった。昔は桶を使って運んでいたが、その後は金属製のバケツに変わった。

便所 外便所で、大便小便を分けなかった。人糞は肥料にした。

水の利用 九居瀬は水の確保に苦労した。山から水を引き、竹トユで家まで引いた。水を入れた桶を天秤棒で担ぎ、家まで運んだ。飲み水は桶に貯めていた。上流の谷川の水は直接飲めた。洗濯にも谷水を利用した。

井戸 井戸がある家は少なかった。親類の家に井戸があったので、スイカを冷やしてもらいに行ったことを覚えている。

タンク 水を貯めるコンクリート製の水槽をタンクと呼んだ。タンクは一メートル幅で五十センチくらいの深さがあった。中に谷水を引き、溜まった水をバケツで汲んだ。二段構造になっていて、上の段で野菜などの洗い物をしたら、下の段に水が溢れるようになっていて。タンクは青野に残っている。

2 年中行事

正月行事 餅は年末に家で搗いた。搗く日は特に決まっていない。大き

い鏡餅は神棚、床の間、仏壇などに供え、台所にも小さいものを供えた。新年の祝いは家で行った。寺に米を持っていた記憶があるが、これは正月だけではないかもしれない。正月のしめ飾りはワラで作った。神社でも役の人が神社用のものを作っていたと思われる。

仕事はじめ 一月二日が仕事始めで、男性が火をくべる。

挨拶回り 一月二日から五日まで各家を回る。

節分 豆まきをした。

獅子舞 獅子舞が各家を回った。今でも伊勢から加藤菊太夫組が回ってくる。日は特に決まっていない。

雪かき 冬は毎日雪かきをする必要があった。雪かきには木製の板に柄が付いた道具を使った。雪が一メートルほど積もるので、子供は胸まで埋もれた。学校に通うため、母親が先頭に立ち、雪を踏みしめて道を作っていた。

お金の使いどころ 普段は質素に暮らし、結婚式、葬式、厄除け、米寿の祝いなどの行事の時にはお金を使った。

3 人生儀礼

婚姻 ムラの中で結婚する例が多かった。話者が結婚した時には、仏間に合わせて三々九度をした。式には山上の魚屋（イタヤ）が来て、一晚中料理を作ってくれた。伊勢音頭を歌った。

縁談 行商人が結婚相手を紹介することもあった。それが縁となって君ヶ畑の人と結婚した例もある。

宮参り 昭和四十年頃、子供を宮参りに連れて行ったことを覚えている。

葬儀の変化 棺桶は二人がかりで担ぎ、交代しながら墓地まで行く。九居瀬の時は土葬だった。穴掘りは隣組が行った。

墓 墓（サンマイ）は小字中九居瀬にあった。墓地はムラにひとつだけだった。埋める場所と参る場所が分かれており、石を置き塔婆を建てた場所に参っていた。盆はサンマイに参る。家から墓地まで歩いて三十分ほどかかった。僧侶もそこまで同行する。川沿いなので、台風で墓が流れたこともある。

墓の移転 ダム建設の時に、佐目・萱尾とともに大きな墓地に移転した。

第五節 交通・交易

行商 話者が子供の頃は、行商人がよく来ていた。八日市や相谷など様々な地域から来ていた。鍋、服、種苗などいろんな商品を購入した。子供の頃はキャンディーが五円で買え、売りに来るのを楽しみにしていた。

魚売り 八尾亀（山上）が月二回くらい商品を持ってきてくれたが、商品を背負って歩いてこないといけなかった。生魚は傷むので運べず、乾物、缶詰、ちくわ・かまぼこなどの練り物、塩ジャケ、塩サバ、ニシンなどの加工品が主だった。

橋 九居瀬と相谷をつなぐ吊り橋があった。リヤカーも通れないくらい幅が狭かった。

バス 佐目・萱尾から政所間のバスがあった。近江鉄道のバスが木炭車だった。

第六節 その他

学校 山上小学校九居瀬分校があったが、昭和三十九年に廃校になった。小学校五年生からは山上本校に通った。自転車で中学校まで通っていた。高野・山上の中を通っていった。九居瀬から通える高校はなかったため、進学や就職で都会に出た人も多い。

鉾山の痕跡 鉾山は小字扇子野にあったようで、カナクソ（鉾澤）が残っていたのを覚えている。鉾山で採掘していたのは明治時代頃なので、話でしか聞いたことがない。

第八章 蓼畑の民俗

ムラの概要

調査地域のムラの中で最も面積が小さく、政所、黄和田、杠葉尾、九居瀬、萱尾に周囲を囲まれている。愛知川左岸に位置するが、川は集落より下にあり、谷水も湧かないため、水の確保に非常に苦勞する立地で、杠葉尾から井水を分水していた時期がある。かつての生業は茶業と林業が中心だった。旧政所中学校の校舎を再活用した道の駅が平成二十七年に開業した。

第一節 社会組織

戸数 現在は十二戸あり、二十四名ほどの住民がいる。明治時代には三十戸ほどあったが、水不足によりムラの田を茶畑に変更する時に、十分な水量が確保できず、当初三年間の茶が収穫できなかった間に住民が流出した。

組 東組、西組で分かれる。

第二節 信仰

1 神社・寺院

若宮八幡神社 主祭神は応神天皇。

正円寺 浄土真宗本願寺派。山号 廟台山。天台宗から浄土真宗に改宗した。平成初期以降は無住寺のため、他所から代務住職が来ている。

山の神 山の面積が少ないので、山の神は祀っていない。

2 信仰組織

神社の組織

ワカイシ 中学卒業と同時に宮入りし、ワカイシになる。親類を通じてワカイシに入ってもらえるよう頼む。年齢によりカミワカイシ、コワカイシと呼称が変わる。ワカイシの掟は厳しく、下の者は寒い時に火鉢に当たることもできなかった。ワカイシの祭りの服装は、着物、角帯、白足袋だった。現在はワカイシの制度がなくなり、敬神会という組織に変更している。

神主 マワリカンヌシともいう。昔は、ムラの男性全員が歳の順に神主が当たった。女性だけの世帯には当番は回らなかった。毎年九月十五日に交代して、一年間の任期を務める。神主の交代の時は、会所で引継ぎをして、神社へ行って参拝方法などを教えてもらう。人数が少ないため、昭和十三年生まれの話者は神主に七回当たっている。

大神主 専業宮司のこと。神崎郡内の若宮八幡神社の神主に依頼している。

氏子総代 宮守の長。毎年五月一日に交代して、一年間の任期を務める。

寺堂の組織

檀家 集落内のほとんどの家が正円寺の檀家である。かつては全戸が檀家だったが、永源寺などに変更した家が数戸ある。

年番 寺の世話を一年間行う。二戸ずつが年番に当たり、今は人数が少ないため三年に一回は回ってくる。

3 年中行事

神社の行事

正月行事 正月に松切りを行い、松飾りを作った。大宮、小宮、社務所、

手水舎、鳥居など、十本の松飾りが必要だった。枝が七段、五段、三段の松を探して採ってきた。ムラの中に松がないので、他所の山の松を採ってくるのが大変な作業だった。現在は鳥居に二本だけ飾っている。

春の大祭 昔は四月三日に行っていたが、昭和二十四、五年に社務所工事をした後に四月二十五日にずれ、また、昭和三十年代頃から五月二日がヨミヤ、三日がホンビ、四日がゴエンに変更になった。五月三日になったのは、蓼畑は政所に親類が多く、政所の祭日と合わせることにより親類間の餅の贈答などの手間を無くすためだった。

・ヨミヤ

五月二日のヨミヤには、神社の掃除や式の準備、幟起こしをする。夜十二時になると、高張提灯を先頭にムラ中を回って太鼓を鳴らした。若い衆に反目する家の前で、「祭りの太鼓や」と太鼓を打ち鳴らすこともあった。太鼓や鉦はかなり大きなもので、棒を刺して二人で担いだ。小字奥畑の方から回る。酒を飲み過ぎて谷へ太鼓を転がしてしまっただけがあった。現在は、軽トラに太鼓と鉦を積んで移動している。太鼓と鉦の音で子供が起きると苦情があり、深夜ではなく夜の早い時間に回るようになった。

・ヨミヤゴモリ

昔は、ワカイシが一晩中神社に籠る「宵宮籠り」をした。寒い酒をたくさん飲んだ。

・幟

ヨミヤの朝一番に、数人がかりで境内の中に二本立てる。七間（約十四メートル）の棒に「若宮八幡」の幟を付けて、それを本社前の幟立てのところに立てる作業である。ロープを三本付けて、立木に滑車を付け、引っ張る人、押す人に分かれて立てていく。幟はホンビの日

の内に倒す。他地区では立木が金属製のポールなどに変わっているが、蓼畑では今も木を使っている。大変な作業なのでいつまで続けられるか分からない。

・ホンビ

三日は湯立てを行う。大神主（宮司）と市さん（巫女）が来て、釜二杯で湯を焚き、湯神楽が舞われる。行事は午前中で終わる。女性はあまり参らず、親類の接待などをした。ヨモギ餅を作って重箱に入れ、親類の家に配り歩いた。ごちそうとしてバラ寿司（ちらし寿司）も作っていた。昔は、他所へ転出した人も、祭りの日には帰ってきた。

・チマキ巻

五月五日のこどもの日に、チマキを作って全戸に配っていた。五月五日の行事だったが、五月四日のゴエンの日に変わり、今では、五月三日の午後になった。昔は神主の家でチマキを作ったが、現在は会所に集まって総出で作っている。昔は神主が熊笹を集めた。

団子は楕円の形状にする。団子のレシピは、米粉一キログラム、砂糖三百グラム、塩少々で七十個分ほど作ることができる。昔は四百本ほど



写真 29 チマキ作り（令和5年）
小辰比呂志氏提供

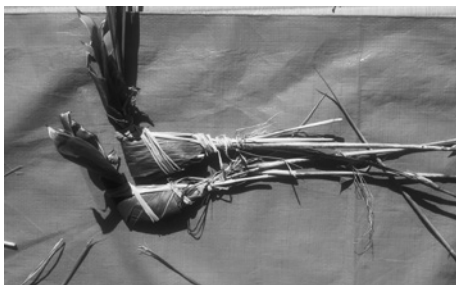


写真 30 完成したチマキ（令和5年）
小辰比呂志氏提供

作った。女性が団子を捏ねて、それに男性が笹の葉を巻くという分担で行う。独特の三角の形状に仕上げる。大釜を出してきて、薪で火を焚いて湯を沸かし、熊笹で巻いた団子を茹でる。

できあがったチマキは神社に供え、そのお下りを各戸に配る。神様用には熊笹にスキの若芽を刺した特別なものを供える。配られたチマキを家の裏口に刺しておく蛇除けになるといわれている。以前は政所や杠葉尾、黄和田でもチマキを作っていたが、今では蓼畑だけになった。

熊笹は、生育の周期によって一斉に枯れた時期があり、岐阜県境まで分けてもらいに行った。近年はまた生えるようになった。

夏祈禱祭 ナツギトと呼んでいる。七月第一日曜日に行う。大神主と市さん（巫女）を呼んで、湯祈禱をする。茶を栽培している家は、その年に採れた新茶（平番茶）を茶缶に入れて供物にする。茶のお下りは、神社、寺、会所などで使う。ヨモギ餅も作る。

百灯祭 盆の八月十四日に行う。マワリカンヌシが祈禱師を務め、大神主は来ない。百十枚のカワラケに燈心、油を入れて火をつける。

神主交替祭 九月十五日に神主を交代する。御鏡を家で作り、枝豆、畑の芋（サトイモ、小芋）を供える。神事の内容や方法を旧任から教えてもらう。子供に神主の役が回って来て務められない場合は、その親が代理で行うこともある。

秋祭り 十一月に行う。マワリカンヌシが祈禱する。藤井酒造の白酒を供えている。

新嘗祭 十一月の最終日曜日に行う。

祭りの神饌 祭りの神饌は共通で、御鏡、鯛、昆布、海苔、スルメ、時々畑のもの、果物（リンゴ、ミカン）、菓子などを供える。

寺堂の行事

永代経 皆が集まって経を上げる。三月に行う。

盆 墓参りに決まりはないが、八月十五日に参ることが多い。盆行事は年々簡素になり、今は花だけ供えている。昔は供物も持って行つたが、獣害が起こるため供えなくなった。

地藏盆 八月二十三日前後の日曜日に行う。ムラ外れの地藏尊に集まり、提灯を吊るして供え物をする。長老が導師になって経を上げることになっており、現在は昭和十三年生まれの話者が導師を担っている。

報恩講 十月に行う。報恩講は総出で行った。年忌があってもなくても、年に一度報恩講をした。報恩講の前に仏具や飾り物を磨く。前日に親類が寄つてオハギを作った。

講 毎月第三日曜日にお講がある、お講の時は、鐘を鳴らして始まりを知らせる。

虫干し 五箇村（相谷、佐目、蓼畑、杠葉尾、萱尾）の共有文書の虫干しを毎年行う。近世に山の境界について甲津畑と争いが起きた際に、五箇村で協力して裁判をした記録を今でも持ち回っている。普段は区長が保管して、当番のムラの寺で虫干しする。各字から二人ずつ寄る。中身と鍵を一字ずつ持ち回る。

第三節 生業

かつてのムラの収入は、主に茶業と山仕事だった。山仕事は林業、炭焼きをしていた。木の伐採や炭焼きは男性の仕事だった。畑や茶もしていた。

1 山仕事

共有林 蓼畑山に惣山（共有林）があり、古い地籍図にも載っている。

三重県境にある千香山^{せんこうざん}も蓼畑の惣山で、面積が三百〇四百町歩ほどある。青年山というのもあった。他村との共有林はない。共有林は全部植林している。戦後十年ほど経った頃に造林公社の薦めで全て植林したが、それまでは雑木林だった。苗をおいねて（背負って）木を植えにいった。柴は集落周辺の共有林で採った。仙香山では炭焼きや山焼きを行い、泊まりがけで行くための山小屋があった。今は車で行けるが、歩けば半日かかる。昔は茨川まで行き、そこから歩いて行った。林道がない頃だったので約一時間半かった。政所中学校の上には学校林があり、食糧難の頃はサツマイモを植えていた。個人山もあり、ある話者は一、二町歩所有している。

林業 昔は営林署の木を切っていた。林業従事者が多く、製材や木こりもした。他所の人の山の木を買って切らせてもらうこともあった。木は丸太の状態で出荷し、加工は八日市の製材所で行っていた。橋の向こうには角京製材という製材所もあった。倒した木は枝を払い、一年間枯らしておく。木を伐る時期は、八月は切らない方が良く、九月から十二月ぐらいが適当である。四月は切っても良いが、樹皮を剥いてはいけない。昭和三十〇四十年代は、横引きの鋸で切った。刃渡り五十センチほどの直刃の鋸だった。矢（クサビ）をハンマーで打ち込んだ。

材木の積み出し 伐り倒した木は担いで持って降りる。馬で運んだ時代もあった。戦後はトラックで運んでいた。

炭焼き かつては炭焼きもしていたが、今は焼いている人はいない。山中に窯跡が残っており、紅葉尾や箕川にも残っているのを知っている。近年になつてから竹炭を焼いたことがある。

カヤバ 共有のカヤバがある。カヤの邪魔になる木を伐らないといけなため、十一月二十日頃に総出をすると決まっていた。

山普請 盆の八月十六日に山道と里道の草刈りをする。遠くの仙香山までいくため、昔は二日間かけて行っていたが、四十年前には一日になっていた。日程も以前は八月十六日ではなかった。

2 農業

畑 茶を植えず畝のない野菜用の畑をヒラバタケと呼んだ。サツマイモ、ジャガイモ、ナス、キュウリ、トウモロコシ、豆、冬瓜などを作った。今は野菜を育てても猿が食べてしまう。

桑畑 茶畑の横に養蚕のための桑畑があった。学校でも桑を育てていた。**コンニャクイモ栽培** 昔から茶畑の畝の間にコンニャクイモを植えており、それは現在も継続している。猿が食べないので育てやすい。コンニャクイモは育つのに三年ほどかかる。また、蓼畑は風が強い立地のため、コンニャクイモは茶の木を守るためにも有効だった。

家で作るコンニャクは自家用だった。永源寺町役場の職員が永源寺地区の特産品としてコンニャク生産を推進したことから、平成初期には正円寺の庫裏に「こんにやく道場」を設立し、地元の人々が共同でコンニャクを作る場として活用した。石灰ではなく茶の木（ダイガリした枝）や雑木を燃やした灰を用いるのが特徴で、おいしいと評判だった。正月用に二、三百丁つくった年もあったが、手間がかかることもあり、十五年ほど前から下火になった。近年になつてまた復活させようという試みもあった。



写真 31 こんにやく道場（平成7～8年）
「永源寺日和」より転載

政所の住民が、年末になると蓼畑の人がコンニャクの注文を取って回っていたことを覚えている。

3 茶業

茶栽培 ムラの中に茶畑が一町歩ほどあった。現在の道の駅の場所も昔は茶園だった。蓼畑でも良い茶がとれた。昔は覆いをつけて玉露なども作っていた。戦後は米と茶を交換したこともあり、需要があった。政所とは土質が異なり、黒く湿った土である。昭和四十年代に茶工場の火災が起こってから生業のあり方が変わり、茶業だけで生活するのは難しくなった。かつては販売もしていたが、今は自家用にしか作っておらず、一番茶しか飲まない。

茶摘み 昔は手摘みで収穫していた。手摘みの頃には、五月末～六月半ばまで茶摘みをしたが、十年ほど前からは機械刈りになった。手摘みの頃は、下のムラの女性に手伝いを頼んだ。茶摘みは女性の仕事で、加工は男性の仕事だった。萱尾や佐目から、六十～七十代くらいの女性に来てもらっていた。茶の季節には人手が不足するので仕事がたくさんあった。三重県からも手伝いの人が来ていた。茶摘みの時期は学校が休みになり、子供も仕事を手伝った。茶摘みをする指の皮が割れ、絆創膏を貼っても朝露でふやけて取れてしまった。今でも手摘みしている家がある。

茶の加工 昔は家の炉で加工する家が三、四戸あった。昭和三十年代から茶工場に依頼するようになった。今は政所の農協に頼んでいる。

茶工場 茶工場が集落内にあった。昭和四十年頃に火災が起こり、村全体が焼けたため移転した。

茶籠 茶籠は大きくて丸いものと小さいものがある。茶摘みの時は小さい籠に入れていき、それがいっぱいになると大きな籠にまとめていく。それを茶工場に持って行った。茶籠は佐目辺りの集落で買ってきたことを覚えている。蓼畑には木工品や竹細工などを作る職人はおらず、竹藪もないので、自前で作ることはなかった。

肥料 畝の間を耕して肥料を入れる。草やカヤを干して茶畑の畝の間に敷く。また、油粕を入れて三つ鋤で耕す。肥料入れは十月に行う。茶用に個人のカヤバを持っている。無農薬で栽培していた。

4 その他

養蚕 今は行っていないが、良い現金収入になったため以前は多くの家が行っていた。昭和前期には、家の南側の二間を使って蚕を育てていた。茶の木の間には桑を植えた。糸引きまでしたものを、京都から来る業者に売っていた。

漁法 川ではアユ、イワナ、マスを釣った。ウナギは石の裏などにいて、ギギなどを餌としてウナギバリで獲った。アユやイワナは放流していた。魚を獲るための鑑札を購入していた。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

衣生活

靴 冬は雪が積もるのでワラの深靴を履いた。ある話者は、戦中に配給で靴が当たったことが嬉しくてすぐに履いていたことを記憶している。

組紐 政所に西陣織の工場があり、羽織の組紐を織っていたことを覚えている。蓼畑にはなかった。

食生活

主食 麦ご飯、芋ご飯などの混ぜご飯をよく食べた。戦後は大豆を混ぜたご飯を食べていた。

山菜 山菜は山に採りにいった。多くはワラビだった。イタドリもあったが、近年では採れない。ワラビは熱湯と炭酸に入れて湯がく。ゼンマイは白和えにした。クサギは湯がいて乾燥させて保存し、使う時に戻して金時豆と一緒に炊いた。

キノコ 昔は山にマツタケがたくさん生えていたので、しょっちゅうマツタケご飯を作った。スギヒラタケも生えていた。

魚 川魚はアユ、イワナ、マス、ウナギなどを自分で獲った。ムラの人が八日市の市場からアユ、サケ、タラ、タイなどを仕入れてきて、自転車ですべていたものを購入した。アユは炊く、焼く、お造りなどの方法で食べた。

栗 栗の木がたくさん生えていた。湯がいたり、蒸したりしておやつにした。

干しイモ サツマイモを切って、家の二階に吊って干しイモにした。間食として食べた。

漬物 大根のヒネ漬け（古漬け）、日野菜漬けなどを作った。水菜漬けは、水菜を洗って干し、ヌカ、塩、干した渋柿の葉、ナスの葉と一緒に入れた。キュウリとナスのドボ漬け（ドブ漬け）もした。ミョウガは酢漬けにした。漬物小屋があった。

農繁期の食事 茶摘みの繁忙期には、朝五時前には畑に行った。家に帰る時間も惜しいので、おにぎりを握って持っていく、茶畑で食べた。食事は重箱に入れて、虫が入らないよう木の枝にぶら下げていた。

住生活

間取り 六畳四間で、デ、オクノマ、ヘヤ、ダイドコがあった。デにはイロリがあった。オクノマに床の間と仏壇があり、仏壇の上に神棚があった。ニワ（土間）にカマドがあった。表口をカドグチ、裏口をセドグチといった。茶の時期になると畳をあげて床を化粧板にした。

屋根 カヤ葺屋根で、カヤはムラ総出で集めに行った。東組と西組で分かれて、峠を越えてカヤバまで採りに行った。山の高い場所に生え、風雨に晒された細長いカヤが良いとされた。葺き替える家の順番が決まっている。屋根葺きは、屋根屋に頼んだ。

衛生掃除 昔は畳をあげて、葉を撒いていた。終わったら衛生掃除完了の札をもらった。

地鎮祭 若宮八幡の神主に依頼した。

蔵 政所には白い壁の蔵があるが、蓼畑にはない。

風呂 山から木を伐ってきて風呂用の燃料にした。親類（兄弟の子や分家など）の家でもらい風呂をした。水汲みは子供の仕事だった。風呂の水は溝伝いに便所に流し、肥料にした。

便所 外便所で、大小、男女で分かれていた。

飲料水の利用 蓼畑は山が浅く裏山に谷もないので湧水が出ず、水の確保に非常に苦労した。井戸は湧水をポンプで汲み上げた。ポンプ室や貯水タンクは今でも残っている。昔は湧水もわずかしがなく、兄弟がお歳暮として水を持って来たこともあった。湧き水を貯

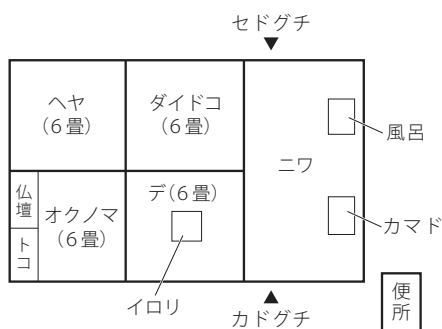


図1 間取り図

めるための共同の樽があり、深夜二、三時くらいに水をもらいにいった。朝に行くときと既になくなってからである。紅葉尾から山を越えて水を引いていたようで、井水用の穴が掘ってあるのを山で見つけた。昭和の早い時期に簡易水道が通り、滋賀県下で二番目だったといわれている。昭和の大火の際には、ムラの下にある川まで水を汲みに行った。

雪 雪が積もると家の一階が埋もれるので、屋根から外に降りた。

インキョ 家の離れに作る。政所には数戸あったが、蓼畑にはなかった。

2 人生儀礼

嫁入り 昔は嫁入り行列を夕方に行った。提灯を持って行列を組み、荷物はリヤカーに載せて運んだ。

衣装見せ 結婚式の翌日に、嫁入りに持って来たタンスの中の着物などをムラの人に披露した。

葬儀 葬儀はムラ総出で行った。棺桶、輿、色紙の飾り、提灯、ワリバシ、棚盛りなどを葬儀の度に一から作った。棺桶、輿、塔婆は大工だった話者が作った。輿は四角で、材質はモミの木、大きさは一尺六寸五分と決まっていた。紙飾りは輿の四方に貼る。ツジロウという曲がり角に置く飾りも作った。葬儀の翌日には死者の寝具や衣類を洗う「セントク」を行い、これはオナゴシの仕事だった。昭和から平成にかけて、土葬から火葬に変わった。

墓 サンマイと呼び、昔から位置は変わっていない。蓼畑の墓は区割りがなく、空いた場所に埋める。出棺の日の朝から穴を掘る。「トメアナ」といって一度掘ると掘り直してはいけない決まりで、石が出てきたらそれを避けるように掘り進む。穴掘りは五、六人の組で行い、掘った後は風呂とごちそうの接待があった。盆と彼岸に参る。

第五節 その他

行商 八日市から自転車で魚を売りに来た。

商店 ムラの中に商店はなく、他所に買い物に行かないと生活できなかった。政所には魚屋などの個人店がたくさんあった。

マンザンフシン 盆に道の草刈をムラ総出で行うことをマンザンフシンと呼ぶ。

ミズフシン 今でも行っている。水路が砂などで詰まるので、定期的な掃除が必要である。

火災 昭和四十年頃の火災で九軒に延焼し、ムラの大半が焼けた。



写真 32 蓼畑の大火後（昭和 40 年）
「永源寺日和」より転載

第九章 杠葉尾の民俗

ムラの概要

永源寺地区の東端に位置する。地先が三重県境に接しており、古くから三重県との交流が深い。八風街道沿いに集落が栄え、近江と伊勢を行き交う人々で賑わった。集落の東側で神崎川と茶屋川が合流する。山地の面積が広いため、かつては炭焼きや材木生産などの山仕事盛んに行われた。イワナの養殖・放流に成功してムラの名産品となっている。

第一節 社会組織

1 ムラの組織

戸数 今は五十五戸ほどの家がある。昭和中期には七十五戸ほどあった。

集落 光林寺と春日神社の付近を境に集落を上と下に分けている。光林寺より東側をカミヤカミデ、西側をシモヤオグチと呼んでいる。

村組 集落の中に西、東、中、上の四つの村組があり、上の集落には中・上の組、下の集落には西・東の組が属している。もっと昔には八つの村組があったと聞く。

寄り合い 村組の組長の家で開催される。ムラ全体のことについては自治会館で行う。

罰則 以前はムラの普請や集会に参加しないと罰則があったが、共有林の価値が低下するにつれて罰則もなくなった。あくまでも共有林の使用というメリットの上に成立していたようだ。

2 年齢組織

子供会と青年会 以前は子供会と青年会があった。子供会の成員が成長

すると、青年会に加入する。青年会は中学卒業から二十五歳頃まで所属する。青年会に加入することで一人前のムラの成員と認められた。かつては青年会のことを青年団と呼んでいた。

第二節 信仰

1 神社・寺院

春日神社 主祭神は天児屋根命、経津主命、武甕槌命、姫大神。境内社に蛭子神社がある。杠葉尾のムラの住民として認められるには、春日神社の神事に必ず参加する必要があった。普段はお宮さんと呼ぶ。

光林寺 浄土真宗仏光寺派。山号 利益山。元は天台宗だったが、十四世紀に浄土真宗に改宗したと伝わる。ムラの多くの住民は光林寺の檀家だが、禅宗の檀家の家もある。

地蔵 ムラの各地に地蔵がある。地蔵さんと呼んでいる。

2 信仰組織

社守 かつては当番制で、男性二人が年齢順に選ばれた。四月から翌年三月までの一年間を任期とする。任期を終えると二人とも交代になり、新旧の引継ぎが行われる。日常的には神社の清掃などを行い、毎月一日と十五日には榊と御神酒を供える。社守を務めるにあたり、特別な儀式を行うことはないが、話者よりも上の世代ではお清めなどがあつたと聞いている。春日神社は鹿が神の使いであるため、鹿肉だけは食べてはいけないといわれた。多くの男性は四十歳前後で社守を担うこととなり、社守を務めることで一人前とされるため、社守を務めないうちに亡くなると可哀想だと捉えられていた。

近年では人口減少によって社守の職務が負担になったため、行事や参

加日を減らし、有償にすることで制度を存続させている。また、社守に代わる組を作り、社守が担っていた仕事を代理で行っている。三ヶ月交代で神社の掃除をして、毎月一日に供物を交換する。

氏子 氏子総代は、一年に三人が務める。四つの村組のうち、三つから一人ずつ選ばれる。

神主と巫女 専門宮司が必要な行事は、山上町の歳苗神社の宮司に依頼する。宮司を呼ぶのは春祭り、夏祈禱、山の神（十二月と三月）の計四回で、巫女は春祭りと夏祈禱の二回呼ぶ。

3 年中行事

神社の行事

正月 昔は、社守とその親類が大晦日から夜通しで年越しするオツモリを行っていた。今は自治会役員、氏子総代が祭り事を担当する。以前は社守の家で餅を搗いて供えた。餅、コンブ、ミカンなどを氏子に配る。

山の神 杵葉尾の山の神は、山道にある地藏を指し、神崎川に行く道沿いにある。以前は集落の下にあったのを上に移動させた。社守が花を供えている。これは女性も参る。

獅子舞 三月頃に桑名市から加藤菊太夫組が来て各家や春日神社を回っている。以前はもつと早い時期に来ていたが、雪が降るため三月に変更された。報酬として米を渡したが、いつからか現金と酒になった。報酬は盆に入れて置いておく。

春祭り 一年で最も大きい行事で、春日神社で行う。春祭りは、前日、本祭、後宴で構成されている。

・前日

五月四日に行う。春日神社と書かれた幟を立てる。春日神社に酒を

一升供え、高張提灯を十二個、五十センチ径の太鼓を用意する。十人ほどの氏子が午後十時頃からムラ中を回る。太鼓に棒を付けて二人で担ぎ、道中では太鼓を叩きながら進んでいく。叩くりズムは特に決まっておらず、思い思いに叩いていた。新婚の家などの前では他より多く太鼓を叩く風習があり、その家からは一升瓶が進ぜられた。

・幟

春祭りでは幟を三本立てる。幟の棒は今はアルミ製だが、昔は木で自作していた。寸法は、高さが八間（約十四・五メートル）、幅は二尺六寸（約八十センチ）としている。幟の棒に適した木は、個人林の木であっても幟のために提供することと定められている。幟は三年に一回、一本ずつ交換する。幟用の木は、山から根ごと掘り起こして春日神社の前まで運び、その場で棒状に仕上げる。根は付けたままで枝を落とし、樹皮を剥き、柔らかい砂をかけて棧俵で表面を磨く。この作業はムラ全体で協力して行うもので、三十年ほど前は三十人がかりで行った。

・本祭

五月五日の本祭は、神主と巫女が午前十時頃に到着し、社守とともに神事を行う。祝詞をあげ、巫女が湯神楽を行う。湯神楽の飛沫にかかると夏病みしないといわれ、人々はこぞって頭に浴びようとしていた。また、笹湯を飲む。二十年ほど前に子供神輿と法被が寄付され、ムラの中を引いて回ったが、これは三、四年で終了した。その後は老人会が車で引つ張るようになり、現在では祭りの日に飾るだけになった。

・後宴

五月六日の後宴では祭りの片付けを行う。幟を倒し、棒を三本まと

めて寺の軒に片付けた。

夏祈禱 七月五日頃に宮司と巫女を呼び、春日神社で神事を行う。

瀧まつり かつては七月七日の行事だったが、七月の第一日曜日になり、夏祈禱と同日の午後へ変更した。神崎川西側の山の中の、大きな瀧の横に不動さんを祀るお堂がある。かつては旧の山道を通って行ったが、今は車道があるため車を降りて二百メートルほど歩くと着く。昔はビワ、モモ、スイカなどを供え、子供達も参ってそのお下がりを楽しんだ。今は自治会の役員だけが参っている。

盆踊り 八月十五日に春日神社で盆踊りが行われる。八月十四日の夜は江州音頭を踊った。音頭取りの桜川氏が来て、子供も大人も参加した。三十年ほど前は、盆の夜に御園（八日市地区）から商売人が来て、夜店でおもちやなど売っていた。青年会が春日神社に因んで「春」の字を書いた百灯をあげた。近年では大規模には行わないが、役員が中心となって継続している。

虫干し 八月の盆の後に行われる行事。五箇村（紅葉尾、蓼畑、萱尾、佐目、相谷）の共有文書があり、当番制でこれらの書物を管理している。

寺堂の行事

地藏盆 八月二十三日頃に行われる。二十〜三十年前頃に子供の遊びから始まった行事で、昭和初期には無かったと思われる。上下の集落で一箇所ずつ地藏がある。神社の前にある地藏は、禅宗の人の墓だったと伝わる。今は老人会を中心に行っている。

講 以前は月に一回、寺に集まってお参りしていた。弁当やおにぎりなどを持参した。昼の三時頃から始まり、主に女性が多いが、誰でも参加できた。

報恩講 十一月十日頃に三日間、御講（報恩講）を行う。ホンコサンという。一年に一回、説教師に来てもらった。ホンコサンの前に仏具のミガキモノをした。前は報恩講に行くことを「団子をしにく」と言っていた。ホンコサンは家の仏壇でもするが、これは特に日程は決まっていない。昔は親類も呼んだが、今は家族だけで済ませる。

第三節 生業

1 山仕事

共有林 村の山は「惣山」と呼ぶ。ムラの成員なら共有林の木材などの資源は自由に使って良い。土地の売買は許されていないかった。

材木 かつては手鋸で木を切っていた。それを業者に売ったり、炭や薪として利用したりしていた。

材木の積み出し 切った材木はセンで道路まで出した。

植林 造林公社によって杉やヒノキの植林が行われたが、外国産の安価な木材の台頭であまり売れなくなった。植林などで得た資金は、ムラのインフラ整備や道具購入費などに還元された。

薪 風呂などの燃料にする薪は、山から切ってくる。枯れ木を探し、五十センチほどの長さに切り、ハシゴに載せて持ち帰る。枯れ木であればどの山で採ってもよかった。枝打ち部分なども燃料として利用した。ムカイヤマにある大きな岩に太陽が隠れないうちに作業を終えて帰る決まりになっており、冬は十六時半ごろ、夏は十八、十九時頃に帰る。

炭焼き 炭焼きはどの家でも行っていた。各家の炭窯があり、今でも山中に炭窯跡が散見される。炭焼きは、積雪で山に入れない時期を除いて一年中行った。炭焼きを行う場所をアタリ山といい、場所を借りて炭焼きをする。個人山で行うこともあった。炭焼きは夫婦で作業を行う。早

朝に行つて、当日中に帰る。泊まり込む人もいたが数は少なかった。男性は約四、五俵、女性約二、三俵の炭俵を背負つて持つて降りた。カシの木などの広葉樹の炭が高く売れ、良い現金収入だった。山上や八日市から買いに来る人がいた。

カヤバ 村の共有のカヤバ（カヤカキバ）を「アワノコバ」と呼んだ。十二月四、五日頃に解禁されるまでは入つてはいけない。解禁日になると、銚子ヶ口から山に登り、カヤを取りにいった。面積は五町歩ほどであった。銚子ヶ口以外にも、カヤが採れる場所ならどこへでも行つて刈つていた。カヤを刈る時は早朝から出発した。屋根を葺き替える家の人が早めにかやばに行き、火を焚いておく。皆が揃つたらカヤ刈りを始めた。アタリバ（担当場所）があり、家の順番に線を引く。カヤはハシゴ（背負い具）に載せ、紐でくくつて持つて帰る。

入山の時期 かつては山の神の日は山に入ることが許されなかったが、現在は特に制限はない。煮炊き用の枯れ木はいつでも取つても良かった。

2 農業

田畑 畑は家から離れたところにあり、自家用の作物を育てていた。サツマイモ、ジャガイモ、ナス、カボチャなどを作った。肥料は下肥を使っていた。戦争中は特にサツマイモを作っていた。田では自家用米を生産していた。

畦豆 畦に大豆を植え、それで味噌をつくった。

牛の飼育 五十年前までは農耕用の牛を飼っていた。一戸で一頭を所有するのは難しく、数戸で「仲間牛」として、十日ほどで飼育する家を交代した。牛小屋は各家の玄関を入つたところにあつた。牛の糞尿は田の肥料にした。バクロウ（家畜商）が山上にいた。耕運機が導入された時

に牛を売つた。

牛の餌 牛の餌を調達する作業は女性の仕事だった。夏場は草を田や土手で刈つた。冬場はワラを押切で三センチほどに切り、牛の餌専用の一斗ほど入る大釜で炊いた。

茶 自家用と販売用に作つた。

菊栽培 昭和十年生まれの話者は、平成のはじめ頃から紅葉尾で菊栽培を始め、彦根や京都の市場に卸していた。菊が咲く風景が美しく、バスに乗つて団体の観光客が菊を見に来ていた時期もある。

3 その他

養殖・放流 池田養魚場が天然のイワナの養殖に成功し、ムラの名産品となった。アユも放流しており、釣りスポットとして人気が出たが、キャンプや釣りで河川が荒れ、年々魚の数が減少している。

川魚 昔はイワナのことをイモナと呼んだ。魚獲りが上手な人はイワナ、ウナギなどを採つてきて食べた。

養蚕 かつては養蚕業も行われたと聞いている。良い収入源だった。

諸職 鍛冶屋がムラに一軒あり、農具の製造、販売、修理をしていた。大工もおり、家を建てる時にはムラの人が地搗きを手伝つた。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

衣生活

ワラゾウリ 冬の間の内職として一年分を作り溜める。ワラゾウリでぬかるんだ地面を歩くと傷むため、脱いで手で持つて歩いた。

食生活

野菜の保存 野菜は農具用の小屋に入れて保存した。冬は芋類や大根をイモツボに入れた。

米 飯米は家の田で収穫した。配給の時代には米を供出したこともある。一反につき三俵ほどしか収穫できなかった。

キノコ モミタケ、スギタケ（スギヒラタケ）などを採りにいった。

茶 自家用に栽培し、家で加工していた。茶畑は山の麓にあった。現在は在来種を種から育てる試みがなされている。茶畑の間にコンニャクイモを植えた。

おやつ カヤの実を炙って食べた。栗は栗餅にして食べた。冬に寒餅^{かんもち}を作るとカビが発生しにくかった。一月半ばにはカキモチを作った。正月用の餅とは別についた餅を、吊るしたりムシロに広げたりして作る。アラレも作った。

フナズシ 湖北からフナを購入して家で漬けた。

豆腐 村内に豆腐屋があった。

戦後の食糧 戦後は食べるものがなく、ご飯に芋やイタドリを混ぜて食べた。伊勢湾にアメリカ軍が上陸するという噂が流れ、相谷から米をもたらって逃げる用意をしたことがある。

住生活

間取り デ（デエ）、ザシキ、ヘヤ、ダイドコの六畳四間が基本である。玄関を入ってすぐの部屋がデ、その奥がオクノマあるいはザシキで、ここに仏壇がある。デの後ろの部屋がダイドコロ、一番奥がヘヤ。デに神棚があった。ニワには風呂とウマヤがあり、カマドには春日神社の札を貼った。

カヤ

昔はどの家もカヤ葺き屋根で、屋根材となるカヤを集めた。カヤのことを「カヤツコ」と呼ぶ人もいる。カヤは屋根裏に置き、イロリの煤を被って強度を増すことで豪雪にも耐えられるようになるといわれる。刈ったカヤは、家の軒にくくって保存した。屋根は春先に葺き替えるので、冬場に濡れて湿気ないようにした。カヤは短く細い方が長持ちするといわれた。

萱講 ^{かやう}萱講が明治中頃に作られたと聞く。年に一回、東西の組で二戸分の屋根を葺き替えるため、カヤを各家が協力して出す。許可なく萱講を抜けたものには罰則があった。

カヤの寿命は十〜二十年ほどで、寿命が来る前に葺き替える順が決められる。毎年十二月になるとムラ総出でカヤを刈りに行く。十二月の頭の内を日を決め、一斉に山に入り、早い者勝ちで近場から刈っていく。当番の家に、直径五十〜百センチの束を三束分持って行くことになっていった。カヤを集めてもらった家は、帰ってきた人に汁粉をふるまった。雪が積もったら中止になる。萱講が行われなかったのは、豪雪の時と戦時中くらいだったが、人口減少や手間などから萱講を抜ける家が続き、昭和五十三年に消滅した。萱講の記録は文書で残されている。

屋根葺き 屋根の葺き替えは、一族総出で行った。葺き替える家の順番は、明治二十年頃に作成された「萱刈当番人名表」に記されている。屋根の大きさに比例して使用するカヤの量も増減した。屋根の葺き替え職人を屋根葺きさんと呼び、市原や高



写真 33 カヤ刈（令和6年）

野に四く五人いた。屋根の葺き替えは、通常は十く二十年に一回だが、三年に一度の頻度で葺き替える家もあった。

家の材木 家を建てる時は、親類やトナリが中心になって木を伐ったり大工仕事を手伝ったりした。作業後のお呼ばれもあった。

風呂 風呂は桶風呂や五右衛門風呂だった。

薪 燃料は薪を使っていた。燃料の薪はツシに置いて保存した。枯れ木を集めて火を焚くこともあった。昭和三十く四十年頃にプロパンガスに切り替わった。

水の利用 それぞれの家に井戸があった。洗濯も食事も井戸の水を使った。昔はツルベで水を上げていた。今は電気を動力にしている。井戸掃除などは特にしなかった。山の湧水だったので寄生虫がいた。

2 年中行事

正月 正月に特別な何かを行う決まりはない。餅は各家でつき、鏡餅は餅の上にはミカンを乗せる。春日神社に供える餅は、今は業者に注文しているが、昔は社守が餅を搗いていた。その餅を細かく切り、各家に二枚ずつ配っていた。

普請 山仕事のために下草刈りをするのを普請といった。一年に一回、二日間ほど行った。

道普請 山仕事が盛んだった頃は、山仕事や炭焼きに行く道を整備する道普請（道刈普請）を行っていた。惣山は銚子ヶ口岳、広河原、須谷川など、いくつも道があった。若い人は山奥を、年配の人は集落周辺を担当し、草刈りや階段の整備をした。十五年ほど前までは、盆明けの八月十六、十七日に集落の成人男性が総出で年二回行っていたが、山仕事の従事者の減少とともになくなっていった。最近では、無人走行車の走行

試験のために、久しぶりに道普請を行った。

ユブシン 水利施設の普請をユブシンといい、田んぼに水を流すための水路が詰まらないように掃除した。四月の第二日曜日に行く。掃除に出られなかった場合は不足として、別の仕事をする事で埋め合わせた。今は環境美化活動の一環になっており、春と秋に行われている。

シシガキ作り シシガキ作りも普請の一種。石を積み上げて、野生動物から畑を守る石垣を作る。全長一里（約四キロ）ほどある。毎年八月十九日にシシガキ周辺の草刈りをした。

雪かき 雪かきは基本的に自宅周辺とそれに面した道路が持ち場で、共有地や家屋のない場所は組で協力して除雪した。

3 人生儀礼

安産祈願 戌の日に親元から腹帯を貰った。

出産 昔はムラの手慣れたおばあさんが赤ん坊を取り上げていたという。自宅出産の頃は、寝室で出産した。出産後、母親はウマヤにワラなどをたくさん入れて、大きいタライに湯を入れて洗ってもらう。洗う時に干したホシナ（大根の葉）を入れ、それで乳を揉むと母乳がよく出るといわれた。山上には産婆がいた。昭和三十年代には病院での出産が主流になっていた。

後産の処理 サンマイに後産を埋める専用の場所があった。

オビヤ餅 出産後、オビヤ餅が実家から送られてくるので、これを親類に配る。昔は組にも配っていた。

産後の禁忌 産後は不浄だと言われ、母親は部屋に一週間籠っていた。穢れるため下駄を履いてはいけないといわれ、ワラゾウリを履いて外便所に行った。

名付け 女性の識字率が低かった頃は、自分の名を書きやすいように片

仮名や平仮名の名をつけた。男性は漢字だった。

産後の食べ物 ズイキ（センバ）の味噌汁や餅を食べると良いとされた。

また、柿は体を冷やすので良くないとされた。

宮参り 宮参りは一般的に産後三十五日に行なったが、祭りに便乗して

まとめて宮参りしたこともある。春日神社に姑と子供とで参った。

元服 男性は十八歳で元服する。元服のお祝いをした。普請などができ

るようになって一人前とされる。

婚姻 昔はムラの中で結婚する人が多かった。仲人は男性方の家の親類

二名に頼んだ。

結納 結納品は、金襴緞子の帯に金子が少しついた。経済的に余裕があ

れば酒やスルメも渡した。

嫁入り 嫁入りの際は夜に提灯行列をしたので「狐の嫁入り」といわれ

た。まず、婿と男性方の親類が嫁の家に迎えに来る。婿は、嫁の家で食

事をした後、嫁より先に帰る。これを「食い逃げ」といった。それから

嫁が嫁ぎ先の家向かうのを「出立ち」といい、伊勢音頭を唄って見送った。

嫁は縁側から家に入り、嫁の叔母と一緒に仏壇に参る。

式では、三々九度をして、式が終わる頃に食事をする。食事は鯛とう

どんで、魚松さんに仕出しを頼んだ。男性は紋付の羽織袴。女性はクン

ボシ（ツノカクシ）をした。小倉（愛東地区）から髪結い屋さんが来て、

地髪で日本髪にした。クンボシは明けの日に外し、丸髷に結び直した。

荷物は竿で担いで昼のうちに運んでおき、衣装見せをした。式の次の日

の晩は、旦那の親類が集い、披露をした。昭和五十年代には挙式を家で

しなくなっていった。

新婚旅行 昭和三十九年に結婚した話者は、白浜、勝浦に新婚旅行に行っ

た。話者より上の世代は新婚旅行はしなかったという。

三日帰り 結婚式の二日後に、嫁が日帰りで実家に帰った。

葬式の概況 昔は土葬で行われたが、火葬に変化していった。以前は家

で葬式をしたが、近年ではホールで行う。兄弟や嫁の親など血縁の近い

親類が中心に式を取りしきる。それぞれ食べるものを持って行った。葬

式の翌日はセンタクといって遺体が着ていた服を洗った。近年では家族

葬が増えていく。

死の直後 北枕にする。枕元に一本箸を挿した高盛飯を置く。

通夜 通夜は亡くなった人をへやに寝かせたが、湯灌してからオクノマ

に寝かせるようになった。一晚中チン（鈴）を囲んで番をして、お悔や

みに来た人が叩く。組の者が提灯、死花、松明、墓標、ワラジなどを準

備し、家族は何もしない。今は葬儀会社に任せている。

棺桶 棺は座棺であり、大工がモミ材で作る。モミは腐朽しやすい。副

葬品は地元のものを使っていた。

納棺・出棺 棺には高盛飯、六文銭を入れた。家で葬式をした頃は、仏

間の縁側から出た。親類は白装束とわらじを着用する。寺で鐘を鳴らす。

葬式の食事 組の女性が作る。季節によって内容は異なり、山菜、白飯、

汁物、煮物、天ぷらなど。段々簡素になり、少し前はおにぎりのみ作っ

ていたが、現在は何も作らなくなった。

葬送 ムラ単位で葬式が執り行われた。同じ村組の者が準備をして、棺

を埋める穴を掘る。親類が墓まで列になって送った。先頭、最後尾の二

人ずつが提灯を持つ。先頭の提灯の後ろに先松明、その後ろに死花二つ、

香炉二つ、四季花二つ、団子を持つ人などが列をなす。親が亡くなった

場合は息子が背負う。家から墓まで曲がる辻を間違えないように、ロウ

ソク（辻火）を十二本立てる。墓の前には光林寺住職用の傘と椅子を用

意する。帰宅の際に塩を振る。

一番座敷 穴を掘った者にご馳走を振る舞うことを一番座敷という。次に親類の男性、女性という順で食事をする。

墓 サンマイと呼んだ。一戸につき四人分埋める面積が割り振られた。石塔場はなく、木の塔婆を立てた。墓標の前に川で拾った平らな石を置き、その上に丸い石を置く。この石は地蔵を模したもので、何か彫ったリ描いたりする訳ではない。砂は河原から拾ってきて埋めていた。今は八日市の火葬場に行くが、近代の火葬の時代はムラで焼いていた。火葬のサンマイは焼サンマイと呼んだ。土葬の頃の墓は、今は自治会館前に移動され、六地藏がある。昔は墓参りをしなかったが、十年ほど前から八月七日、八日頃の朝に住職が墓前で経を上げるようになった。

納骨 位牌などはなく、髪の毛と爪を三、四年保管する。その後は環骨^{かんこつ} 回向をして本山佛光寺（京都市）に納める。

忌明け 男性は四十九日、女性が三十五日。忌明けまで火の守をする。今は電気の行灯をずっと点けておく。

供養 葬式のあとは、七日ごとに忌明けまで参る。一周忌、三周忌、七周忌など没後五十年まで供養する。コロナ禍で簡素になった。

戦没者 紅葉尾は戦没者が多く、春日神社で村葬をして祀った。光林寺の戦没者の墓は三十五基あり、二、三年前に新しくした。

第五節 交通・交易

商店 個人商店が二軒あったが、今はもうない。一軒は食料品店兼酒屋で、もう一軒は駄菓子屋だった。

行商 海の魚は、三重県四日市市の行商人から購入した。鮮魚、煮干し、カツオブシ、出汁ジャコなどの乾物を車で売りに来た。今も軽トラで来

る業者がある。以前は山上から衣類を売りに来ていた。茶碗屋が来て、角の家の敷地内で茶碗を広げていた。越前からノコギリも売りに来ていた。泊まりがけで販売することもあった。蓼畑からは魚の業者が来た。

第六節 その他

地名の由来 ユズリハの木が多かったからといわれている。

水泳場所 愛知川のカミとシモで水泳する場所が分かれていた。カミの水泳場所をミナゴと呼ぶ。ミナゴには橋があった。愛知川と神崎川の合流点のことをオチアイといい、これもカミの水泳場所だった。シモの水泳場所はトーランブチといい、大きな岩が目印になっている。小学三年生頃から男女ともに川遊びをした。オチアイは危ない場所といわれた。

お菊淵 お菊淵で泳ぐとお菊に足を引っ張られると伝わる。

メオトイワ 光林寺の近くにある二つの大きな岩をメオトイワという。

学校 昔は政所小学校紅葉尾分校があり、小学一～三年生が通った。中学校は政所まで行った。着物を着てモンペを履いて学校に行った。政所や箕川から来る子は洋服で登校していてハイカラに感じた。

木戸の下橋 低い板橋だった。子供たちが政所小・中学校に行くために作られた。雨雪や台風で橋が壊れ、現在の道の駅の方から回り道をして登校したこともある。



写真 34 旧の木戸の下橋（昭和 30 年代）
「永源寺日和」より転載

第十章 黄和田の民俗

ムラの概要

政所と杠葉尾に挟まれた東西に細長い地形のムラで、八風街道沿いに民家が立ち並ぶ。山地が多く、昔は炭焼きなどの山仕事が主な生業だった。また、稲作も盛んに行われ、現在でもムラの中にたくさんのお田の痕跡を見ることができる。チンツクリと呼ばれる特殊神饌を作る行事が今でも日枝神社において継承されている。

第一節 社会組織

戸数 かつては三十五戸ほどの戸数があったといわれるが、昭和三十年代には二十四、五戸ほどに減少し、近年は二十一〜二十三戸ほどになっている。明治時代には百戸以上あったという。

組 上、下組に分かれている。

地先 石樽峠まで地先がある。山の中に石垣があり、六、七軒の屋敷跡があった。後の時代に移住してきた家が六、七軒あり、うち三軒は木工関係の人だったといわれる。

苗字 疋出姓、西村姓、野神姓などが多い。

第二節 信仰

1 神社・寺院

日枝神社 主祭神は大山咋命。かつては山王権現と呼ばれた。境内社には恵毘須神社があり、大正元年にムラの中にあつたものを日枝神社境内に移転した。

大善寺 浄土宗知恩院派。山号 護身山。奥永源寺で唯一の浄土宗寺院。

元は天台宗だったが、浄土宗として再興したと伝わる。度重なる火災により古い史料はほとんど焼失した。

2 信仰組織

神社の組織

若い衆 ムラの男性は、数え年の十五歳の秋祭りの時に若い衆に加入する。若い衆は定員が七人のため、七人若い衆とも呼んだ。一年ごとに席次が上がって上若い衆となる。これは年齢の順、親の年齢の順、長男か否かで席次が決まった。上若い衆の長を筆頭と呼んだ。筆頭は二十歳前後で、若い衆の責任と権限を負った。

地獄子供 若い衆に加入した年を地獄子供と呼び、年長者の雑用をこなしたり、後述のチンツクリにも関与を許されなかったり、名のおり苦勞の多い一年であった。

神主・エビス神主 若い衆を終えると神主になる。神主を務めて初めて一人前として認められる。以前は一年の任期で、年齢順に二十歳くらいの時に神主に当たり、八十歳で引退だったが、今は人口が減少したため何度も当たる。神主の翌年にエビス神主を務めた。現在は神主とエビス神主を半年ごとに交代している。

翌年の神主は、当年の神主とエビス神主、氏子総代の惣で内定しておくが、クジをする決まりになっている。引継ぎの時に惣の五人と新神主が集まってクジを引き、それで初めて決定したことになる。クジ引きは正月に行い、引継ぎは三月三日か四日に神社で行う。神主に当たると、若い衆と氏子総代、神主、エビス神主を家に呼んで「神主うけ」というお披露目の儀式をした。料理屋に注文したり、親類が集まって、馳走を作って振る舞ったりするなど、結婚式と同じくらい大変な行事だった。



写真 35 チン一式 (令和5年)



写真 36 チンツクリ風景 (令和5年)

他のムラの神事も依頼される。

3 年中行事

神社の行事

正月神事 正月の敬宮神事は、チンツクリの名称で知られる。チンは、揚げ菓子の神饌で、唐菓子の流れを汲んだものと考えられている。チンツクリは黄和田において最も重要な行事で、かつては一月一日～三日の三日間かけて行われた。若い衆、神主、エビス神主によって取り仕切られ、女性や関係者以外が近寄ってはいけないという厳格な決まりがあった。

昔は神主の家に集まってチンツクリをしたが、平成の始め頃から日枝神社の社務所で行うようになり、日程も変更されている。現在は時代の変化から、十二月後半の日曜日に集まってチンツクリ、門松作り、勧請縄作り、しめ縄作り、山の神神事などを一日でまとめて行っている。

・日程

三日間かけてチンツクリを行っていた頃の日程を表記する。元日に

神主は、正月はどこへも行けなかった。
氏子総代 氏子総代は三人いる。
大神主 黄和田には専業宮司がおり、大神主と呼ぶ。

七升の米を研いでザルに入れ、水気を切る。二日にムラ中から石臼を借りて回り、米を挽いて粉にする。三日にチンを調製して、カシバコと呼ばれる容器に入れて神前に供える。四日にチンのお下りをムラの住民に分配する。

・チンの作り方

昭和末期頃までは米粉を石臼で挽いていたが、現在は市販のものを利用している。米粉に湯を混ぜて捏ねたものを丸め、湯釜で茹でる。茹で上がったものを臼と杵で搗き、適当な大きさに分けたものをチンの種類ごとに形作っていく。作業中は喋ってはいけない決まりがあり、シキミの葉を口に咥える。動物などは小豆を付けて目に見立てる。成形されたチンの表面に油を塗り、油の入った大鍋で揚げる。揚げ上がったチンをカシバコに並べる。ゴクナという予備の一式も作っておいた。

・チンの種類と数量

動物などの形を模したものを作る。ヒヨドリ、ハシヅナ、カメ、イノシシ、シナノイヌ、ブト、ウサギ、ムスビ、ウス、ビワノハ、キクザ、コイヌ(チン)、サル、オコゼの十四種類。目録に品名が記載されている。チンのみ百二十個、それ以外は四個ずつ作る。

・チンの分配

チンは、神主を務めた人のみがお下りをもらう。ヒヨドリはムラの年長者の男性二人に配る決まりになっている。そのほかは、目録に記された順のものを年齢順に分けていく。サルは神主かエビス神主に分け、オコゼは山の神のために取り置く。

・勧請縄作り

以前は一月三日の行事だったが、令和六年現在はチンツクリと同日に行う。勧請縄は、シキミの枝を束ねた榊(垂らし)を十二本作り、

主縄に刺す。閏年にはこれが十三本に増える。昔は日枝神社の鳥居ではなく、愛知川を渡ってムラへ入る板橋に掛けていたとも伝わる。

正月の神饌 餅、栗餅（もち米に粟を入れたもの）、長い形状の餅（重箱に入れて伸ばして切る）、ツルンボシ（干し柿）、ミカンを元旦に神前に供える。栗餅は、栗が入手できなくなりもう二十年以上作っていない。かつてはゴクサンと呼ばれる神饌も供えていた。ゴクサンは、カワラケの上にご飯を盛ったもので、米を研いですり鉢で擦り、型に入れ、切つて四角く成形する。水分が抜けると固まる。神饌作りは親類が手伝いに来た。

山の神 昔は男の子が生まれると子供を連れて一月七日に山の神に参った。これは毎年の行事ではなく、不定期で行った。塩と洗米、御神酒、チンツクリのオコゼを作り供える。山の神は醜い女神で嫉妬深い性格なので、醜いオコゼを好むと伝えられている。供えたミカン、ツルンボシ、オコゼを切り分けたものをムラ中へ配った。

昭和初期には十一月七日及び二月七日が山の神祭りで、オハギ、酒、肴を持って男性のみで山に行った。

春の大祭 日枝神社の春祭りは四月十四日に行った。大神主が祝詞をあげる。ヨミヤ、ホンビがある。ヨミヤには酒を一升瓶でもらった。若い衆が櫓にある太鼓を叩く。以前は子供神輿があった。

岳参り 七月頃に、神主と若い衆が山の頂上まで参る岳参りを行っていた。この行事は、雨乞いが始まりではないかと伝えられる。山にある池を掃除すると雨が降ると伝わる。若い衆が太鼓と鉦を叩き、四十分ほどかけて登る。頂上には木があるだけで、祠などはない。お供え用の酒を持参する。平成七年に山裾の山の神、稲荷のある場所に遷宮して、そこに参っている。ゼンマイの白和えなどを供えた。

秋の大祭 日枝神社の秋祭りは十月二十三日頃に行う。

お火焚き 十一月三十日に若い衆が火を焚く。三メートルほどの高さに木を組んで、中に燃料を入れる。

野神 野神が杉の木のあるところにあるが、ムラ全体で祀っている神ではなく、特に行事などは行わない。

稲荷講 稲荷講は二、三軒で行う。山の神の隣にある。

シメ講 シメ講（神明講）はお伊勢さんの講である。在所中にあり、礼拝の対象として掛け軸を用いる。伊勢参りは二人ずつ代参している。三万円を奉納して祈祷してもらう。

行者講 六、七軒が加入する。家に参って経を上げる。

大峰参り 有志で五年に一回くらい大峰参りをしたことがあるだけで、定例のものではない。

月参り 神主は、毎月一日と十六日に神社に参る。早朝に参るのが基本で、着物と羽織を着ていく。

第三節 生業

山仕事と農業の兼業が多かった。ある話者の家では、生業は山仕事を中心で、兼業で三反ほどの畑もしていた。植林は近隣の人に手伝ってもらった。山の下草刈りは年配女性が行うことが多かった。

1 山仕事

共有林 黄和田山が在所山（共有林）である。惣（ムラ）の山が一、二町歩、本州製紙（現在の新王子製紙）の山が奥の方に二百町歩ほどあった。寺山もあった。黄和田では共有林より個人山の方が多かった。

個人山 紅葉尾や政所は共有林が中心だが、黄和田は個人山が多かった。戦後は二十戸ほどが近隣の山林を個人山として所有していた。

材木屋 材木屋（製材業者）はムラにおらず、他のムラの人が丸太を買いに来た。相谷の材木屋に出すこともあった。昭和三十〜四十年頃は、杉やヒノキの大木を月に一本売れば暮らしていけた。オビキ谷の発電所の上辺りからセンで木材を搬出した。

植林 昭和四十年代半ばから、雑木を切って針葉樹を植林した。成長が早い水田造林が流行った時期もある。それ以降は杉は鹿の食害、ヒノキはカモシカの食害に合うようになった。

炭焼き 炭焼きは戦後からやり始めた人が多かった。多くは日帰りできる距離に炭窯を作った。黄和田発電所の上や、茨川林道沿いに点在した。窯の近くの木を切って焼いた。相谷の炭問屋に出し、そこから八日市などに販売された。

タキモン 薪はタキモンと呼んだ。タキモンを集めるために岳（約七百八十メートル）まで行って木を伐った。タキモンはズシ（ツシ）に上げて保存した。暖房や煮炊き用で一年中使用し、一日に二十〜三十本は必要だった。シバ（細い雑木）や杉葉なども燃料として利用した。

カヤバ 岳の辺りにあった。

2 農業

田 黄和田はムラ全体に棚田が広がる。ムラ全体で四町歩ほどの田があったが、今はその半分になっている。一戸につき平均二、三反所有し、多い家で七、八反だった。一反ほどの小規模な田を所有する家も三〜五戸あり、自家用の米を作った。昭和初期には、米が足りない場合は相谷や東小掠組合（政所）で購入していたようだ。戦後には京都から米を求めて来る人がいた。三十年ほど前から田を止める人が増え、令和になる頃には田をやる人がいなくなった。

取水 田の水を入れる場所はユグチ、出る場所はシリと呼んでいる。様々な種類のユグチがあり、水路や川から取水する場合もある。水を抜く時はシリの流れ口から落とす。水田の土用干しなどはせず、水を途切れさせないようにしている。

水切り 雨が降るとユグチを切って水を排出するミズキリの作業を行う。ミズキリの当番を家ごとに交代で行っていた。

稲刈り 昔は十月初め頃に行っていたが、近年はもっと早くなっていた。

ガタンコ 昭和初期には米を搗くガタンコ（小規模な水車）があった。

畑 畑は家の近くにあることが多く、家の敷地内には作らなかった。山の中に畑を作っていた家もわずかにある。野菜を作った。戦後でも畑や田が多くあったので、食糧難を感じたことはなかったという。

牛 農耕用の牛がムラ内に五、六頭いて、一頭を二、三戸で共有して飼育した。話者の家にも牛がおり、当時は四戸で共有していた。牛は馬屋で飼った。話者の家では馬屋を潰して屋外に牛小屋を作ったが、多くの家は屋内の土間に馬屋があった。餌は、夏は雑草、冬はワラをカマドで炊いて細かく切ったものを与えた。切る時にはオシキリを使った。この作業をコエダシといった。

3 その他

茶 茶畑は小字野神に多くあった。話者の家も二反ほどの茶畑を作っ



写真 37 棚田跡（令和5年）

ていて、多くの家は自家用程度だった。明治十七年の区有文書には、製茶や養蚕を盛んに行っていた記録がある。昔は茶の栽培だけでなく販売（茶商）も行っていたようである。

ホイロ 昭和二十年代前半まではホイロでの茶生産を行っていた。小屋があり、そこでホイロをしていた。ホイロには和紙を使っていた。今は農協の工場で茶葉を加工している。

養蚕 養蚕は、昭和十九年頃までは行っていた。夏蚕が主で、秋蚕をやる家もあった。春が寒くて桑の芽が出るのが遅かったので、春蚕は行わなかった。ダイドコロを板の間に変えて、そこに棚を組んで蚕を育て、繭の状態で出荷した。養蚕の組合があり、学校のところまで繭を取りに来てくれた。

桑 茶畑の間に蚕用の桑を混植した。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

衣生活

栗の皮染め 昔は栗の皮を用いて染め物を行っていたようである。黄和田にはたくさん栗の木が生えていた。

食生活

正月の食事 三が日は重箱に入ったお節料理を食べた。お節の内容は特に決まっていない。お節の三種はゴボウ、コンニャク、黒豆で、ゴボウはたたきゴボウや煮しめにする。コンニャクは、箕川のコンニャク屋で購入した。黒豆は、市原で丹波の黒豆を栽培している。その他にタツクリ、キントン（山で採った栗を甘露煮にする）、ナマス（大根、ニンジン）

などがあつた。膳に大根を輪切りにしたものを出していた時期もある。鯛などの魚を食べる習慣はない。

餅 餅は正月中食べる。

雑煮 味噌で味付けして、具は餅と豆腐などを入れる。

米 白米を食べた。麦を混ぜることもあつた。唐臼が家にあり、脱穀に使った。田を持たず入手できる米が少ない家は、米にサツマイモを混ぜて嵩を増した。

大根 冬場は大根を埋めて保存したものや干したものを食べた。

卵 病気になる薬として卵を食べていた。

魚 川魚は、谷川にアユ、イワナ、アブラムツ、ウナギがいた。また、昔は三重県から行商が海の魚をおいねて（背負つて）売りに来ていた。ブリを一本買ったり、キンメダイを買って煮つけにしたりした。タコもあつた。

木の実 山で栗を拾った。ドングリもよく落ちていた。

山菜 山菜も食べた。よく採れる場所を知っている人がいた。

おやつ おやつには柿（甘柿）を食べた。カキモチもよく作つた。

ボタモチ お彼岸にはボタモチを作つて供える。

住生活

間取り ある話者の家は、土間の入口左に馬屋がある。そこにハシゴがあつてツシに登れる。ツシにはタキモン（薪）が置いてある。土間から入つた部屋がデイ、デイの隣がダイドコロでカマドがあつた。デイの奥がナカノマ。話者の家は奥に二間建て増しをしていて、ナカノマの奥がオクノマ、ヘヤの奥にある部屋もヘヤと呼んだ。

イロリ イロリがあつた。そこで炊事はせず、お茶や湯を沸かしたり暖

房として使ったりする程度だった。

オクドサン 薪で煮炊きするカマドをオクドサンと呼んだ。

飲料水 竹のトユで水を引く家もあり、井戸を持つ家もあった。また、川の水を汲んで飲む家もあった。

水の利用 愛知川から水田用の水を引いている。杠葉尾の下から引いている。小字足出には田が三〇五反あり、オビキ谷から水を引く。毎年何回か溝掃除をする。蛇籠^{じやか}を愛知川に何本も設置し、五十センチほど水嵩を上げる。米を作っている人が毎年総出で作業をする。田植えが六月初めから始まるので、四月二十日まで設置する。蛇籠は区長が八日市の籠屋にいつて注文した。

便所 便所は入口の横にあった。大便是別にしておいて、畑や茶畑の肥料として利用した。

風呂 風呂はマヤの横にあり、桶風呂だった。水面に木製の板が浮いていて、足でそれを踏んで沈めながら入った。桶風呂にフタや傘は付いていなかった。炊き口は家の中にあった。風呂の水は井戸からバケツで運び、十数回往復して汲みに行った。風呂の水は便所の小便のところに流れるようになっていたので、野菜の水やりなどに利用した。

灰の利用 燃えかすや灰が出ると畑に肥料として撒いた。灰小屋はなかった。

2 年中行事

餅搗き 毎年十二月二十九日に餅搗きをする決まっていた。何臼もつき、合計百個ほど供え餅を作った。仏さん（仏壇）、トコノマ、神札二つ（ナカノマ）、エベツサン（恵比須神、食事の場）、荒神さん、（三宝荒神、大豆を炊く大釜やオクドサンにある）、井戸、小屋など、いろんな場所

に供えた。鏡餅は三個重ねて一組になる。仏壇には三組、ナカノマには七組、トコノマなどは三組ずつ用意する。荒神さんには特別に大きな餅を二つ重ねて、その上にヘソと呼ばれる小さな餅を乗せて膳に収める。

正月 神社に参拝する前に御神酒をいただく。

三日正月 三日正月といつて、一月三日に雑煮を仏壇に供える。

四日の行事 一月四日に山の神祭りをしていた。現在はチンツクリと同日に変更している。

七草粥 ナズナをオカイサン（粥）に入れる。供物にする粥には、一センチ角に切った餅を入れる。

小豆粥 一月十五日に作る小豆粥にも、一センチ角の餅を入れる。少し焼いて入れる人もいる。

一月二十日 以前は一月二十日にも何かの行事があったと聞いているが、詳細は分からない。

雷さんの日 話者の祖母が、一月に「雷さんの日」というものがあると言っていた。

二月一日 二月一日を二の正月といい、少量の餅をついて供える。厄年の人が餅を神社に持っていく、供えたものを切り分けてムラ中に配った。これは昔のことで、現在は行っていない。

節分 二月三日に行く。寿司を作ってかぶりつく。家で採れた大豆を炒つて豆まきをする。購入した大豆を使うこともあった。イワシの頭にヒイラギを刺して、窓のところに飾っておいた。

雛祭り お雛さんには菱餅を飾る。赤、白、青（緑）の三色で、赤は色粉で着色し、青はヨモギを混ぜる。餅は一升ほど搗いた。お雛さんにはアゲズシ（いなり寿司）を作る。

盆 盆行事では特別なものは食さない。

第五節 交通・交易

三重県側との交流 茶摘みの手伝いや行商などで、三重県との交流は多かった。ムラの位置的には、滋賀県より三重県の町場の方が近い。現在でも買い物や通院で三重県に行くことが多い。

道路 ムラの中を八風街道が通る。国道四二一号は、石樽林道から町道、県道、国道と格上げされていった。当初は砂利道で通り、アスファルトで舗装したのはずっと後になる。

商店 黄和田には商店が一軒もなかった。

第六節 その他

発電所 大正十一年に宇治川電気株式会社が黄和田発電所を建設した。場所は現在の関西電力黄和田発電所と同じ位置にあった。建設工事の際には黄和田からも三、四人が従事し、砂運びなど力仕事に加わった。建設後は黄和田から発電所に勤めに行く人が七、八人いた。当初は箕川に建設予定だったが、黄和田に変更された。

地名 川や淵にも地名のようなものがついている。神社の下にあるカミナリグチでよく泳いだ。

城跡 黄和田城があったと伝わる場所に石碑が立っている。

第十一章 政所の民俗

ムラの概要

旧東小椋村の中心的存在として、集落内には役場、学校、農協などの機関が置かれ、町場的傾向にあった。小区画（垣内）で分かれており、屋敷地が分散している。ムラの南部で御池川と愛知川が合流する。「宇治は茶所、茶は政所」と茶摘み唄に歌われるとおり、銘茶として全国に名が知られる政所茶の一大生産地であり、多くの家で茶葉を行っていた。また、ムラの東端は三重県境に接するほど山林面積が広く、林業も盛んに行われた。

第一節 社会組織

戸数 昭和初期には百五十戸ほどの家があったが、令和三年現在は五十戸弱になっている。

組 十四組まである。三、四戸の家が一つの組になっている。

小字 民家がある小字は下から、如来堂、中畑、川西、川東に分かれる。

第二節 信仰

1 神社・寺院

八幡神社 主祭神は誉田別之命。境内社に御陵（惟喬親王の墓）がある。十六世紀頃の火災で史料が焼失したと伝わり、創祀年代は明らかでない。

光徳寺 浄土真宗仏光寺派。山号 照曜山。十六世紀頃に天台宗から改宗したと伝わる。

教宗寺 浄土真宗大谷派。山号 三岳山。

地蔵 地蔵はムラの中に五つあり、山の中にもある。地蔵にまつわる伝

承も残る。

2 信仰組織

非常方 ひじょうかた 非常方は、他のムラという若い衆に当たり、祭りの世話やムラの運営に大きく関わった。非常方になると宮の座につくことができ、ムラの中で一人前として認められる。また、非常方に入らないと、共有林を利用する権利を得られなかった。非常方の長である上若衆かみわかしは、紋付の羽織を着用した。

後述の子供役を務めた後、数え年の二十歳になると非常方に加入する。養子に來た男性や次男以下が加入する「途中入り」の制度もあった。かつては厳しい掟で律せられており、上位者に逆らうことができなかった。昭和の頃は二十人が定員だったが、平成になってから十人に減らし、現在は八人になった。以前は男性のみだったが、近年は人口減少で女性も入るようになった。

子供役 各家の長男は、数え年の十八歳になると子供役に参加し、非常方の下働きを二年間務めた。豪勢な披露宴が行われ、高張提灯も飾った。三、四人一組で活動した。子供役 of 制度は昭和末頃まで残っていた。

神主（社守） 非常方の任期を終えた三十歳から神主に当たり、六十歳で終了する。神主は男性のみが行う。一年に三〜五人ずつ選ばれ、正月、春、夏、秋などに分けてお務めを行う。戸数が多かった頃はミクジで選ばれ、番号の書いた紙を丸めて盆に入れたものを引いた。十一月の密葬みそめ祭の日に、翌年の神主と非常方の引継ぎを社務所で行った。神主に当たると奥座敷で過ごし、肉食禁止や女人禁制などの決まりがあった。

世話方 神主を務め終えると世話方に上がる。

本神主 専業宮司を本神主といい、黄和田の日枝神社の宮司に依頼して

いる。

3 年中行事

神社の行事

正月行事 正月神主に当たると大変で、かつては三が日の朝四時から夜三時まで神社にいて参拝者の対応をした。現在は元日のみに変更している。

厄除祭 二月一日に行く。厄年の人の家は、二つの一升餅と酒を供える。

餅は、一つは神主に渡し、もう一つは持って帰り、切り分けて親類に配る。

春祭り 本日の日程は五月三日で、昔から変更はない。五月二日に宵宮、三日に本日、四日にゴエンを行った。神輿はなく、大太鼓を叩いてムラ中を回る。非常方には酒が振舞われる。新生児の宮参りもこの日に行く。

盆踊り 八月十七日に八幡神社で盆踊りをした。かつては一晚かけて行い、若者が恋人を連れていくような娯楽イベントだった。江州音頭を踊り、箕川出身の桜川氏に音頭取りを依頼した。江州音頭は地域によって踊り姿が異なり、政所の踊りは手の位置が少し高いという。雨の時には寺の本堂で座敷音頭をした。

密葬祭 十一月三日の神事で、霜月祭りとも呼ばれる。この日は惟喬親王を「密葬」した日と伝わることにちなんでミソウ祭りといわれる。ヘソ団子とよばれる神饌を作って供えるのが特徴的である。非常方から野菜、鯛（かつては鯉）、スシと呼ばれる榊形の高盛飯が献じられ、神主から茹で大豆とヘソ団子が献じられる。

ヘソ団子は、米粉を熱湯で練って三センチほどの大きさに丸めたもので、中央を指で押してヘソのような窪みを作ることからこの名が付いた

といわれる。大鍋で茹で、砂糖と味噌を混ぜた味噌ダレを和える。昔は正月、大祭、ミソウ祭りと年に何回もヘソ団子を作っていた。重箱いっぱいに作った。ムラ中の主婦が神主の家に集まって行う大変な作業だったので、時代とともに作る回数が減っていき、今では五月の春祭りの時のみ作るようになった。神主ではなく、非常方を中心に行う。

焼納祭 焼納祭は年末の十二月二十九日に行く。お札などを燃やす。神主も本神主も来る。三十日には八幡神社、お伊勢さん、近江神宮などの札が各家に配られた。

寺堂の行事

盆 八月十五日の朝に墓参りをする。僧侶がお墓まで来るので、飾りをして待っておく。

地藏盆 昔から川西、川東、中畑の五箇所の地藏で行っている。上手の小字から僧侶が参る。僧侶に食事や供物を用意した。

報恩講 浄土真宗の寺の檀家は、報恩講の時に寺に集まる。食紅で白・赤・緑などに着色した小餅をたくさん作り、内陣に飾りつけを行う。また、その小餅を串刺しした繭玉を家の仏壇にも飾る。家の年忌法要に際しても同様のものを家で作る。

七日講 昔は寺で行う講を七日講と呼んだ。そら豆を炊いたものなど、毎日異なる食事を持ち寄っていたが、手間がかかったのでお菓子に変更になった。



写真 38 ヘソ団子作り (令和 5 年)



写真 39 茶畑（令和5年）



写真 40 茶摘み（令和5年）

第四節 生業

1 茶業

「政所茶」の名で知られるとおり、政所は茶業で有名である。かつてはムラの九割以上の家が茶作りを行っていた。昭和三十年代までムラは茶畑に囲まれており、茶業のみで半年分の生計を立てることができた。政所茶の特徴は、手摘み、無農薬、有機肥料で栽培していることにある。生産人口の減少から、平成二十九年に政所茶生産振興会が立ち上げられ、伝統的な茶作りを継承していく取組を行っている。

茶畑 茶畑のことをチャバタと呼び、屋号をつけて〇〇畑、〇〇園と呼ぶこともある。以前は各小字に茶畑があった。川の近くで朝霧が発生する環境が茶に適している。川東の茶畑は朝十一時頃から日が当たるので、玉露を生産するのに良い。粘り気が強く水捌けの良い黒土が茶の栽培に向いている。茶畑の面積は、今の十倍以上あったが、道路の拡張とともに減少した。ムラから出ていく人の茶畑を買い取ったこともある。

床作り ヤブキタで一尺（約三十センチ）ほどの深さが必要である。昔

はツルハシなどで手作業だったが、今はユンボで土を起す。

茶の木 茶園の木は、種を拾って床に蒔くと、四、五年で茶摘みができる大きさに成長する。植えてからしばらく経つと、木を早く成長させるために根本から切るダイキリ（台切り、ダイカリともいう）という作業を行う。植えて十年程度でダイキリする人もいれば、三十年待つという人もいる。そのため、先端は新しいが、根部分は数百年も生きている木があるといわれている。

茶工場 最初の茶工場は八十年ほど前に建てられた。かつては如来堂や川西に四、五軒あり、茶の時期には二週間ほど二十四時間稼働していた。現在は農協の製茶工場のみが残る。以前は君ヶ畑、蓼畑、杠葉尾、蛭谷、高野、山上にも茶工場があった。黄和田、九居瀬、相谷にはなかったため、他のムラから政所の茶工場に茶葉を持ち込む人もいた。最低二十五キロの茶葉がないと工場の機械を動かすことができない。

木の種類 在来種に品種名はない。枝が横に広がるのが特徴である。直根で根が深いため、土から起こすのに手間がかかる。そのほかはヤブキタ、サミドリなどを栽培している。ヤブキタは雪に弱く折れやすいので、政所では育ちにくい。

茶摘みの時期 かつて茶摘みは女性の仕事とされ、男性はしなかった。五月二十日前後に行い、葉の大きさ、色、柔らかさを見て、畑ごとに適期を判断する。昔は五月十日辺りだったが最近では遅くなっており、五月末に収穫することが多い。今は摘み手が集まる土日中心で決める。午前六時から午後六時まで行い、午前十時と午後三時に休憩が入る。新茶の始めを政所ではハナチャという。雪が多かった後はハナチャの伸びが揃わない。新芽を根本からしごき上げて摘む「しごき摘み」を行う。後から葉と小枝、塵を選り分ける。手摘みの茶の木は株立ちの樹形をして

いる。

機械刈り 昭和の終わり頃から機械刈りもするようになった。二メートルほどある袋を付けた茶鋏で刈った。茶鋏での作業は男性も行った。

茶摘みの雇い人 茶の季節になると旧大安町から茶摘みの雇い人が来た。九居瀬、萱尾、和南などからも来た。大安の人は、自分のムラの茶摘みが終わってから出稼ぎに来る。全員女性だった。

茶の加工 茶の加工は男性の仕事だった。摘んですぐに加工しないと茶葉の発酵が進む。番茶の場合は一、二日置いておいてもよい。

露取り 雨で濡れた茶葉は、家で露取りをする。板の間で大籠に茶葉を入れ、何度もひっくり返して水分を除去した。今は機械で脱水し、網に入れて扇風機にかけている。露取りしていない状態では茶工場で受け付けてもらえない。

茶蒸し 以前はニワ（土間）で蒸していた。一番下の炉の部分はニコニコガワと呼ばれる。その上にセイロを二、三杯載せ、フタをして蒸した。セイロは高さ十五センチくらいで、藤の蔓で編んだものを利用した。下の方から蒸されていくので、蒸しあがったものを広げて冷ます。

家の炉 各家に茶部屋と呼ばれる小屋や部屋があり、そこで茶の仕上げ作業を行った。ある話者の家には四つの炉があった。炉は畳一畳ほどの大きさで、木枠に金属のかぶせを付けて和紙を貼ってある。床は粘土質の土で、その上で炭に火を起こして炉を炙る。和紙はボーグという厚みのある和紙で、破れたら補修した。火を使う作業なので汗まみれになった。煎茶と番茶は加工の仕方が異なり、煎茶は日光に当てて粗干ししてから炉で焙る。番茶は最初から焙る。

ローモト 炉を仕切る茶師をローモトさんと呼ぶ。さまざまな地域からローモトが来るので、湖東、愛東、政所の順に回っていた。伊勢の茶師

が昭和二十年代まで来ていた。茶揉みを行う男性が他所から泊りがけで来ていた。茶揉みの人のための箱膳が十人分ほど備えてあった。ニワにムシロを敷いて寝ていた。

粗揉 以前は手回しの粗揉機があり、ハンドルで回していた。最後は手揉みで仕上げる。機械で中揉みするようになってからも、仕上げは手作業で行っている。

番茶の軸より 機械刈りは軸（茎）が混ざるので、軸よりの作業を行う。以前は手で選り分けたが、平成二十九年に軸より機を導入した。扇風機で葉だけを飛ばす。

仕上げ 仕上げ作業はローモトが行う。かつては箕を用いて選別を行っていた。茶を入れた箕を打つと、粉、ウスミ、中火が飛び出て下に敷いた洪紙に落ち、ジュウチャが箕の中に残る。ジュウチャはホンチャともいう。これを碎いてトウシにかける。下に落ちたものは新茶にする。工場では、茶を形状別に七種類に分ける。それぞれに使い道があり、粉末になったものは茶そばなどに混ぜ込んで使う。そのほかにケバ、荒茶、軸茶などがある。

流通 昭和二十二年から農協が共同販売会を始めた。八日市の西説教場を借り、県内の茶商が百軒以上集まった。昭和三十年代には農協が販売会や品評会の段取りをするようになった。個人の得意先もあり、広島まで送っていたこともある。彦根の間屋も多かった。宇治から買いに来ることもあった。八日市にはますきちなどの問屋があった。

玉露 昭和二十年代まではどこの家も作っていた。玉露の茶摘みの時期は、別の種類の茶より少し遅い。葉に日が当たらないようにするための覆いはコモ編みで作る。コモ編みは一日に三メートルほどしか編めないため、作業をする二週間前から編み始める。茶の木の上も横もタワラ（モ



写真 41 コモ編み (令和5年)

チワラ)の覆いをする。

番茶 番茶を収穫する時期は、一番茶(五月)、二番茶(七月半ば)があるが、春番茶(三月、刈茶)、夏番茶(六月)、秋番茶(九月)をする人もいる。葉が固いので、軍手をして摘む。二番茶は葉が薄くて美しいので玉露に打ち込んだ(混ぜた)。水道水(カルキを含む水)には二番茶が合うといわれる。

肥料 肥料は、油かす(菜種の搾りかす)

が主体である。昭和三十年代頃までは未発酵の下肥を担いで撒いていた。肥料はニシンカス、下肥、油カスの順に変化したと記憶している。ニシンカスは行商人が売りに来た。そのほかに草、木の葉、カヤなどを使う。茶の木の隙間にカヤを敷く。カヤはナマハの青いものを使い、ムラに生えているものを刈ったり、日本コバまで刈りに行ったりした。

茶籠 茶を集める大籠があるが、これは敏満寺(多賀町)に籠屋があり、政所まで売りに来たものを購入した。九居瀬からも購入した。ある話者の親類は九居瀬で籠屋をしていた。

茶摘み歌 茶摘みをする女性が歌った。今は歌える人がいないが、記録は残っている。

2 山仕事

山仕事は日照時間に応じて働き、明るいうちに帰宅できるよう作業する。冬場は日が短いので早く帰り、夏は遅くまで働いた。山奥での炭焼きは小屋で泊まりがけになることもあり、提灯を持って家から炭窯まで

通ったことを覚えている。

共有林 惣山(共有林)は広く、石樽峠付近まで八百町歩ほどある。共同で枝打ち、下刈りなどの手入れをしていた。十四組で地上権を分けた。**炭焼き** 昭和四十年頃まで続いていた。炭にはナラ、カシ、ホオなどの材を用いた。炭焼き小屋が石樽峠、カナキなどにあった。炭窯は各自で作った。窯の近くで泊まり込んだ。窯からのぼる煙の色を見て焼き加減を判断する。炭焼きは基本的に男性の仕事だが、窯籠めや炭の運搬などは女性も手伝った。運搬にはハシゴ(背負子)を使った。多い人で六俵(一俵当たり約十五キロ)ほど背負った。

炭の出荷 農協のトラックが炭を集荷しに来た。家の前の道に大量の炭俵が出してあったことを覚えている。君ヶ畑から炭の検査員が回ってきて、検査に合格しなければ出荷できなかった。

焚き物 秋に一冬の焚き物(燃料)を確保して寒さに備えた。

木の伐採 杉やヒノキの伐採は、木の水分が減るといわれる秋に行った。材木の規格は二間(約三・六メートル)と決まっていた。ムラの中には保管場所がなかったので仮置き場に置き、冬の間に乾燥させてから翌年に出荷する。伐採後は枝打ちや植林(春に行う)を行った。

道具 枝打ちには鉋を、下刈りには柄の長い鎌を使った。鋸はコビキと呼び、刃渡り七十〜八十センチ、幅二十〜三十センチの大きなものだった。鋸の目立ても自分で行った。昭和五十年代以降にチェーンソーを使うようになった。

素材屋 製材屋を「素材屋」といい、政所には「イヘイさん」と「マンクマさん」という業者がいた。素材屋は製材の作業をする人を雇う。主な材は杉・ヒノキで、丸太のまま売ったり、柱や板に加工してから売ったりしていた。

運搬 木材の運搬は、木馬（キンマ、キウマ）を利用した。木馬を利用する以前は、雪の上を滑らせて人力で引いていたという。昭和二十

三十年代から三輪トラックなどが使われ出した。

カヤバ 共有のカヤバは、集落から歩いて一時間半ほどかかる場所にあった。荷を担いで降りてくるのが大変だった。上が二又になったツエをセタ（背負子）の支えにした。松の木の段というところが休憩所だった。集めて帰るまで、午前五時半から午後三時くらいまでかかった。ムラの近くに各家のススキノがあつたが、不足分を夏に日本コバまで採りにいった。ススキのナマグサは枯らしてから使う。山のカヤは、枯れて乾燥しているものを秋に刈り、ツシで保管する。屋根用のカヤは、茨川林道近くの折戸^{おりと}のカヤバまで採りに行った。宮ノ谷から峠、折戸という順路で行った。

3 その他

田 政所ではあまり米を作っていなかったが、如来堂辺りには田があつた。山手に田の痕跡は残っている。

畑 ムラの周りには茶畑とともに自家用の野菜の畑があつたが、今はほとんど植林されて山になっている。戦中戦後の食糧難で、茶の木を抜いてサツマイモ、大根、トウモロコシなど保存が利くものを作った。

漁法 男性は釣り好きな人が多く、永源寺ダムができる前はアユ、アメノウオ、ウナギなどをよく釣った。アユは昔から放流しており、トモ釣^とりや餌釣^えりをしていた。シャクリも使った。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

食生活

お節料理 煮しめ、豆、田作りなどを作った。

雑煮 雑煮は醤油仕立てのすまし汁で、丸餅を入れた。具材は家によって異なるが、ある話者の家では大根、ニンジン、サトイモの親頭と子芋を入れた。

餅 茶休みに家でボタモチを作った。山の神神事の時は、木が大きく成長するように祈りを込めて大きなボタモチを作った。へそ団子は祭りの時にだけ作り、個人では作らない。

恵比須講の供物 生のツバスを供え、後でお下がりを食べる。

日常の食事 昔は母親が五時頃に起きてオクドサンで湯を沸かし、一日分の飯を炊いた。茶摘みの時期はさらに早かった。山行きの人は力仕事をするので、一升飯を持っていた。イロリを囲んでの食事は、昭和三十年過ぎまで続いた。

朝食 朝飯は、麦飯とおつゆと漬物くらいだった。おつゆの具は、大根、ジャガイモなどその時にある野菜を入れた。漬物は主にタクアンで、夏野菜はドボ漬^どけ（糠漬^ぬけ）にした。またキリゴミという大根の葉などを刻んで漬けたものもよく食べた。

昼食 山仕事にはオカワ（ワッパ）弁当に二食分くらいのご飯をぎっしり詰めていった。干鰯や塩鮭を新聞紙に包んで持って行きおかずにした。昼までにコビルとして半分食べ、昼に残りを食べた。炭焼き小屋で火を焚いて、魚を焼いたり、山の水をヤカンで沸かして飲んだりした。

夕食 家族の人数が多かった頃は、それぞれの仕事をこなしながら食事の用意をするので、大鍋で煮物などをまとめて炊いておくか、漬物や汁物を出すが多かった。おかずの種類は少なかった。酒を飲む人には魚を出し、イロリで炙って食べた。

米 米や麦は地元での生産量が少ないので、親類や農協などから購入した。主食は麦飯で、一升の米に一合の麦を入れた。戦中戦後はサツマイモを混ぜて嵩増しした。

豆類 味噌用の大豆も家で作った。小豆も作り、ボタモチなどに使用した。

魚 魚は重要なタンパク源で、ニシン、イワシ、サケの塩物を食べた。樽や缶詰で買った。川魚はアユ、アメノウオ、ウナギなどをよく釣った。特にアユはたくさん釣れたので、オクドサンに金網を載せ、その上で返しながら焼いて乾燥させた後、ブリキ缶に入れて保存食にして、冬に来客があると葉山椒と一緒にごちそうにして出した。

肉類 肉類はほとんど食べなかったが、卵のために鶏を飼っていた。卵を産まなくなるとハレの日に潰して食べることはあった。

山菜 ムラの土地であればどこでも採っても良かった。春はワラビやイタドリ、ゼンマイ、クギリの葉、イボナなどが採れる。最近になってコゴミやタラを取るようになった。湯がいてオクドサンやイロリの灰で灰汁抜きして乾燥させ、塩漬けにしたものを一年中食べていた。イタドリは、ぬるま湯につけて皮を剥いて塩漬けにして、食べる時に塩抜きをして味をつけて焚いた。今は塩を打って冷凍している。ゼンマイは手間入りで、ワタを取って湯がき、ムシロの上で干して乾燥させ、食べる時に戻して灰汁出しをして調理する。ジャコやカツオブシの出汁で味付けした。

きのこ 自然生えのキノコは、スギクサビラ（スギヒラタケ）、シイタケ、マツタケなど。シイタケ、ナメコの栽培は最近始まったもので、出荷していたこともある。

果物 以前はどこの家にも柿の木があった。渋柿もあったが、お寺柿や

盆柿など甘柿が多く、わざわざツルンボシ（干し柿）を作ることはほとんどなかった。ザクロやグミの木もあった。

コンニャク 自家用にコンニャクイモを茶畑の間に植えていた。湯がいて皮を取り、灰汁を抜き、白でついてコンニャクにした。

おやつ 鉄製の焙烙（ホウライ、ホウラク）をオクドサンにかけ、白豆を煎って溶かした砂糖をまぶし、つくねのようにして食べたことを覚えている。サツマイモがたくさん採れた時は、炊いて砂糖を入れて捏ね、イモアメを作った。他のムラではカキモチやカヤの実を食べたというが、政所ではあまり食べない。

フナズシ 塩漬けたフナを買い、自前で作る家が多い。昔はフナを塩で漬けるところから家で行っていた。

食物の保存 大根などは穴に入れ、杉皮で蓋をして、その上から土をかぶせて保存した。

芋穴 昔はどの家にも芋穴が作ってあった。家のカドを入ったニワ（土間）にあり、芋類を入れて保存した。

食器 銘々の膳はクルミ足膳で、箱膳ではなかった。食事が終わると食器はお茶で洗い、膳棚にしまった。

住生活

間取り 多くは四間で、デエ、ザシキ、ヘヤ、オクがあった。土間はニワと呼んだ。

水の利用 地区の裏山（ロクロ山と呼ばれる）からの湧き水が多いためか、多くの家に掘り井戸があり、飲料や炊事用として使ってきた。家によつては井戸に水神を祀っていた。竹トユで川から水を引いた家もあった。現在は上水道が通じている。八幡神社の西にある御池川側の少し下つ

たところのコンクリート製の水溜もロクロ山が水源と思われる。二段に区切られた構造で、上段は口に入るもの、下段はそれ以外のものを洗うように共同利用されてきた。水溜に面して地藏尊が祀られている。これを「コウトの地藏さん」と呼ぶ。家の前に井川（いがわ）が流れており、洗濯などにはこれの水を使った。

イロリ イロリは昭和三十年代まで使っていた。使わなくなったイロリには、ヤグラを被せるか、掘りゴタツに作り替えられた。

オクドサン オクドサンとガスコンロが併存している時期がしばらくあった。

2 年中行事

松切り 昔は正月用の松を日本コバまで切りに行き、担いで帰った。近年は近隣のムラの松の木を切ってもらっている。

節分 二月三日に神主が神社で豆を撒く。

獅子舞 毎年二月頃に加藤菊太夫組が来る。

山の神事 ムラの中で山の神を祀る場所は特になく、家々で祀っている。三月もしくは四月に、赤飯を棧俵に乗せて道に供えた。山の神に参る日は、女性は昼まで外出しないという決まりがあった。

3 人生儀礼

結婚式 家で婚札が執り行われたのは昭和三十年代までで、昭和四十年代以降は神社（多賀大社、野々宮神社など）や式場で行うようになった。

家で結婚式を行っていた頃は、婚家から嫁の家に向けて迎えに行く。式の前に婿が嫁の家で昼食をとり、実家に戻る。外が暗くなったら、嫁の家から提灯を持って行列を組んで歩いた。その後に親類呼びや友達呼

び、婦人呼びのような披露を何度も行った。料理は料理屋（かわきや、魚松）に来てもらって用意した。

道具見せ 嫁入りの荷物を婚家に運び入れ、デエとザシキの二間を使つて並べてムラの人に披露した。

三日帰り 式の後、嫁だけが花嫁衣裳のまま神社、寺、隣近所、嫁ぎ先の親類、嫁の実家などを可能な限り回る。翌日に三日帰りをを行う。三日帰りのタクシーは、文金高島田が崩れないように天井が開くようになっていた。髪結いも同行した。三日帰りを終えたら髪を下ろし、留袖に着替えた。

新婚旅行 昭和四十年代に入ると新婚旅行に行くのが当たり前になった。それ以前は山仕事が忙しく、「山に行くのが新婚旅行」と冗談めかして言う人もいた。

出産 自宅での出産は昭和三十年代くらいまでで、出産はへやで行った。ムラに器用な産婆がいた。それ以降は病院や産院での出産が主流になった。山上町に産院があった。

後産 後産（のちうぶ）は、墓の一段低いところに埋める場所が決まっており、産婦の夫が持つていつて埋めた。

へソの緒 桐の箱に入れて取っておく。母親の棺に子の臍の緒を入れたが、これは「子供を産んで育てたことを閻魔王に報告するため」といわれていた。

産後の食事 産後に鯉を食べると乳の出が良くなるといわれ、あら汁を食べさせた。産婆が乳揉みをしてくれた。

名付け 父親や祖父が名前をつける。暦の八專（はつせん）の間に生まれた子は八專子（はつせんこ）といい、獣の字を名前に入れる決まりがあった。猪の字が入った名の人がある。

お七夜 生後七日目はお七夜といい、親類に出産の披露をした。

宮参り 性別によって異なり、男子は生後三十日、女子は生後三十三日に行く。

墓 昔は土葬だったが、昭和五十年代には火葬になっていった。明治四十一年生まれの人が亡くなった時が最後の土葬だったと思われる。林道の側に墓がある。かつては組ごとに穴掘りにいき、一・五メートルほどの深さの穴を掘った。「穴が深いほど極楽さんがいる」といわれた。穴を掘る人のもてなしをした。

墓参り 盆と彼岸に参る。ムラから移転した人も、墓参りには戻ってくる。盆参りには僧侶を呼ぶ。

第五節 交通・交易

商店 ムラの中に魚屋や一文菓子屋（駄菓子屋）があつた。床屋、衣料品店などもあり、外に買い物に行かなくても物の入手に困らなかつた。

行商 八風峠を超えて伊勢から来る行商人から魚を購入した。箕川から小椋こんにやくも売りにきたので、三、四軒の行商があつたと記憶している。

買い物 買い物は、近年は八日市か山上にいく。茶碗などの食器は信楽などに買いにいった。

第六節 その他

千軒伝承 藤原千軒、藤川千軒、コセチ千軒などと呼ばれた場所があつた。大正初めまでは、日本コバに行く途中に藤川千軒の屋敷があつたといわれている。

鉱山 蓬谷鉱山が有名で、昔はリン、亜炭などがよく出たといわれている。

る。

小学校 政所小学校があつたが、平成二十一年に政所小学校と山上小学校との通学区域が統合され、閉校した。

橋 小橋と高橋と呼ばれる橋がある。

第十二章 箕川の民俗

ムラの概要

御池川沿いに位置する小さい面積のムラで、政所と蛭谷に隣接している。古くから材木生産や植林などの林業が盛んで、ムラの中に三軒の製材所があった。また、茶業も盛んで茶畑がたくさんあった。水の確保に苦労した立地であり、井戸水が出ない家は川向いの三つの谷から谷水を引いていた。「ワセヨ」「タツヒキ」と呼ばれる独特の正月行事がある。

第一節 社会組織

戸数 令和三年現在では現在は九戸の家がある。昭和初期には三十二戸あった。

組 上、中、下の三組に分かれている。

第二節 信仰

1 神社・寺院

八坂神社 主祭神は素戔鳴尊。明治初年までは牛頭天王と呼ばれていた。境内社に恵比須神社がある。明治と昭和に二回火災で焼失した。

永昌寺 臨済宗永源寺派。山号 雲岩山。現在は大龍寺（青野）の住職が兼務している。

2 信仰組織

神社の組織

若い衆 若い衆は、各家の長男が数え年の十八歳から十年間務める。次男以下はムラが許可した場合のみ入る。若い衆の筆頭を上若い衆、末席

を下若い衆とした。年齢順を基本として、同い年の場合は親の座順で決まった。祭事の世話を担い、定員はない。

神主 若い衆を務めることで、一人前の住民として認められる。神主になると、毎月二回お参りし、神酒、燈明などを供える。神主を務める期間は、夫婦でも寝室を別にした。神主の交代は十二月三十一日に行う。十数年前に制度が廃止されたため、現在は有志で継続している。

肝煎 神主を終えた人は肝煎きまじりと呼ばれる長老となるが、特別な権限が与えられるわけではない。

神主の衣装 毎月朝晩のお参りの際は烏帽子に白い浄衣を着て、白い鼻緒の下駄を履く。春祭りと大祓いの時は、神職が着るような柄物の衣装を着る。

寺堂の組織

檀家総代 檀家総代が三人いる。正月参りは、三人のうち一人ずつ主任を務めている。

3 年中行事

神社の行事

毎月の行事 昔は毎月一日朝、十五日夜、十六日朝、末日夜に神主が祝詞を上げた。

正月行事 大晦日から八坂神社で宵越しをした。神主が餅やミカンなどを神前に供えるが、近年は猿に取られるようになり、供えた後はすぐ下げるようになった。門松は、百五十センチほどの高さがあるものを本社前の左右二箇所に飾る。正月についた餅をエゴノキの枝につけ、マエダマ（繭玉）にして門松に飾る。しめ縄はワラで作る。かつては田を持つ



写真 42 タツ作り（平成初期）
「滋賀県の祭礼行事」より転載



写真 43 カギを引く様子（平成初期）
「滋賀県の祭礼行事」より転載

は硬いため、モチワラが良い。

ワセヨ 正月に行う行事をワセヨ（ワセオ、早稲を）もしくはシュウシハジメという。現在は縮小されている。

・一月二日

ネコヤナギの枝を河原で切って「カギ」を作る。カギには炭を入れてたワラヅトをくくる。

・一月三日

朝から若い衆と神主、肝煎が八坂神社に集まる。社務所に列座し、シュウシを行う。この時の給仕は下若い衆が務める。漬物、豆味噌（煮大豆）、洗米のゴク（御供）を供える。その後、ワラで作った綱を神木から鳥居まで張り渡す。十二本の木に水引をくくる。綱に持参のカギをかける。肝煎が「ワセヨ、ナカテヨ、オクテヨ、大麦、小麦、大豆、小豆、五穀成就」と唱えごとを言うと、一同が「ホーイ」と合いの手を入れ、カギを引く。現在は綱を荒縄に変更している。

・一月六日

家からワラをもらっていたが、田がなくなつたため杠葉尾からモチワラをもらって作っている。通常のワラで

日没後に若い衆が社務所に集まり、タツ作りを行う。三日に張った綱を三メートルほどに折りたたむ。これを芯にしてワラをない、タツと呼ばれる太い綱にする。かつては七十センチの太さがあつたが、年々細くなっている。荒縄でヒゲのようなものを付けた。出来上がったタツは社務所の床の間に飾る。神主が本社に参り、若い衆が太鼓と鉦で囃子を繰り返す。この一連の行事をオコナイハジメといった。

また、カギに宝珠印を押した紙を挟む「ゴズエ」を作り、各家に配る。ゴズエは牛玉宝印の杖を意味する。赤いねり土を朱肉代わりにする。

・一月七日

六日の夜から若い衆は社務所に籠り、翌七日に山の神講を行う。山の神は、木で男女を模した人形を作る。これをオンタイメンタイと呼び、毎年新しく作る。トチの木の樹皮を剥いで顔を描く。これをタイツクリといった。祭場から帰ってくると神主の烏帽子に子供が雪を当てに来る。烏帽子を落とすと豊作になるといった。かつてはムラから二キロほど離れた場所に杉の木があり、その横に山の神の祠があつたが、参拝が困難になってきたため、三、四年前に八坂神社に合祀した。

七日の朝に若い衆が七草粥を準備し、神主は餅を持ってくる。若い衆が粥を炊いて野菜などを入れ、供えた餅を入れる。粥の具は大根、ナズナなどがあるが、厳密には決まっていない。粥を食してから山の神行事を行う。

・一月十四日

タツを社務所から放り出すと、ムラの子供たちがタツを引きずり回して川に流した。これをタツヒキといった。

・一月十五日

小豆を入れた粥を炊く。朝に社務所に供え、神主とワカイシュが神

前に供えた後に食べて、正月行事が終わる。現在は行っていない。

春祭り かつては四月七日に行っていたが、十五年ほど前から祝日である四月二十九日に変更した。神事は黄和田の日枝神社の宮司に依頼している。

・提灯、幟

提灯や幟は、祭り前日に準備する。幟は二本あり、高さは約十五メートルある。「奉納 八坂神社」と書かれ、幟の下に飾りを付けた。今は鉄柱を使っているが、昔は二十五センチ径のヒノキの柱だった。若い衆が数人がかりで幟を立て、穴に刺してロープで固定した。提灯は社務所、境内、本社前などに設置する。

・宵宮

春祭りの前日の午後七〜十時に社務所で宵宮祭が行われる。この時には一メートルを超える太鼓を叩きながら家々を回っていた。太鼓は「ドンドンドンデーン ドンドンドンデーン」という決まったリズムがある。結婚した人や厄年の人がいる家を回り、その家では酒を準備してふるまう。現在は人口減少により行っていない。

・ホンビ（本日）

四月二十九日の朝十時から始まる。シュウシは十一時頃に始まる。宮司、神主、区長、氏子総代、上若い衆、市さん（巫女）などが拝殿で神事を行う。テグリ（手渡し）で供物を供える。供物は、山・海の幸（サトイモ、ニンジン、果物、伊勢からの鯛、ハマチ）、一升餅（以前は家で作った）、御洗米、菓子など。巫女が湯神楽をして、その湯をかぶるのが良いといわれた。

小学一年生の勸学祭も同日に行った。祭り中は他のムラから子供や親類が来るため、客の接待をした。他のムラで祭りがあった時は、箕

川の子供や親類が出向くという協力関係ができていた。

焼け祭 明治時代に八坂神社が焼けた日である七月二日に「焼け祭」をしていた。

百灯

八月十六日に八坂神社で百灯を行う。菜種油を入れた皿に火を灯し、台の上に宝珠型に並べた。一つの台に五十個の皿を置き、それを二つ作って合計百個置いた。マメミソを焼いたものやタクアンを肴にして三献がある。

神主交代

百灯と同じ日に、翌年の神主と上若い衆を決める行事が行われた。若い衆の親の座の順番によって決まった。神主が決定した後は、お披露目の儀式を行った。夏に交代する理由は、年末年始の行事に向けてトチノキ切りや門松用の松切りをする必要があるため、早いうちに準備する。

大祓い 十二月二十日から二十五日のいずれかの日に、日枝神社の宮司が来て神事を行った。神饌は春祭りと同様である。

寺堂の行事

施餓鬼 先祖供養を行う。八月十一日の午後に行われ、各家の代表一人が出席する。八月の第一日曜日にムラの外に出ていた若い人たちが帰省し、飾りつけや寺社の掃除を行う。

お盆 八月十三日に先祖の霊を迎え、十六日に送る。十三日から僧侶が檀家を一軒ずつ回り、棚経をあげる。十三日から十五日に供物を作る。かつては十六日の朝に桐の葉に供物を包んで川へ流したが、現在は川を汚さないように中止している。家によって供物の内容は異なるが、素麺やお膳が多かった。

彼岸参り

春と秋の二回あり、各家で墓掃除を行った。老人クラブで経

を上げ、墓参りをした。

第三節 生業

1 山仕事

林業が主要な生業だった。かつては三軒の素材屋（製材所）があり、人夫を雇っていた。樹種は杉、ヒノキを扱っていた。林業が低迷してからは勤め人が多くなった。男性の主な仕事は木出しだった。他のムラに泊まりがけで行って木出しをすることもあり、それを「山泊まり」といった。女性も植林や枝打ちに従事した。炭焼きは雑木（特に堅木）ならどんな樹種でも焼いて炭にした。

共有林 ムラの共有林があり、惣山と呼んだ。造林公社が五十ヘクタール所有し、県営林もある。ムラの周囲は個人山が多く、その周りはムラの入会になっている。寺山もある。神社の山もあるが、これはソウヤマの一部である。他のムラとの共有林はなかった。

山主 山主は個人山の持ち主のこと。山主は、人に依頼して植林、間伐、枝打ちなどの手入れを行うこともある。

植林 植林をする前に、既に生えている雑木を切り開くジゴシラエを行う。その後に苗木を植える。苗木を植えた後の下草刈りは八年ほど行う。スソエダオトシは十年ほど行う。雪による倒木を起こすキオコシ（木起こし、雪起こし）には、かつてはワラ縄（三分縄）を用いたが、今は化学の縄を使っている。

間伐 第一間伐は、植樹から十〜十五年ほど経った頃に行う。当初は一ヘクタールにつき三千本ほど植林したものを、間伐して三割ほど減らす。第三間伐まで行い、最終的には千五百本ほどになる。毎年五月頃にキオコシをして、下刈り、間伐を行う。五十年育てると柱材や板材になる。

手間がかかる作業であり、家から距離がある山で間伐するのは難しかった。補助金が出るようになってからは集団間伐をするようになった。

木馬 キンマ（木馬）を使って木を運搬する時代があったが、箕川には木馬道がなく、木馬を使う人はいなかったと思われる。蛭谷には木馬道があった。現在はヘリコプターで運んでいる。

馬による運搬 昔は運搬用の馬を使う業者が二つあった。動物を使った運搬をノタビキといい、馬が山から木を引っ張ってくる。木馬道がなくなった頃に引っ張っていたことを覚えている。引き摺ると木材に石が食い込むため、これを除去する作業をミミオトシと呼んだ。

林業の道具 木を切るのはノコギリやガンゾを使った。そのほかにエダウチノコやヨキなども使う。枝打ちにはヨキを使い、十〜十二月に行う。現在は枝打ちロボットも活用している。

木材の販売 箕川に販売業者がおり、三重、名古屋、大阪などを販路にしていた。鈴鹿峠を越えて四日市まで一日に二往復していた。木材の運送屋もあった。ここで三、四メートルの長さに切断して運ぶ。索道のエンジンを使った。

製材所 箕川、蛭谷、君ヶ畑に製材所があり、原木を機械で製材した。現在のコンニャク屋がある場所に、個人で製材をしている人が住んでいた。

炭焼き 昔は多くの家が炭焼きをしていたと聞くが、昭和二十年頃には途絶えており、昭和二十二年生まれの話者は炭焼きを見た覚えがない。雑木山を借りて、炭焼きをした後に植林をする。炭焼き用の窯は、東山やキトラヤマにもあった。窯を作る時は女性も手伝った。

2 茶業

昔はかなりの面積の茶畑があった。主に一番茶と二番茶を作った。昔は彦根の茶問屋が茶を買いに来て、作ったそばから売れるという状況で、雨が降っても蓑をかぶって茶を摘んだ。茶は双葉のものがよく、三葉は味が落ちるといわれた。家ごとに焙炉があり、茶葉を蒸して揉んだものを出荷した。茶の時期は学校が数日間休みになったので、子供も手伝いをした。

茶摘み 箕川は、永源寺地区の中でも茶摘みの時季が遅く、五月中旬から下旬にかけて行う。話者の家の茶畑は一反ほどの面積だが、今でも家族五人で手摘みしている。茶摘みは主に女性の仕事だったが、近年では男性もする。茶の収穫量の多い家は手伝いが必要で、親類や知り合いの女性などに頼んだ。茶摘みの手伝いに行くと日当が出た。また、市原野、山上、三重県などから茶摘みが来て、泊りがけで作業することもある。

茶摘みの食事 茶摘みの時期は四時頃に起きて飯の準備をし、遅くとも六時頃までには家を出て、十八時頃まで作業した。十時と十五時に男性が茶葉を回収していった。昼飯は十二時頃に食べる。お昼は家に帰るか、遠くの場合は弁当を持って行く。弁当は、梅干しを入れて海苔やモクズで巻いたおにぎり、焼いた玉子などを入れた。飲み物は、家からヤカンで持ってきていった。

茶摘みの道具 摘んだ茶葉は小さな籠にいれる。茶籠、茶摘み籠という。小さな茶籠がいっぱいになったら大きな茶籠に移し、それを家に持ち帰り、直径百二十〜百五十センチの茶籠に入れる。摘んだ葉を山から家へ持ち帰る背負い籠をシンドカゴと呼んだ。雨が降ってくるとミノを着て作業したが、現代のカップと違ってずぶ濡れになった。

茶工場 摘んだ茶は日曜の夕方に政所の茶工場に持っていく。政所、君ヶ畑、蛭谷などに茶工場があった。

ロー 家に製茶のためのロー（炉）があり、土間に口がある。ダイドコロに茶葉をおいて蒸す。下から鉄棒、鉄板、炉と重なっていて、炭で熱を与える。オガサンで湯を沸かし、茶葉をセイロに入れて蒸す。セイロは風呂桶を逆さにしたような形で三段に分かれ、高さは百五十センチほどあり、下の段ほど早く蒸しあがる。蒸しあがったものをムシロの上に移して揉み、和紙を貼った板の上で乾かす。これは主に男性の仕事だった。ローを行う部屋をローベヤという。茶渋がつくと茶葉が固くなる。

玉露 箕川では一軒だけ玉露作りを行っている。日光を遮るためにムシロを使ったが、近年になって寒冷紗に変更した。

茶の肥料 五月の茶摘み後、礼肥えを入れる。トンプン、ジュウフンを先に入れ、十月までは油カスを入れる。茶の木の間を耕耘して油カスを入れ、土と混ぜる。麦ワラや稲穂ではうまく育たず、ススキなどのナマハを使っている。

耕耘 十二月の雪が積もっていない時に耕耘する。

3 農業

田 田をやっていたのは二軒だけで、山側にわずかだけあったが、そこも今では木が植わっている。ムラの収穫量だけでは足りないのに、他のムラや親類から買ったり譲ってもらったりした。小字奥祖父谷の淵を辿って谷伝いに水路を引いた。

畑 多くの家の前に畑を作っていた。小字古屋も個人用の畑に分割していた。作物はゴボウや大根など。サツマイモは家で芽を出して、雨が降ったのを目掛けて畑に植えた。茶園の間ではコンニャクなどを栽培した。茶の時期が終わったら、ハエズリキュウリを茶の木の間に植えた。

桑畑 小字上段は桑だらけだった。茶畑の周りや畑の境目にも桑を植え

た。

肥料 畑の肥料は下肥、風呂やオクドサンで出た灰を使い、水田には大豆カスを入れた。油カスなども使った。灰は今でも使う。

4 その他

養蚕 かつては家々で盛んに養蚕をやった。ある話者の家では、昭和三十年代頃まで養蚕を行っていた。茶・炭焼きと並んで重要な現金収入だった。夏蚕と秋蚕をしたが、主は夏蚕だった。蚕を飼う場所はデやザシキで、畳を上げて板の間に変え、蚕棚を置いた。便所の上にも養蚕の道具を積んでいた。別の話者の家では、夏と秋にデの間の畳を上げて養蚕をした。蚕が未成熟のうちは桑の葉を桑切包丁で細かく刻んで与え、成長したら枝ごと与えた。給餌の加減が難しく、与え過ぎると栄養過多で遊んでしまい、繭にならない。繭を作る道具は、ワラマブシから回転マブシへ移行した。

漁法 アユ、イワナ、アマゴなどが川で獲れた。アユやイワナは焼いて食べるが、獲れる量は少ない。針のついた竹竿でしゃくる。アユはトモ釣り、イワナは夜釣り、ヒツカケで獲る。ヒツカケは棒の先に金属がついたもの。ヨトボシでは遠くまで行き、カーバイドを使って引き寄せ、ヒツカケで獲る。秋に谷水が冷たくなり、浮いてくる魚をすくう漁法をスズミといった。コノハズクイという漁法は、冬に落ち葉の下にいる魚を網ですくう。ドドビンと呼ばれるガラス製の道具でハエ（ハヤ）を獲った。

アユの放流 愛知川上流漁業組合が、昔からアユの稚魚を放流している。

牛 耕運機が導入されるまでは、人力と牛に頼った。牛を飼っている家は、ニワの一角にウマヤをもうけた。博労が子牛を連れてくるので、

それを何年か育てて牛が十分肥えたら売り、痩せた牛と交換してまた育てるのも収入源の一つだった。大萩（愛東地区）から牛を借りて田を鋤いていた家もあった。

牛の餌は、夏は雑草、冬はワラを炊いたものを与えた。田起しなどに使う時は、精をつけるといつて酒を飲ますこともあったようだ。

鳥 ブリモスなどを飼っていた。これは卵が目的で飼っており、肉の出荷はしていない。

獣害 かつては猟師がムラに三人おり、鹿を撃った。最近は獣害対策が多い。鹿やイノシシは最近出てこないが、猿がいる。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

食生活

年末年始の食事 お節料理は、黒豆、田作り、ゴボウ、昆布巻きなどを作って用意した。オオツゴモリ（大晦日）の晩に食べるが、全部食べ切らず少しだけ残し、正月にも食べた。これをタベノバシといった。

餅 正月用の餅は、暮れの二十八日から三十日に搗く。二十九日をとりにたてて忘むことはない。おろし餅や納豆餅、きなこ餅も作って食べた。

雑煮 雑煮は味噌味やすまし汁で、「カドが立たんように」という意味を込めて丸餅を入れた。具は油揚げやネギ、大根、サトイモなどを入れた。

ボタモチ 春と秋の彼岸にボタモチを作って供えた。

主食 主食は麦飯だった。麦は田や畑で作っていた。現在は全ての家が稲作を止めたため田が荒れている。

朝食 麦飯、汁物、タクアン、おひたしなどを食べた。朝食の時間はそ

の時の仕事に合わせて変わる。茶摘み時だと、六時前には仕事を始めるので、四時には起きて朝食をとった。

おやつ ソラメやトウモロコシを湯がいておやつに食べた。正月の餅が余ったら、油で揚げて砂糖をつけてアラレを作った。

ごちそう 質素な暮らしの中で、ごちそうをととても楽しみにしていた。サンマの開きに大根おろしが乗っているものが嬉しかった。卵が取れなくなると鶏をつぶして、カシワのすき焼きにするのは大ごちそうだった。**野菜** 多くの家では、畑が家の前にある。畑では、大根、ホウレンソウ、ゴボウ、ニンジン、キュウリ、キャベツなどを自家用に育てた。茶園の間にはソバやサツマイモ、コンニャクイモを植えた。最近では猿が取りに来るため、畑に囲いをする。

コンニャク 畑でコンニャクイモを収穫し、湯がいて皮を剥き臼で搗いて、オクドサンの灰で灰汁抜きをして食べた。少し固まって、白くコリコリしているものが美味しかった。

山菜 ワラビ、ゼンマイ、クサギ、イボナなどを食べた。イボナは湯がいて干し、乾物にして一年を通じて利用した。法事の食事にも出した。味がないので、醤油、砂糖、みりん、酒などで味付けを工夫した。

木の実 栗、柿、カヤの実、アケビなどがあった。カヤの実は正月の供物だった。トチを採ってトチ餅も作ったが、灰汁抜きが大変だった。話者の家にはお寺柿、富有柿などの甘柿、ツルンボシを作る渋柿の両方作っていたが、猿害が起るようになって柿の木を切るようになった。桑の実にはクワイチゴと呼び、色が赤から紫色に変わる頃に採って食べた。**キノコ** クロタケ、シメジ、スドシ（スドオシ）、シラタケ、ケヤキダケ、スギノキクサビラなどを食べた。毒茸には注意している。

ソバ ソバは、麵にはせずに団子状にして湯がき、団子汁のようにして

食べた。

肉・卵 肉類はほとんど食べなかったが、卵用に各家で鶏を飼っていた。肉類は、鯨の肉を買うようになったのが早かったと記憶している。

川魚 アユやイワナを食べた。アユは炊き、イワナは塩焼きにした。

フナズシ フナズシは今も作っており、フナを塩切りしたものを農協などから買っている。

味噌 味噌は手作りで、隣近所で手伝い合って作った。

住生活

間取り 多くは四間（ヨツズマイ）だった。デ、ザシキ、ヘヤ、ダイドコロ。イロリはダイドコロに切つてある。

屋根 かつては寺院以外の建物は全てカヤ葺きだった。五十年ほど前から農協が屋根のブリキを斡旋するようになった。

カヤ葺きの頃は、山奥にカヤカリバがあり、年に一回、霜が降りる頃に刈りに行った。カヤカリバは定期的に場所が変わり、三組が順番にカヤを刈りに行った。二時間ほどかけて歩いて行き、セタ（背負子）で二束ずつ担いで帰った。刈ったカヤはツシや屋根裏で三年分ほど保存・乾燥させ、葺き替えに備えた。一戸分の葺き替えに使う量を確保するには何年もかかる。組のなかで順番に屋根を葺きかえた。ムラ全体での共同作業だった。屋根屋は、山上、上二俣、高野から来ていた。

燃料 燃料には山の落ち葉や松葉、割木を使った。

オクドサン 昭和三十年代頃まで、調理にはオクドサンを使った。オクドサンはニワにあった。

食事の場所 イロリの周りで箱膳を使って食事をした。イロリの座は、男性が上座と決まっていた。椀や箸を洗うのは三日に一回ほどの家も

あった。

便所 外便所で、下肥として利用した。

水の利用 各家に井戸があったが、水量が安定しない家はもらい水をすることもあった。水の確保には苦勞し、川向いにある井戸ノ谷、西ノ谷、奥ソブ谷から谷水を引いた。

風呂 家のカドを入ってすぐの場所に桶風呂があった。当時は風呂の近所同士のもらい合いが頻繁に行われたが、電気がなく暗い上に、女性は後にか入れず湯も汚れていて、嬉しいものではなかった。湯量も少なく、「昨日の風呂は湯が深かった、首まであった」「首は首でも足首まで」という笑い話があったほどだった。外から嫁いできた人は、実家にはない習慣だったのでとても抵抗があったという。

芋穴 家のニワ（土間）に芋穴を掘り、そこへモミヌカを入れ、サツマイモやサトイモを入れて保存した。穴の上には板を張り歩けるようにしていた。イロリの脇に芋穴を掘ってある家もあった。

2 年中行事

年越し準備 十二月三十日から準備を行う。正月飾りは、マエダマ（繭玉）、トコワカ（ユズリハ）を準備し、カマドなどにしめ縄をかける。

節分 イワシをヒイラギに刺して飾った。大豆を炒ったものを神棚と仏壇に供え、神棚に供えたものを一升杓に入れて豆まきをして、年の数より一つ多く食べた。また、仏壇に供えた豆は保存しておいて、その年にはじめて雷が鳴ると食べる。これをハツカミナリという。

雪かき 雪が積もると、子供が学校に行くために政所との村境まで雪道を鋤で空けるのが親の仕事だった。

3 人生儀礼

結納 箕川は他のムラから嫁いでくる例がほとんどで、婚姻の際は必ず仲人を立てた。仲人は親類に頼むことが多かった。結納式は丸帯と結納金を用意する。

嫁入り荷物 嫁入りの荷物は事前に運び、道具見せをする。

婚姻 式の日は、夕方に嫁入り行列をする。たくさんの人が見物に來た。嫁ぎ先の家屋の門口にきれいなワラ（福ワラ）を敷いておき、新婦はそれをまたいで家に入った。婚礼や客呼びの料理は自分の家でも「三種の肴」などは用意したが、ごちそうの仕出しは料理屋に頼んだ。

式の翌日に八坂神社に参り、仲人が姑と一緒にシールイアルキをして、嫁の名入りの風呂敷を配って回った。また、嫁と舅、仲人で嫁の親元に帰る三日帰りをする。その翌日は近隣住民に挨拶をするトナリヨビを行い、翌々日は婦人会との会合であるオナゴシヨビをした。

出産 ムラに産婆がいたので、出産は産婆の家で行った。その後は産院などで産むようになっていった。安産祈願は、萱尾の大滝神社か蛭谷の帰雲庵に参ると良いと聞いた。妊婦は潰し柿（干し柿）を食べてはいけないといわれた。出産後は一週間から十日ほど休んだ。臍の緒は桐箱に入れて保管し、産んだ本人が亡くなった時に棺の中に入れる。

葬儀の変化 かつては家で葬儀を行い、親類以外にも多くの人が來たが、近年は葬儀業者に依頼している。太鼓や鐘などによる「チーン、ポーン、ジャバーン」という音が特徴的だった。通常は導師と奏者で三、四人一組になっていたが、最近は導師だけの場合もよくある。

昭和の末までは土葬が主流だったが、平成には火葬になっていた。土葬の頃には、葬式の前日と当日に村普請として遺体を埋める穴掘りを共同で手伝い、若い男性がそれを担当した。穴を掘る者は当該の家の風呂

を借り、体を清めた。

墓 ムラの南西部に墓所があり、埋葬用と墓参り用の二つの役割を兼ねていた。埋葬場所を明確に決めていない場合も多く、基本的には古く見える部分を掘る。新しい遺体を埋める際に、前に埋めた遺骨が出てくることもあり、その場合はその横に穴を掘った。掘り返されないように重石として墓石を乗せ、後に墓標を立てた。墓石は、墓に合うように削って調整した。

戦没者の墓参り ムラの戦没者慰霊碑があり、戦没者の家族が今でも定期的に参っている。

第五節 交通・交易

行商 政所に三軒ほど魚屋があり、魚類を売りに来た。海の魚は伊勢から売りにきた。現在も四日市から魚屋が毎週売りに来ている。

第十三章 蛭谷の民俗

ムラの概要

御池川上流の谷間に位置するムラである。平地が少ないため田や畑は少なく、昭和中期までは材木生産や製材などの山仕事が主な生業だった。隣接する君ヶ畑とともに木地師の根源地と伝えられ、木地師の職祖とされる惟喬親王を祀る筒井神社は、現在でも広く信仰を集めている。明治初期まで、筒井公文所によって木地師の保護と統制を目的とした「氏子かり」が行われた。

第一節 社会組織

戸数 明治時代には二十四戸あったと聞いているが、昭和三十五年頃には九戸になっていた。

組 戸数が少ないため組分けはされていない。

第二節 信仰

1 神社・寺院

筒井神社 主祭神は応神天皇、惟喬親王。境内社に稲荷神社がある。近世までは筒井正八幡宮といい、木地師の支配所である「筒井公文所」が置かれた。かつては筒井峠にあったが、明治時代に現在地に移った。社務所の一角を木地師資料館として運営している。

帰雲庵 臨済宗永源寺派。山号 瀧応山。元は天台宗の寺院だったという。阿弥陀如来が本尊で、安産のご利益があるとして近隣の女性から信仰され、ムラの女性が毎月十五日に小豆飯を作って供え、経を上げていた。

山の神 山の神を祀る場所は惟喬親王御陵の手前にある。元

は道より下の方にあったが、汚水が流れ込むようになったため移動させた。

2 信仰組織

神社の組織

ワカイシ ワカイシ（若衆）には、中学校入学と同時に入る。ムラの男性全員が加入する訳ではないが、若衆に入らないとムラでの権利をもらうことができなかった。最初は下若衆（しもわかし）として、年長者の世話をする。神事では太鼓を担当する。小太鼓（シメ太鼓）の練習が難しく、能のようになりズムだった。厳しい掟で律せられ、寒い時でも足袋を履くことができず、羽織も着ることができなかった。年下が二名加入すると、上若衆（かみわかし）に位が上がる。神事では笛を担当し、下若衆に太鼓を教えた。若衆は、本来は三十五歳頃で卒業するが、近年は人口減少で新規参入がないため卒業しない。

中老 相談役で、昔は三十代くらいで担当する。山の神のご神体を作る役割を任される。今はなくなった。

肝煎 全体の総括役だったが、今はなくなった。

神主 ムラの住民が担当する神主（じょう）を常神主・当番神主といい、神主の家が当屋（頭家）となる。神主は一年交替で、順番に回したり、クジで決めたりした。神主を務めることで一人前とムラから認められ、神主に選



写真 44
惟喬親王御陵の親王像（令和5年）

ばれたら本膳でお祝いをするほどだった。毎年一月十五日の日待講が終わってから新神主を決める。その年の十一月一日が神主の引継ぎ日で、十一月八日の初祭りでは本社の鍵渡しをして、神主の業務は年末に交代する。

神主になると、毎月一日と、月末のツゴモリに筒井神社に参る。昔は神主も参拝者も神社に参る前に水で禊ぎをする潔清けっせいを行った。神主の間は女人禁制で、妻も寝所に入ることはできなかった。彼岸参り、五節句、新嘗祭、稲荷などの神事で、年間五十回以上参った。

宮司 神事の際は黄和田の日枝神社の宮司に依頼している。

惟喬祖神講本部 蛭谷の木地師関係の人や団体に御札を送り、筒井神社への寄進をお願いしている。親王祭の案内なども送っている。百五年前から記録が残っている組織である。自治会からは独立した組織だったが、人口減少により自治会で運営を担っている状況である。

寺堂の組織

住職 帰雲庵は無住寺で、現在は大慈寺（上岸本）の僧侶が兼務している。以前は永昌寺（箕川）の住職が来ていた。盆や葬式などの行事の際に来てもらう。

3 年中行事

神社の行事

五節供 かつては年間五回の節供（節句）の祭りを行っていた。五節供は本来、人日（一月七日）、上巳（三月三日）、端午（五月五日）、七夕（七月七日）、重陽（九月九日）を指すが、蛭谷では一月七日ではなく一月八日、七月七日の代わりに十一月八日を節日としている。山の神講、大祭、親

王講などの行事が節供に当たっている。

正月の行事 十二月三十一日から一月三日までは行事が続く。若衆と神主が大晦日から神社に籠って年越しする。無言で神饌を準備した。しめ

縄と門飾りを用意する。門飾りは、ユズリハとカシの杭で作る。

一月一日から三日の朝までは、準備した神饌を供えて下げる儀式を毎日行う。神饌の内容は、鏡餅七飾、菱餅、干し柿、タツクリ、ホンダワラ、ミカン、栗、カヤ。

三日は燈講とうこうという。この行事には中老が参加する必要があった。シキビ（檜）の門飾りをその年の恵方に倒し、下若衆はその葉をちぎって箱に入れて神前に供えた。鏡餅を細かく切り分け、参拝者に配る。この日は飛華とびはなと呼ばれる行事も行った。

現在は行事を簡略化して継続している。三十一日の晩から餅以外の供物を供えている。一日の朝は鏡餅と御神酒を供え、祝詞を上げる。昔は一度下げてまた供えたが、現在は供えたままに変更している。一日から三日の朝夜に御神酒を供え、夜にトウシミ（灯芯）に火を灯す。三が日が終わると下げる。鏡開きはしない。

山の神講 一月七日に山の神講を行う。山仕事などの安全を祈る行事。

山の神は女神のため、神事は女人禁制である。

まず、山の神の祠に飾るタツの形のしめ縄を作る。モチワラを振じつて三メートルほどの綱にして、端を折り曲げてタツの顔を作る。タツには、ウツギを用いた飾りを刺す。山の法面に生えているウツギを採って二十〜三十センチほどの長さに切り揃える。棒の片方を尖らせるように削り、もう片方には溝を入れて御幣を挟んだものを十二本（閏年には十三本）用意する。小さいしめ縄も十二個作る。昔はこれを神主の家で作って、作っている間は喋ってはいけなかった。



写真 45 山の神講のタツ作り（令和 7 年）



写真 46 山の神講のカギ引き（令和 7 年）

いもので、昔は中老だけ先に出発して山の中でご神体を作る秘密の行事だった。現在は社務所で作っている。

山の神まで若衆がタツを担いでいく。祠の手前の柱にタツをかける。タツに木の枝で作ったカギをかけ、それを鈴緒のように揺すって参拝する。神酒を飲み、山仕事の安全を祈る。神事が終わると、ご神体は祠の裏手にある部屋にしまう。

神饌は、餅、御神酒、栗、カヤの実、昆布、タツクリ、ミカン、干し柿。令和七年は栗が不作で入手できなかった。以前はこれにハタキゴク（水に浸した生米を臼で搗いて固めて炭火で炙ったもの）、湯ヅクリ（洗米を蒸したものに小豆を加えて握ったもの）があった。

かつては藁苞^{わらぼう}に河原で拾った小石を入れたものを作った。藁苞は二つ作って一つは山の神に供え、もう一つは家に持ち帰って便所などに吊った。

七草粥 一月七日に七草粥を作り、神社と家の神さんに供える。七草は、昔は近隣で採れた。ユズリハの葉を皿に、餅を細く切ったものを箸に見

山の神のご

神体は、二股、三股の木の枝で作る。樹皮を刃物で剥き、紙を巻いて紅白飾りでくくる。この作業は人に見せてはならな

立てて神前に粥を供える。

日待講 一月十五日に神社で日待講をした。昔は夜通しで灯明を守り、酒を飲んだりした。現在はこの日は家で餅の入った小豆粥を作る。

神明講 昔は一月十六日に神明講があった。大正時代頃まであったと伝わる。

厄神祭 一月十九日の神事は「厄神さん」と呼ばれ、昔は多くの人が参拝に来るほど有名だった。神主がお祓いをして、お供えのお下がりである正月の鏡餅を切り分けたもの、洗米、蒸し大豆、お札をもらって帰る。
愛宕講 一月二十四日に愛宕講を行った。掛け軸があり、講に加入している家で行う。

節分 神主が神社で節分の神事を行う。イワシの頭をヒイラギに刺したものを玄関に飾った。豆まきは今でも行っている。

稻荷祭 二月の初午に筒井神社の境内社である稻荷に参る。神饌は小豆飯、油揚げ、イワシ、大根、ニンジンだった。

雛祭り 三月三日の雛祭りにも神社で神事を行う。糯米とヨモギで菱餅（団子と呼ぶ）を作って供えた。

春の大祭 五月四日に宵宮、五日に本祭りをを行う。昔は四月五日だった。惟喬祖神講本部で木地師団体をまとめており、祭りの際には団体ごとに蛭谷に参る。

まず、下若衆が袴を着て、控え場所である帰雲庵（かつては神主の家）から筒井神社まで七回半往復して宮司・神主を呼びに行き、七回目で宮司・神主が出てきて列をなして筒井神社に向かうという儀式があった。神社に着くまでの間、大太鼓、小太鼓、笛の演奏が続く。これを寄せ太鼓といい、宵宮で試験をして演奏順を決めた。寄せ太鼓が終わると祭りが始まる。

筒井神社からカンジョ（御旅所）までいく渡御を行う。渡御では役割によって様々な持ち物を持った。神輿ではなく、大榎おおえぎに神鏡を付けたものに神を移し、行列でカンジョまで移動する。行列では能面や瓶子などの持ち物が役ごとに決まっていた。着くまで太鼓や笛を吹いた。カンジョで杭に縄をつけたものに鏡を立て、祝詞を上げる。神事が終わったら、神主に挨拶して、帰雲庵まで伊勢音頭を歌いながら神主をり込み、その後直会を行った。

五月五日は菖蒲の節句のため、神饌にはチマキを供える。チマキは神主の家で作る。米粉を練って団子状にして、クマザサの葉で包んで蒸す。計七十本作って七膳に分けた。

盆踊り 蛭谷にはなかったが、近隣のムラでは行っていた。昭和三十年代に政所の盆踊りにオート三輪で行ったことを記憶している。

惟喬親王祭 親王講を改め、平成五年から開始した行事で、筒井神社の旧跡（筒井御陵）で行っている。惟喬祖神講本部が主催している。日程は十一月九日だったが、人が集まりやすい七月の海の日に変更になった。**新嘗祭・大祓い** 新嘗祭は十二月第二土曜に行っている。宮司が来る。餅、赤飯、山・海の幸（ゴボウ、ニンジン、大根、鯉・鯛など）、新米を神饌に用いる。

元服式 かつては元服式があり、将棋の盤から飛ぶなどの儀式を行ったといわれる。

雨乞い 雨乞いの儀式は特にない。蛭谷は水には苦勞せず暮らすことができた。だが、近年になってから井戸水が涸れることがあった。

寺堂の行事

盆の迎え火・供物 八月十三日に盆の迎え火をする。墓参りをして家の

仏壇にも参る。仏壇の棚を出し、桐の葉を敷いてスイカ、果物、野菜などを供える。色のついた素麺を用意した。初盆の行事は家によってしたりしなかったり様々である。

大施餓鬼・盆の送り 大施餓鬼は、昔は八月十五日に行っていたが、今は十四日に変更されている。寺の外に施餓鬼棚を作って供え物をする。供え物はササゲやホンダワラなど。施餓鬼をして大川に送る。施餓鬼が終わると供物をショウケ（竹籠）に入れて流しにいった。ウマガラという場所から川に下りる。リン、線香、蠟燭を持っていき、オシヨライサンを送る。

五十の灯 八月十六日に五十の灯をした。火打石で火を灯す。

地藏盆 地藏さんは帰雲庵の左手にある。昔は八月二十四日に地藏盆をした。供え物をして、年配の女性が導師になり経をあげる。ナンバ（トウモロコシ）をもらった。

親王講 惟喬親王の命日とされる日に、親王講を帰雲庵で行っていた。数珠繰りやロハツと呼ばれる行事を行った。これが親王祭に変更になった。

第三節 生業

昭和三十年代までの生業は、炭焼き、薪作り、材木、製材などの山仕事が多かった。山の手入れを仕事にする人もあり、話者の家では山の管理を箕川の人に依頼していた。条件の良い場所には植林し、それ以外の場所には雑木が生えるので、これを炭や薪にした。また、昭和中期までは茶業が盛んで、養蚕をする家もあった。

1 山仕事

共有林 ムラの山や神社の山がある。ムラの山は、木地師やまの子の家

の上の方にあり、面積は広いが境界がどこか分らない。古地図に大体の目安が書いてあり、小字長峰や小字堂立辺りが共有林と思われる。神社の山は自治会で管理している。

個人山 個人山は境界がはっきりしなかったが、小さな段差や岩を境界としたようである。木を切つて植える時は、境界にヒノキを植えて目印にした。今は森林組合に管理を依頼しており、十年ほど前からようやく境界がはっきりしてきた。

炭焼き 昭和二十一年生まれの話者の祖父の時代にも炭焼きをしていた。祖父が炭焼きをしていた場所は、居住地から一・五キロほど行った君ヶ畑の手前の山で、そこは個人山だった。窯があり、夏場に炭を焼いていた。炭焼きをしていたのは昭和三十年代で三人ほどだった。女性や子供も俵詰めや搬出などを行った。

林業 木を伐つて、丸太のまま売ることもあれば、山の中で挽いて製材して出荷することもあった。製材所ができてからはそこで製材するようになった。年間数本伐れば生活できたといわれる。蛭谷周辺は戦中戦後に植林しており、樹齢七十年ほどの木がたくさん生えている。

・八専

昔は木を伐採してはいけな時期があり、これを八専はっせんと呼んだ。年間十二回あり、毎年日が変わるので暦を見て判断した。八専の時に木を伐ると、木に虫が湧くといわれた。

・利用する木材

杉、ヒノキ、モミ、松などを切った。杉が柔らかく伐りやすかった。蛭谷の杉は良質とされた。ヒノキは少し硬い。杉皮は屋根材や瓦の下地に使った。神社には檜皮を使った。

・切り始めの儀式

山に初めて入る時は、伐る木に塩、洗米、神酒を持って行って供えた。それからヨキではつって、鋸で伐った。

・根本の処理

木は先端より根本に価値があったため、クワで根元の土を掘って、少しでも根本を長く伐るために工夫した。一尺(約三十センチ)は掘った。木を伐る時は、先に根の周りの皮を剥がしてから鋸を入れる。

・伐倒し

倒したい方向にヨキで受け口を作り、反対側から追い口を入れていく。大きい木には矢を入れて倒した。今のように周囲の邪魔な木を先に伐ることができないので、倒すことができる方向が限られていて、上手な人しか木を伐ることは難しかった。

・道具

一人で切る鋸と、二人で行う合挽鋸があった。ヨキは樹皮の除去や受け口を作るのに使った。

・道具の手入れ

休みの人は鋸の目立てをしたり、ヨキを研いだりした。鋸の目はきちんとアサリ組みができていないと切れなかった。

・木馬

ソリ状の木材運搬用具で、製材したものを載せて運んだ。カシなど硬い材を使って作った。足場を組んで滑らせるため、急な斜面でも出せて便利だったが、危険も伴った。

・川流し

昔は御池川の水量が多かったため、君ヶ畑などの山で伐った木は川に落として下の河原で回収した。

・動物による搬出

馬や牛などを使って搬出することをノタビキといった。

・セン

製材所の人が山を買い、センを引いて山から木を下ろしていた。センが最も安価でやりやすい搬出方法だった。

・製材

丸太のまま出すこともあれば、山の中で製材することもあった。大きい鋸を使って製材した。一坪当たり六尺として、坪単価で手間賃が決まった。上手な人は一日四坪、通常で二坪半くらいだった。

・製材所

三十年頃には周辺のムラ全てに製材所があり、蛭谷には蛭佐製材という製材所があった。君ヶ畑や箕川にもあったことを記憶している。

カヤバ ムラの共有のカヤバがあった。君ヶ畑へ向かう道を左手に上がったところにある。日常的にススキの手入れをして、秋になると刈った。ムラ総出でカヤを集め、各家で預かってツシや小屋で保管し、屋根葺きの際に共有した。一度に四面全てを葺くのは難しく、一面ずつ交換した。葺き替えの順はあらかじめ決めてあり、二十年周期でまわる。どうやって順番を決めたかは不明である。

2 その他

茶業 山手に広い茶畑が広がっていた。今では木が生えて分からなくなっている。話者の家には炉があり、製茶に利用していた。

漁法 川で漁をすることを川行きといった。ウナギ、アユ、イワナなどが獲れた。ウナギは流し針で獲った。夕方に仕掛けて、翌朝に上げる。ミミズやハエンチョ（アブラハヤ）を餌にする。アユは、トモ釣りとシャクリで採った。三メートルほどの水深の淵で、百匹獲れた。二百匹ほど

獲れた時があり、池に入れて保存し、二十人ほどで焼いて食べた思い出がある。イワナは釣りや流し針を使ったが、獲れる数は多くなかった。小さなアブラハヤなどはモンドリ（網）で獲った。ドドピンを仕掛けておくと、中が真つ黒になるほど魚が入った。蛭谷では、漁業権販売などの商売は行っていない。川がコンクリートで固められてからあまり取れなくなった。

猟師 蛭谷には猟師はいない。箕川や君ヶ畑にはいたことを記憶している。

養蚕 夏蚕のみ行っていた。秋蚕の頃には桑の葉が傷んでいるのでできなかった。

荷物の運搬 蛭谷までは大八車が通行できたため、君ヶ畑の女性が十人ほど連れ立って荷物を運んできたのを覚えている。背板に木材、炭俵、茶壺などを担いで下りていき、帰りに米や味噌などを購入して戻っていたようだ。

内職 学校が終わった後や雨が降った時は家でワラゾウリを作った。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

食生活

正月の餅 十二月三十日に餅搗きをした。臼と杵で、二升を五回分ついた。鏡餅は、家の餅は一段で、上に小さく丸めた餅を載せる。筒井神社の餅は二段重ねにする。神社と家の神さん、台所の神さん、仏さんなど全部で九箇所鏡餅を供える。氏神や台所、仏壇、炊事場に供える家もある。昔は稻荷さんにも供えた。

一升枰 一升枰いっしょうばしと呼ばれる正月の供え物をする家もある。一升枰の中に

洗米を入れ、上に大根、小判餅（小判型の重ね餅）、ミカンを載せる。洗米の上に柿、栗、カヤ、ダイダイなどを乗せたものを朝に食卓の真ん中に置き、お年玉を載せておく。また菱餅も作る。餅搗きの際には、最後の餅に茹でた小豆を入れて搗いて混ぜ込む。それを大晦日の夜に菱形に切って一升枧に載せてミカンを重ねる。一升枧は全ての鏡餅のところに供える。

雑煮 正月についた餅は、鏡餅以外はのし餅にして四角く切って雑煮などに入れる。雑煮は普通の味噌汁で、具は少ない。餅は焼かずに入れる。昔は正月の三日間食べていた。

食事の回数 山仕事をする人は一日五食だった。朝食、十時に前コベリ、十二時半に昼食、三時半頃に一回、帰ってから一回食べた。山仕事にはワッパ弁当を持って行った。昔は力仕事だったため、一日一升はご飯を食べた。山で魚を焼いて食べるのが楽しみだった。

野菜 野菜は自家用に作っていた。大根、大豆、小豆、キュウリ、トマト、ゴンボ（ゴボウ）、ニンジンなどがあつた。自然薯は山で採れる。米以外は自給できた。

山菜 かつては山菜がたくさん採れた。ワラビ、ウド、イタドリ、ゼンマイ、タラノメなどを採る。冬の食料として保存するために、湯通しやあく抜きをして塩漬にした。ワラビは灰汁が多いので、灰水に浸して灰汁抜きしてから塩漬にした。ニシンや油揚げなどと一緒に煮て食べた。ウド川という場所があり、子供が家の手伝いでウドを採りにいった。イタドリはどこにでもあり漬けておいて保存食にしたが、鹿の食害で激減した。クサギ、スギナ、フキ、ヨモギなども利用した。

木の実 栗を母親が袋いっぱい拾ってきたものを蒸して乾燥させ、冬の保存食にした。柿やスモモは自然生えのものがあつた。スイカスモモ

と呼ばれる実が赤いものがあつた。木の実は猿との取り合いだった。トチの木は神社にあつたが、特に食べなかった。

川魚 蛭谷近郊の川では、魚が十種類ほど獲れた。イワナ、ウナギ、アマゴ、アユ、ゴリ、イシンタ、アカネ、ムツ、ハヤ（クソバエ、ハエンチョと呼ぶ）など。イワナが最も美味しかった。ウナギもよく獲れたが、大きいウナギは油が乗り過ぎていて焼くのに苦労した。

肉 肉は滅多に食べられなかった。

虫 クサギには蚕のような虫が付くため、それをおやつにした。ハチノコのような感覚で、炮烙で焼いて食べると美味しかった。貴重なタンパク源だった。

漬物 カブなどの野菜の一夜漬け（キリヅケ、キリゴミともいう）を食べた。ハタキゴクと一緒に食べると美味しかった。

終戦時の食事 終戦時は食料がなく苦労した。蛭谷では米が採れないので、米を買いに他所のムラまで行った。普段はお粥を食べていた。材木と米を物々交換した。

住生活

水の利用 水は井戸を引いていた。後の時代から山水を引くようになった。ムラの上の二戸には井戸がないが、その他の家には井戸がある。家の前の川の水も利用した。風呂は川の水を汲んだ。今は上水道と山水を使っている。浄化槽を導入するために、上水道が引かれた。山水は集水枧に貯め、そこからパイプで引いた。飲み水にもできる。また、岩の間から湧き水が出ている場所があり、君ヶ畑道の山から来ていると思われる。

洗い物 洗い物は川で洗った。ヒルタキ周辺は汚してはいけない決まり

があり、オシメなどを洗うことが禁止されている。今でもヒルタキの横にパイプを通し、汚水が滝の下まで流れるようにしている。

2 年中行事

節句 初節句の行事は行わなかった。三月三日は雛人形を飾り、菱餅を作る。五月五日は端午の節句で、チマキと菖蒲を供える。神社に供えたあとのお下がりを目ら中に配った。現在は五月の節句と大祭をまとめて行うようになった。

盆 八月十三日にオシヨライ棚を設け、先祖の霊を迎える。オシヨライ棚には桐の葉を敷き、葉の上にオシヨロイ用の食事を乗せてもてなす。僧侶が盆の法要に際して、禊^{みそぎ}萩や櫛に水を含ませてオシヨライ棚に水をかける。

八月十五日の夕方には、二枚重ねにした桐の葉に食事を土産として包んだものに、麻^{あさ}殻の枝に色紙で作った御幣を付けたものをオシヨライサ^ンと一緒に大川（御池川）に流す。桐の葉は山に取りに行く。

3 人生儀礼

結婚 見合い結婚も恋愛結婚もあった。ムラの男性と茶摘みの手伝に来る女性と結ばれることを茶屋縁といった。

子育て 仕事で忙しかったため、子供はフゴに入れられていた。山仕事にも子供を連れて行った。

葬儀の変化 かつては土葬で、家ごとに埋める場所が決まっていた。埋めた場所に木の塔婆を立て、何年か経つとまた掘った。

墓 昔は墓をサンマイといい、墓へ行く道をサンマイミチと呼んだ。箕川へ行く旧道の左側に墓がある。埋葬地の手前に参り墓がある。普段

は参り墓に行き、掃除の際は埋葬地も手入れを行う。お盆には埋葬地と参り墓の両方に参る。

第五節 その他

道普請 道路整備をすることを道普^{みちふしん}請という。土道の穴を埋めたり、草刈りしたりする作業を年二回行う。昭和三十年代頃まではムラ総出で行っていたが、いつからか外の人に頼むようになり、今は市や県が管理している。

ヒルタキ 神主が禊^{みそぎ}を行うヒルタキという場所がある。この川には汚水を流してはいけな^い決まりになっている。

学校 小学四年生までは政所小学校箕川分校に通った。戦中は、尋常小学校の六年生まで上がると、高等尋常小学校が二年あった。その後、新制中学校に変わった。

川 筒井神社の前にある川は、コンクリートで固められ、川の底が前より五十センチは上がった。

疱瘡送り 昭和中期頃まで、疱瘡に罹った時は赤飯のおにぎりを作って棧俵の上に乗せ、河原に置いて回復を願った。

第十四章 君ヶ畑の民俗

ムラの概要

御池川上流に位置する永源寺地区最奥のムラである。集落は蛭谷から約五キロメートル北東に位置する。隣接する蛭谷とともに木地師の根源地と伝えられ、高松御所による「氏子かり」が行われた。平地は比較的多いが、谷水が冷たく田や畑には不向きで、生業は山仕事や茶業が中心だった。古来の様式で神饌を調製するマナスエ神事（ゴクモリ）が今でも継承されている。

第一節 社会組織

1 ムラの組織

戸数 昭和四十年時点では五十四戸ほどあったが、現在は十二戸になっている。昭和四十五年頃の人口は全体で約百五十人、子供は三十人ほどいた。

組 組は一組から四組まで分かれている。

自治会 自治会に加入しているのは二十四戸で、ムラの外に移住した人も加入している。

役職 かつては組長、区長、区長代理などの村役があったが、現在は自治会長、副会長、評議員になっている。自治会長の任期は一年で、毎年四月に選挙をする。以前は区長・区長代理を決め、これに評議員四人を合わせて役員が六人おり、前年度の正副が一年残り、計八人で運営していた。

高松会 君ヶ畑の活性化を目的とする有志の集まりで、平成二十七年頃に結成した。現在のメンバーは十三人。古民家を活用して「木地師のふ

るさと交流館」を町内に開設し、木地師資料や郷土資料などを公開している。当初は木地師に関する観光案内を目的としていたが、そのほかにも登山ツアーやイワナ掴み、製茶など、様々な事業を行っている。

2 年齢組織

青年団 青年団には女性も入っていた。中学卒業頃から二十五歳までの未婚者の団体で、旅行などに行った。信仰組織の若い衆とは異なり、遊びの会だった。

婦人会 女性の集まりは婦人会のみだった。

第二節 信仰

1 神社・寺院

大皇器地祖神社 主祭神は惟喬親王。境内社に多賀社と蛭子神社がある。近世までは大皇大明神といい、大皇神社、大皇器地祖神社と改称している。金龍寺住持とともに木地師の支配所である高松御所を運営した。

金龍寺 曹洞宗。山号 蔵皇山。本尊は釈迦如来。大皇器地祖神社の別当寺で、木地師の支配所である高松御所が置かれた。元は天台宗だったが、寛文年間に中興されて曹洞宗に改宗したと伝わる。何度も火災などの災害に遭ったが、全国の木地師からの寄進で復興している。

山の神 山の神は氏神（大皇器地祖神社）の手前にある。神社の境内にある杉の木がご神体だったが、木が倒れたため石碑を建てた。

身代わり地蔵 木地師のふるさと交流館から二、三キロのところにある。峠道にオオカミが出た際に人々の身代わりになったという伝承がある。

天狗堂 天狗堂の御堂と池があった。行事は特に行っていない。

2 信仰組織

神社の組織

若い衆 神社の祭りのほか盆踊りや寺の世話をし、その他の地域活動も担当する。男性のみの組織で、十六歳（高校進学時）から三十歳まで加入する。十六歳から十九歳までを小若い衆と呼び、二十歳から三十歳までを大若い衆と呼んだ。若い衆の長を頭と呼び、頭の任期は一年だった。同級生の一番上のものをイワシサシといい、これは長男だけが選ばれた。若い衆に入る時には五百円を納金した。

一月に頭から若い衆の掟や常識を教わる。社務所で寄合をして丸暗記した。若い衆の掟は厳しく、呼び出しがあつたら夜中でも出ていく必要があつた。マツチとヒボ（紐）を常に持ち歩き、ヒボは年長者の下駄の鼻緒が切れた時のために用意していた。二十歳までは祭り装束は身に着けられず、使い走りをした。かつては三十人ほどいた。平成三、四年頃に若い衆が解散したため、その仕事は自治会で引き継いでいる。

神主 神主（字神主）は一年任期である。神主は、若い衆を経験した長男が担うが、一戸につき一人ずつ担当する。神主は、年齢順で当番を回していたが、令和四年から四月の春祭りのあとにクジ引きをして決めるようになった。

神主は朝参りをして本殿で祝詞を上げる。今は月一回だけに行っているが、平成頭には月二回（一日、十六日）、さらに昔は月六回（一、三、七、九、十六、二十二日）行っていた。朝参りは、朝五、六時に神社で祝詞を上げる。行き帰りに他人と会話してはいけない。神酒と洗米を持参する。衣装は白い着物と紋付を着るが、今はスーツでもよい。水ごりはしなかった。神主は祭りの時も座っている。宮参りや地鎮祭、忌開けの清め（神棚の清め）なども行う。

氏子総代

氏子総代は三人ずつ三年間務める。氏子総代が行事の段取りや神社の管理を全て行う。本来は神主の仕事だったものを氏子総代が担うようになったため、神主より忙しい。

宮司

黄和田の日枝神社の宮司に依頼している。

寺堂の組織

寺世話 かつては寺世話が二人いた。毎年三月に選挙をして決める。寺世話の仕事は、正月の年頭の挨拶や一月九日の親王講などがある。そのほかに檀家惣代も二人いる。

3 年中行事

神社の行事

一月の行事 かつては年越しの火焚き番や年頭行事、一月七日の山の神講、一月十日のお日待ちなどが行われていたが、これらの行事は縮小されていった。その中で、一月三日のゴクモリ（マナスエ神事）は、古来の様式を残しながら現在も継承されている。

春祭り 四月の大皇器地祖神社の大祭は、神事や湯神楽などをする。ゴクモリのような特殊な神事はない。幟と高張提灯を立てる。昔は家でヨモギ餅を作った。昭和五年生まれの話者が子供の頃は、行事は春祭りくらいしかなかった。昭和五十年代まではモンキリという行事があり、幟に竹で編んだヒョウタン型の飾りにモン（折り紙）を付けた。飾りを持ち上げるとモンが舞い飛び、それを拾うと幸せになるといわれ、子供たちが拾いにいった。若い衆が「風の神さん、風吹いておくれ」と言っていた。

秋の大祭

九月九日に行っていた行事だが、現在は九月第二日曜日に変



写真 47 御供 (令和4年)



写真 48 神饌の調製 (令和4年)

もらい、区長から記念品(筆箱や図書券など)をもらう。四月三日に行

つていたが、現在は四月の第四日曜日になった。
ゴクモリ 大皇器地祖神社で神饌を調製して供える神事をゴクモリ(マナスエ神事)と呼ぶ。かつては年二回、一月三日と九月九日に行っていたが、現在は一月三日のみになっている。早朝から社務所に集まり、祭壇と供物を準備する。昔は神主の家で行っていたが、昭和三十四年に神社のカリヤ(社務所)を新築したのをきっかけに場所をカリヤに変更した。

かつては若い衆による儀式だったが、現在は御供盛保存会を立ち上げて継承している。保存会には四十〜七十代の男性が所属し、君ヶ畑で出生していない人や移住した人も含まれる。

・ゴクマイ

神饌に使う米をゴクマイといい、昭和三十〜四十年代には神主の親類の子供が一戸から一合ずつ集めていた。大正時代には若い衆に当たっている者が米や酒を負担していた。

更している。

勸学祭 春祭

りと同日に行っている。家督を継ぐ長男のみ参加する。小学校に入学する子供が神主に舞殿でお祓いをして

・人数

行事を行うには少なくとも十一人必要である。神酒注ぎ二人、御供くくり二人、御供詰め一人、マイ一人、シモマナ二人、カミマナ二人、ホンマナ一人。

・神饌の種類

シモマナには魚(カマス、スルメ、カツオブシ)、カミマナには野菜(ゴボウ、大根、昆布、大豆)、ホンマナには御供、フナズシを用いる。そのほかにも鏡餅、神酒などを供える。

・神饌の準備

御供は、蒸したうるち米をムシロの上でポイポイと転がして練り、押し固めて形を整える。これをポイポイ(御供練り)という。

・神饌の調整

若い衆がカリヤに集まって神事を行った後、神饌の調整を行う。この時は無言で作業する決まりがある。フナズシはまな板に乗せられ、マナバシ(鉄の箸)と刺身包丁を使って縦横に細かく切り分ける。カミマナ、シモマナは、賽の目に切る。いずれもカイシキと呼ばれるへぎ板を輪にした大小の容器に入れる。御供は、既定の容器に詰めてひっくり返すと円錐形に仕上がる。御供くくりがこれにワラ縄をくくり、全部で三組(昔は五組)作る。神饌は、神事、直会の後に若い衆や参拝者などで分配して食される。

寺堂の行事

親王講

一月九日に寺世話が親王さんの祈祷を行う。昔はこの行事を親王講と呼んだ。金龍寺の親王殿で祈祷を行う。祈祷は方丈さん(僧侶)が行い、ムラの人は扇子を持参する。これに参ったら御札をもらう。

百万遍

一月二十五日に金龍寺の本堂で子供が大きな数珠で数珠繰りをした。この日は天神さんが流された日という。房がくると拝む。昔はこの行事をかきもち念仏ともいい、かきもちを供えた。現在は行っていない。

涅槃

二月十五日に涅槃があり、一年の無病息災を願う。現在は二月八日に近い日曜日に行っている。大きな涅槃図をかけ、寺世話が四色団子を作って三宝に載せて供え、参拝した人はそれを持ち帰って財布に入れたりして身の周りに置いておく。

彼岸 三月と秋の彼岸には墓参りをする。この日はムラの外に移住した人も帰省する。昼一時に住職、檀家総代、寺世話が参る。

盆行事

・七日盆

サンマイを掃除した。

・オシヨウライ迎え

各家からロウソクを持ってサンマイへ行き、シキミやムツダンゴを供えた。寺では精霊会が行われた。

・施餓鬼

昔は、八月七日から数日かけて僧侶が順番に焼香に回った。現在は八月十五日に施餓鬼がある。朝の七、八時頃から棚経があり、昼一時から総施餓鬼を行う。戦死者の慰霊、初盆などもこの時に行う。寺に棚をもつてきて幕で巻き、お茶や果物を持参して供える。桶の中にナスやキュウリを入れる。自治会長など役が当たっている人から参る。

・オシヨウライ送り

八月十五日に仏壇のお供えの団子、果物、菓子などをイモの葉に包み、御池川に流した。

・盆踊り

八月十四日に若い衆が主催していた。盆踊りにはヤグラを建て、音頭取りを呼び、深夜二時頃まで踊った。女形で踊る人もいた。音頭取りは泊まつていくので、座敷音頭を寺の階段で行っていた。近年では自治会の運営委員会が店を出し、芸人を呼んだりビンゴ大会をしたりといった娯楽行事をしていたが、コロナ禍で中止になった。

・地藏盆

地藏盆は八月二十三日に老人会が行った。昔は中学生以上の子供が世話をした。寺を上がって左側に地藏さんがある。一番年上のものが門の下に壇を作って、門に飾りつけをする。

ジョウザ

静座は十二月に寺で行う行事で、金龍寺の住職がお参りをする。小中学生の子供とその親が机を持ってきて地藏を置き、一戸ずつ歩いて「しんぜてくれ」といって供物を募った。集まった供物はみんなに分けた。

第三節 生業

季節ごとに山仕事、茶業、養蚕などを兼業する家が多かった。山仕事は、君ヶ畑の主要な生業で、材木と炭焼きが半々だった。山仕事の合間に、春は茶業や田植え、秋は刈り入れが重なり忙しかった。

1 山仕事

共有林 御池岳の近くに惣山があった。惣山はムラ全体で共有する山で、現在は自治会の山が三分の二ほどを占める。かつては組ごとの山もあり、組山と呼んだ。総山、組山などの区分毎に山普請を行った。

材木 主に杉を扱い、ヒノキは扱わない。山で手挽きした木を蛭谷まで運び、蛭谷から馬車などで相谷の間屋まで下ろしていた。



写真 49 背板で材木を運搬する女性たち
(昭和 15 ～ 20 年)「永源寺町史」より転載

板材の生産は、一冬に百坪分、一日で二坪半ほどを挽くことができた一人前だった。

木挽き小屋 雪が降ると山の中で作業ができないため、ムラの中に木挽き小屋を建て、雪が降る前に材木を運び入れて中で挽いていた。

伐採の時期 八月の盆過ぎから九月にかけて、注文に合わせて材を伐る。

材の規格 長さは八尺、十尺、十四尺、十六尺、十八尺、十四尺（約四・二メートル）の需要が最も多かったという。厚みは、四分、六分、八分とあり、四分は天井板、八分は踏み天（一階の天井と二階の床を兼ねる）など用途が分かれていた。酒樽用の樽丸は、赤味のある杉材で、長さ一間（約一・八メートル）、厚み一寸三分（約三・九センチ）が必要だった。

製材所 昭和十二年頃に製材所ができたため、それ以降は前引鋸による手挽きが行われなくなっていた。君ヶ畑製材所には約二十名、丸栄製材所には約五名が勤務していた。

材の運搬 昭和二十年代まではキンマを用いていたが、徐々にセンで運ぶようになった。セオイという仕事があり、荷物を運ぶことを専門に行い、女性が多かった。一回の荷で二坪分の材を背負って運んだ。昭和

木挽き 木挽きには

技術を要したため、他の仕事より収入が良かった。大正時代には樽丸（樽の部材）の生産が盛んだったが、多くの木を必要としたため山が荒れたといわれる。柱や

期頃までは馬車引きさんが来ていたことを覚えている。

炭焼き 秋頃に窯を築き、雪が降るまで炭を焼いた。十五貫を一セットとして、多賀方面や佐目などに出荷した。ムラから四キロほど離れた場所で焼き、泊まり込むための小屋を作っていたという人もいる。

2 茶業

茶は在来種を育てる。オツカイモンが自家用が中心だったが、販売している人も一部あった。かつては広大な茶畑があったが、戦時中の食糧難からサツマイモ畑になり、昭和三十八年には三町歩程度になった。畑の境界や霜除けのために桑を植えた。現在はほとんどが山林になっている。

茶揉み 茶工場ができる以前は、各家が手揉みで製茶していた。ローベヤ（炉部屋）を持つ家が多かった。茶揉みは男性の仕事だった。

茶工場 組合で茶工場を建設し、量産できるようにした。一箇所あり、一つは墓地に隣接しており、四、五人で作業していた。買いに来る人がいて、現金収入になっていた。農協で茶の品評会があり、品質の良い茶は高く売れた。

煎茶 君ヶ畑は煎茶の生産量が多かった。俵やコモをかけて日光を遮った。煎茶の生産は女性の仕事だった。

茶休み 毎年六月頃の一番茶の作業が終わる頃に、茶休みの触れが出てムラ中が一斉に仕事を休んだ。この時に笹の葉に米粉団子を包んだツマキ（チマキ）を作った。

子供と茶 茶の時期になると、子供は学校が終わってから茶の手伝いをした。また、授業の一環として、学校で茶園を借りて茶を育てていた。

3 その他

農業 水が冷たいため稲作には不向きな環境であり、田を持つ家は三戸ほどしかなかった。自家用程度の量を賄っていた。かつてはシイタケ栽培などもあったが、現在は行っていない。

漁法 竿釣り、シャクリ、ヨウチ、トモ釣りなどさまざまな方法で魚を獲った。ヨウチはカーバイト（ランプ）の灯りでおびき寄せてシャクリで獲った。ウナギの淵ではナガシで採った。夕方に仕掛けて早朝に採りにいくが、十本仕掛けて一本かかったら良い方で、一日に三匹ほど釣れた。カガミも使った。水中に入れて引つける。シャクリはミヤコタケを用いて作る。アユは叩いて追いこむ。投網はしなかった。現在は、釣りの権利が川の上流と下流で分かれていて、君ヶ畑周辺で釣りをするには上流の権利を購入する必要がある。漁協ができる前は、ウナギ、イワナ、アユなどを各々が自由に釣っていた。上流ではイワナ、アマゴなどの放流魚が、下流ではアユが釣れる。

イワナの養殖 昔は御池川の上流にイワナの養殖場があった。

養蚕 戦前までは蚕を育てた。気温が低いため夏蚕だけだった。秋頃に繭ができ、糸にしたり真綿にしたりした。男性は桑の葉を摘み、女性には糸を紡ぐのが仕事だった。二番茶を作らない家が夏の仕事として養蚕をした。茶畑のあいだに桑を植え、蚕に桑の葉を与えた。葉が濡れたものは乾かす必要があった。五十年ほど前までツシで蚕を育てていたが、現在は物置きになっている家が多い。

冬仕事 雪が降ると山に入れないので、小屋を建てて木材を運び入れ、冬の間に挽く。女性はワラを使ってゾウリを作ったり、針仕事をしたりした。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

食生活

ご飯 田を持つ家は少ないため米の自給は難しく、ムラの外から入手することが多かった。昔は茶や炭などと物々交換で米を入手した。政所から購入することもあった。麦も購入して麦飯にして食べた。山菜や薬物の混ぜ飯にすることもあった。昭和四十五年頃には白米を食べることが多くなった。

餅 正月や祭りの際には必ず餅を搗いた。冬によく餅を搗いたが、搗いた餅は丸めて水につけて保存し、食べる時に水から出して焼いた。大寒、小寒の時に水につけると腐ったりかびたりしないといわれた。餅を板状にしたものを軒先に吊るし乾かして切り分けておかきにもした。お彼岸にはオハギを、お茶摘みの時にはチマキを作った。

野菜 自家用の畑が家のすぐ傍にあった。ジャガイモ、ホウレンソウ、白菜、ゴボウ、ナス、キュウリなどを作っていた。

山菜 セリ、フキノトウ、ワラビ、ゼンマイ、イタドリ、フキ、イボナなどが採れた。セリは田の溝に生えていた。イタドリは、生のまま塩をつけて食べたり、茹でてオクドサンの灰であく抜きをして食べたりした。ワラビ、フキ、ヤマブキは、昆布や山椒、醤油などと一緒に炊いた。ジネンジョは市販のものより粘りが強く、すったものに醤油をかけて食べた。葉ワサビも採れた。

キノコ シイタケ、マイタケ、スギタケ、マツタケなどが採れた。誰でも取って良かったため、家々で採りに行った。昔は家や青年会でシイタケを育てていた。

果物 山で栗や柿が取れた。栗は水っぽく甘くておいしく、栗ご飯など

にした。渋柿は、ツリボシ（干し柿）にしたり、酒と一緒に樽に入れて二、三週間くらい漬けてから食べた。栗は炒って焼き栗にした。

肉 鶏を各家で飼い、祭りの時などにつぶして食べた。すき焼きにした。神主は四つ足の動物を食べてはいけない決まりがあるが、カシワは許可されていた。猟師が冬に鹿を獲り、皮と肉を売って収入にしていた。クジラ肉は配給で来たり、給食に竜田揚げが出たりした。

川魚 昔はウナギ、アユ、イワナ、アマゴなどが採れた。ウナギは開いてかば焼きにした。アユは塩焼きや甘露煮にした。イワナは塩焼きにしたり、幼魚は焼いてから佃煮にしたりするとおいしかった。

加工食 大根、カブラ、キュウリ、ナスの糠漬けや、梅干しを作った。漬け過ぎたタクアンはしょっぱくなるので、炊いて食べた。納豆も自家製で、大豆をワラに包み、天井から吊ってイロリの火で温めた。ワラは米を作っている家からもらった。

フナズシ フナズシは各家で作っていた。塩でつけたフナを豊郷から売りに来ていたのを購入していた。フナ十キログラムに対して米を四升ほど入れた。神主になるとゴクモリでフナズシが必要になるので家で必ず作ったが、今は既製品を買うことが多い。

おやつ 茶摘みの合間にクワイチゴを採って食べた。

住生活

間取り クチロク、オクハチという間取りが多く、下の集落より広い家が多い。ニワ（土間）を入ったところに風呂や茶用の炉部屋があった。その奥にオクドサンがあり、その辺りをダイドコロと呼ぶ。入口を上がったところがデエ（居間）で、その奥がザシキ。ザシキには仏壇と神棚があった。神棚は西か南を向いている。デエの後ろがチャノマで、イロリと大

黒さんがあった。その奥がネマ（ネドコ）。オクドサンの横に大釜のある家もあるが、普段は使わない。オクドサンは二つほどあった。

屋根 屋根材はカヤで、採取したものを何年分かつしにためて乾燥させた。ツシは中二階のこと。惣山にカヤバがあったが、個人の山で採る場合もある。高橋を渡って取りに行った。束を横向きにしてセータ（背負子）に積んで持って帰った。これは主に女性の仕事だった。カヤは購入することもあった。約三十年に一度葺き替える。屋根葺きは一週間ほどかけて行い、山上などにいる業者が泊りがけで来ていた。親類なども手伝いにきた。戦前は、オモヤ以外の小屋などは檜皮葺きが多かった。

風呂 風呂は桶風呂（蒸し風呂）を使った。保温用にワラで編んだ傘が風呂の上にあり、滑車で上げ下げできる。風呂の底が熱くなるので、板を敷いて浸かる。外から薪で炊いた。

便所 便所は外にあり、汲み取り式だった。現在は浄化槽になっている。肥えは畑に持っていく。小便所も外にあった。風呂の水は便槽とは別のところに流す。

水の確保 各家に井戸があり、ポンプ式とガチャコン（手押し）式があった。昭和四十年頃から簡易水道ができ、平成十七年頃までには水道が通った。

谷の水 洗い場や風呂には谷の水を利用した。石段で下に降りられるようになっていいる。洗い場まで水を組みあげることが子供の仕事だった。バケツに汲んで天秤棒で十往復した。

防火タンク 昭和三十三年に大火があったため、防火タンクが八箇所設置された。木地師のふるさと交流館も水場になっている。

オクドサン 四十年前くらいには既にプロパンガスを使っていたが、その頃でも餅搗きなどの際にはオクドサンを使った。



写真 50 結婚式を見物する人々
(昭和 30 年代) 野瀬タマエ氏提供

燃料 燃料は薪を使った。炊きつけには杉葉を集めた。薪は木を伐採して、乾燥させてから割った。ミミタチという製材所があり、そこで出た端材も燃料として使った。政所に農協があり、そこでも薪を売っていた。
ノゴヤ 牛や馬を飼う小屋をノゴヤと呼んだ。

2 年中行事

餅搗き 餅搗きは十年ほど前まで年の暮に行っていた。二十八日から三十日に行う決まりがあり、二十九日には搗かなかった。床の間、神棚、荒神さん、オクドサン、大黒さんなどに供える。家人が食べる餅もついた。臼と杵を使った。

盆行事 家では八月十三日に墓参りをする。十五日に棚経をしてもらって供物を川に流す。これをショウライナガシという。流す場所は決まっている。墓には桐の葉に苧殻の箸を添え、キュウリ、ナス、団子を供える。前はこれも川に流したが、現在は行っていない。家でも墓と同じものを供える。

3 人生儀礼

婚姻 ムラの中で結婚する人が半数だった。茶葉が盛んな時代は茶縁で結婚する人もあった。昭和二十九年に結婚した時は、百五十メートルもある嫁入行列を組んだ。一日目に結婚式、二日目に宮・寺詣り、シンルイアルキ、オレイアルキ、トナリアルキ、三日目にはツレヨビなどのヨビシ（披露）を

行った。料理は政所の魚松に依頼した。

出産 自宅で出産する時にはワラを敷いた。昭和二十年代の出産時には山上の産院に行った。お七夜には山上の菓子屋にオシモン（紅白の蒸し菓子）を注文した。忌の期間をスベノウチといい、男児出産時は二十五日、女児は三十日だった。生まれた日によって名付けに使う漢字が決まっていた。

後産 ノチサンマイ（サンマイの道向かいにある）に夫が埋めにいった。
葬儀 棺桶は座棺で、遺体を湯かんしてから入れた。枕元に六つ団子、シキミを供えた。行列を組んで野送りする。墓に着くと穴掘りさん（血縁の薄い親戚）によって埋葬された。

墓 墓はサンマイと呼ぶ。古い時代には火葬もしていたが、昭和半ばには土葬に変わり、平成八年までは土葬の習慣が続いた。

忌明け 忌明けの際は、家の神棚に湯をかける。現在は御湯をもらいについて家の神を清めるが、昔は神主に参ってもらった。昔は男性が没後四十九日、女性が三十五日だった。

第五節 交通・交易

道 現在の車道は昭和十六年に整備され、元は林道だった。車が通行できるようになる昭和三十年代以前は、峠を越えて伊勢方面や多賀・彦根方面に出ることが多かった。

行商 食品は行商から購入することもあった。愛東から食品を売りに来る人がいた。スイカ、マクワ、トウモロコシなどを載せたリヤカーを犬が引っ張ってきた。魚屋は政所に二軒あり、自転車の荷台にトロ箱を載せてヒラキ、干物、スルメなどを売りに来ていた。四十年ほど前から車移動になり、生魚も売りに来るようになった。昔は政所から醤油を売り



写真 51 君ヶ畑の大火後（昭和 33 年）
「永源寺日和」より転載

に来ていたので、醤油はムラの人が樽でまとめ買いして、一升瓶で量り売りをしていた。

物々交換 米を栽培していない家は、茶や炭との交換で米を入手した。炭は多賀や近江八幡の方へ持って行ったことを記憶している。

第六節 その他

アルキ リンフリとも呼んだ。組は関

係なく、一箇月ごとに交代する。リン（鈴）を鳴らして普請や祭りを知らせたり、紙配り（回覧）をしたりした。

除雪 除雪は組ごとに行う。昭和三十年代は道がドミチ（未舗装）だった。積雪量が多いと雪かきができないので、足で雪を踏んで蛭谷まで通路を作る作業を雪ふみ人足と呼び、昭和四十年代頃まで行っていた。雪道が凍った時には雪割をした。アルキが前日の夜九時頃にふれた。

触れ 茶のシーズンは一斉作業をするので、それが終わると茶休みという触れが出た。モライヤスミというのもあった。若連中が区長に休みの許可を取りにいった。

学校 政所小学校分校と、政所中学校君ヶ畑分校があった。小学校は現在の「いこいの家」の場所にあったが、その後にはノエビア高山植物研究所の位置に移転した。この分校には新規採用された先生が多く来ていた。教員用宿舎があった。

災害 昭和三十三年十二月九日に大火が発生し、ムラが焼けた。また、翌年には伊勢湾台風により、山に甚大な被害が出た。

虫干し 毎年秋の天候の良い日に金龍寺宝物を虫干しする。氏子狩帳や経典、掛け軸などの資料を広げて陰干しする。

第十五章 茨川の民俗

ムラの概要

茨川は、愛知川の上流、藤原岳の西南麓に位置している。近世初頭には鉾山（銀山）の集落として栄え、また、近江と伊勢をつなぐ峠筋の茶屋として発達した。行政上は滋賀県の旧永源寺町に属するが、立地条件から三重県との関わりが深かった。住民は仕事や学校などに通うため離村して四日市市、桑名市、名古屋市、滋賀県内などに移住していった。昭和四十年に最後の住民が移住して廃村となり、ついに電気やガスなどによる近代化を経験しないムラとなった。

第一節 社会組織

戸数 明治時代には五十八人、十四戸あった。昭和三十八年頃までは八戸ほどあったが、ムラを離れる人が相次ぎ、昭和四十年に一戸のみとなり、同年八月十九日をもって廃村となった。

村の役職 戸数の少ない茨川は、村の役職として区長と神主を置くのみである。区長は毎年一月十五日に選出していた。茨川分校の教員が兼ねることが多かった。

第二節 信仰

1 神社・寺院

天照神社 主祭神は国常立尊。幕末に現在の字向山に移ったと記録される。当社に伝わる能面がご神体とされ、廃村になった後も、かつての住民が帰郷して祭礼を行った。

寺院 ムラの中に寺院はなく、君ヶ畑の金龍寺を檀那寺とした。

2 信仰組織

神社の組織

神主 天照神社は、住民による一年交代の廻り神主（社守）が奉祀していた。成人男性は誰でも神主の装束を持ち、祝詞を上げることができた。神主は毎年二月十四日に神社境内でクジを引いて決め、神主の交代は九月十五日に行った。神主は、毎月一日と十五日の早朝に参拝する。

宮司 神事には、黄和田の日枝神社の宮司が来村した。

3 年中行事

元旦 新年式は、神主が早朝に新年の祝詞を上げる。戦前までは、午前九時頃に住民全員が分教場に参集し、四方拝賀式を執り行った。子供は家々を回って年始の挨拶をし、お年玉としてミカンをもらった。

日待ち 一月十四日に神主が宮参りをした後、持ち回りのヤドに籠もって日待ちをする。この時は神酒やかやくご飯を食べる。大



写真 53 天照神社秋の例大祭
（昭和 14 年）筒井正氏提供



写真 52 茨川全景（昭和 10 年）
筒井正氏提供

人はアラレやカキモチなどのお菓子を食べながら朝まで起きていた。日待ちは、二月十四日、六月十五日、十月十五日にも行われた。

小正月 一月十五日に神主が神酒、洗米、肴（スルメ、ジャコ、昆布など）を持ってお参りする。

村勘定 一月二十七日は、区長宅でムラの費用の決算を行う。

二月正月 二月一日の早朝に、神社で神主が鐘を打ちならし、ムラの人が参拝する。式典が終わると、お下がりの神酒などを区長宅へ運ぶ。

節分 二月三日、ヒイラギの枝にイワシの頭を刺して戸口に掲げる。鬼がこれを見ると家に入ってこないという。豆まきをした後、年の数だけ食べた。

紀元節 戦前まで、二月十一日には学校において紀元節祝賀式が行われ、ムラ中の人が参列した。

初まつり 二月二十日、男が太鼓を叩き住民全員が参拝する。

神武天皇祭 四月三日に菱餅を作って神社に供える。

五月節句 五月一日に菖蒲の節句を行う。

盆踊り 八月十六日、学校の校庭で、餅搗き用の臼を引っくり返して台にし、その上に乗って音頭を取った。江州音頭が中心だった。

秋の大祭 十月十六日に行う。祭典の様子について、昭和三十九年に行われた最後の秋祭りの記録を参照する。

・飾付け

家の軒に祭り提灯を吊す。神社に「奉献御宝前 氏子中」と書いた幟を二本立てる。鳥居には祭り提灯を五つ並べて吊っている。本社の前にも青竹に提灯を吊して両側に立て、その前に大太鼓が出される。カリヤの入口の上にも同じように祭り提灯を三つ吊す。

・神饌

主な神饌は、神酒、洗米、稲穂、鏡餅二重、ハマチ、イモナ（イワナ）、スルメ、海苔、昆布、栗、シイタケ、菓子、大根、カンピョウ、ゴボウ、自然薯、ミカン、リンゴ、サツマイモ、塩、水。それに仏事には使わないダリヤ、カプトキクの生花などを三方に乗せて家から運ぶ。祭典はムラ中が集まって夜祭を行った。祝詞奏上、玉串奉奠を行い、カリヤにて賑やかな直会が行われる。

えびす講 十一月二十日、ハタイモ（サトイモ）をご飯に炊き込み、おにぎりにして小豆の餡をかけて食べた。この日は、カヤの口開け日でもあった。

山の神祭り 十二月七日、神酒と三種の肴を神さんに供える。「山の神が白いウサギに乗って来て、種を蒔きに歩く」といわれ、山の出入りは禁止され、山仕事は休みとなった。また、イワナ釣りなどの殺生も一切禁止された。

第三節 生業

茨川は谷底の窪地に位置し、可耕地は極めて少なかった。かつては稲作も行われていたようだが、農業は自家用野菜の栽培のみで、炭焼き、杉・ヒノキの植林・伐採が主な生業だった。

1 山仕事

炭焼き モチヤマ（私有林）で月に二回ほど炭を焼き、約百俵の炭を生産していた家もある。焼いた炭は、長さ九寸（約二十七センチ）に切り揃えて俵に詰める。切り屑やかからなどをアカと呼び、火鉢やコタツの熱源やイロリの種火として使用した。

炭の運搬 俵に詰めた炭はセタ（背負子）に乗せ、治田峠を越えて新町（旧北勢町）の炭問屋まで運んだ。そこから車で桑名・四日市方面に出荷し

た。昭和三十九年頃の値段は、ムラ渡りで一俵三百五十円程だった。

俵編み 炭を入れる俵は、夜なべ仕事や冬場の仕事として、カヤを材料にナカニワ（土間）で編んだ。一日に十五枚ほど編む。俵編みに使う細縄は、材料のワラを新町の農家から購入した。円い石の上でワラを木槌で打ち、柔らかくしてスクベ（薄皮）を取り除き、イロリ端で夜なべ仕事に縄を縫った。昔は雪沓なども編んでいた。年末にはしめ縄も作った。しめ縄は、普通の縄とは逆の縄い方で、太さも異なり難しそうだった。これは父親の仕事であった。

植林 林道が開通した昭和二十九年以降、国策の営林事業の一環で杉やヒノキの苗木が車で持ち込まれ、各々のモチヤマで植林が行われた。苗木を植えてから四、五年は下草刈りや苗起こし（雪で倒れかけた苗を元通りにする）などの作業があつて、手間がかかる割に収入は少なく生活は苦しかった。

カヤ カヤは入会地のカヤノ（茨川から南約二キロメートルの字ヤキヨ谷）で刈り取った。十一月二十日をカヤの口開けといい、この日以降でなければ、刈り取りはできなかった。カヤの口が開けると、炭焼きの傍ら、家族総出で刈り取りをした。

2 農業

田 農耕もわずかばかりあった。明治二十年頃、高柳（旧大安町）の住民が来村し、杉原やヤキヨ谷で三反歩余りの田を作っていた。しかし、水温が低く日照時間が短いので稲の生育が悪く、収穫は二石に満たなかったという。昭和三十二年の永源寺町役場の統計では、米の栽培は記されていない。

畑 畑地は二町七反余で、茶、麻、自家用の野菜などを栽培していた。

各家の周囲に畑があつた。冬の間でも野菜が食べられるように畑の片隅に大きな穴を掘り、この中に大根、白菜、ネギ、ゴボウ、ニンジンなどを入れてコモを被せ、その上から土をかけて保存した。

茶業 茶は七戸が栽培していて、七十貫目ほど収穫できたこともある。煎茶が主であつた。林道ができてから二、三年間は、政所で培ってもらった。現在でもいたる所に茶畑の面影が残っている。

3 その他

養蚕 かつては、養蚕や茶の栽培も行われていた。養蚕は春蚕（六月初旬）と夏蚕（八月初旬）があつた。昭和三十一年度の『永源寺町町政要覧』によれば、茨川の桑園面積は七畝で、養蚕戸数七戸、収繭量は五千九百匁となっている。

漁法 イワナ釣りには、竹を切ってきて節を払って竿を作った。エサはミミズ、川虫（トンボの幼虫）、バッタなどで、時にはトンボも使った。イワナはどう猛な魚で縄張りを持ち、大きな淵では大抵一匹は釣りあげることができた。

茶屋川沿いの道を上流に向かって四十分ほど登ると、木滝（キダキ）と呼ばれる谷筋がある。話者が子供の頃は、父親が上流で山仕事をしている間にイワナ釣りを楽しんだ。たくさん釣る必要はなく、おかずとして家族が食べる数だけあればよかった。イワナは家に持ち帰り、小刀で内臓を取り除き煮付けにもらった。時には、尺物（三十センチ以上）のイワナを捕まえるために、流し針を仕掛けたこともある。タコ糸に大さめの釣り針を付け、イシシタをエサにして大きな石に糸を縛り付けて一昼夜沈めておく。イシシタはドンコともいい、三角形の形をした川魚で、川底にいるためノゾキで探して縫い針で作ったヤスで突き刺して捕

まえた。イワナ釣りは子供の遊びではあったが、食卓を潤す大事な仕事でもあった。

山遊び 猟銃の鑑札を受けて猟銃を保持していた人もいる。狩猟を「山遊び」と称して、十二月から二月頃まで行った。山遊びには、ムラの人たちが全員参加することもあった。獲物は山鳥、野ウサギ、イノシシ、鹿などであった。捕獲した獲物はムラまで運び、参加者で配分した。獲物の皮は日干しにして業者に販売した。火薬や猟銃の弾代など消耗品代は、参加者全員で負担した。

第四節 イエの暮らし

1 衣食住

衣生活

肌着 男性の肌着は六尺フンドシにステテコ、冬には木綿のサルマタを着用した。女性は腰巻を巻いた。

仕事着 トモイキ（野良着）を着用した。手には手甲^{てこ}を付け、足もとに男性は脚絆^{きんぱん}、女性はハバキをつけた。衣類は治田峠を越えて旧北勢町阿下喜で購入した。

冠婚葬祭 家紋の付いた羽織と袴を着用した。家紋には男紋と女紋があり、女紋は実家の紋を持つて嫁いでくる。筒井姓は梅鉢の紋が多い。

履物 冬に積雪が多いのでカンジキを使った。カンジキは自家製で、ヒノキの枝を火で炙って曲げ、針金とヒノキの薄皮で縛って作った。

食生活

食事の回数 食事は一日に三回（アサハン、ヒルハン、ユウハン）が原則である。山仕事の時は、朝は早く帰りが遅いので、朝食と昼食の間に

ハヤビルを食べ、昼食と夕食の間にコビルを食べた。朝は味噌汁とコウコ（大根の漬け物）などをおかずとして食べた。昼は、炭焼き仕事の場合、窯の近くにハンバ（山小屋）を設け、その中で味噌汁を炊き、魚（塩漬けで長期の保存が利くもの）を焼いて食べた。夜は味噌汁、野菜、山菜の煮物などを食べた。

正月の食事 三が日は、雑煮とおせち料理（タツクリ、煮豆、昆布巻きなど）を食べた。

山菜 主な山菜として、イタドリ、ゼンマイ、ワラビ、フキ、ウド、クサギ、ササノコ（笹子）、ウコギ、タラノメ、ワサビ、山椒、キクラゲ、ヨモギ、ヤマノイモなどを食べた。イタドリは、皮がついたまま湯通しをして塩漬けにすると半年ほど保存することができ、冬の間の煮物や味噌汁の具になった。フキは、醤油と砂糖で佃煮にして長期保存食にした。クサギは、クマツヅラ科の落葉樹で青臭く苦い香りがするが、湯通しすると臭気は消える。湯通しした後二日ほど水につけてアクを抜き、天日で乾燥させて冬季の保存食とした。うずら豆と煮たりした。

魚 魚は旧北勢町の治田や阿下喜で購入した。生魚は腐敗しやすいので、長期保存が利く塩サバ、塩ジャケ、塩サンマ、イワシの干物、みりん干しなどであった。また、家の側を流れる茶屋川ではイワナが釣れた。アマゴ等の尺物もたまに釣れた。イワナは焼き魚や煮魚にして食べ、山椒を少し入れて煮ると美味だった。

肉類 肉は鹿やイノシシだった。牛や豚を食べることはなかった。冬に狩猟が解禁になると、伊勢方面から鹿の皮や角を目的とした猟師が来村し、話者の家で宿泊した。宿泊代の代わりに肉を置いていったため、上質な肉を食べることができた。鹿の生肉を天然のワサビ醤油につけて食べる味は格別だった。鹿肉が多い時には、醤油と砂糖で煮しめて佃煮に

した。

保存食 大根の切り干しなどを作った。漬け物は、大根、カブ、キュウリ、ナスなどのドボズケ（糠漬け）で、夏にはスイカの皮やイタドリなども漬けて食べた。

おやつ オカキ、アラレ、炒ったそら豆、サツマイモなどを食べた。また、アケビ、木イチゴ、グミ、山栗、スモモ、カヤの実なども食べた。山栗は近くの栗林まで拾いにいった。

日待ち講の食事 九月十四日の日待ちでは、鶏、ゴボウ、ニンジン、コンニャクなどを入れたかやくご飯を炊いて食べた。

秋の大祭の食事 来客用に煮物のほかに巻き寿司やいなり寿司を作った。一年を通じて最も美味しいご馳走だった。

ボタモチ ナニカゴト（慶事や遠方の親類などの来宅）があると、ボタモチを作り、近隣の家にもおすそ分けした。

住生活

間取り 四間が一般的である。話者の生家は、イロリがダイドコロとデノクチの二部屋に設けられていた。ダイドコロは煮炊きや調理の場であると同時に、家族の食事の場でもある。

屋根 屋根はカヤ葺きで、三十年に一度葺き替えを行った。話者の家は昭和三十七年頃に葺き替え、旧北勢町向平の屋根葺職人に頼み、親類の手助けもあって十日ほどで葺き終えた。

五右衛門風呂 五右衛門風呂で、風呂の沈め板をうまく踏み込んで底に沈めないと入れなかった。小さい頃は一人で入れなかった。風呂に水を入れるのは子供の仕事だった。家に井戸がない場合、水は近くの川から汲んでくる必要があった。小さい子供は一升ビンを二本使って何度も川

と風呂とを往復した。

もらい風呂 風呂は全戸にあったが、もらい風呂をした。話者の家は六人家族で人数が多く、他の家に風呂をもらいに行った記憶はないが、近隣の人がよく風呂に入りに来ていた。入浴後、自家製のアラレやオカキ、干し芋などをお茶請けに夜遅くまで談笑していた。

煮炊き カマドはあったが、通常はイロリで煮炊きしていた。薪は山から採ってきた。井戸のない家も多く、近くを流れる茶屋川の水が飲料水だった。雨が降ると川の水が濁るので、たいていの家に大きな水瓶があり、その中に水が蓄えられていた。

灯かり 電気がないので、夜は石油ランプの薄明かりの下で過ごした。補助の照明器具としてコトボシと呼ばれる小型の石油ランプがあり、入浴や就寝時に使用した。夜間の外出には提灯を使った。

納屋 ほとんどの家に炭を保管する納屋があった。また、ツシ（中二階）には冬の間の薪を貯蔵していた。ツシには大きな蛇のぬけがらがよく見られ、家の守り神である屋敷蛇の住処でもあった。

2 年中行事

積雪 冬は長く雪が多い。二メートルを超える積雪も珍しくはなかった。十二月下旬に初雪が降ると、根雪となって三月下旬頃まで残っている。この長い冬の間、大人達は仕事もできないため毎日のんびりと過ごす。唯一の仕事は雪かきである。各家々から学校までの道を手分けして除雪した。冬の間、教室では薪のストーブを使用した。冬の遊びは主にカルタ取りやトランプで、天気の日には門先でカマクラを作ったりソリで遊んだりした。ソリは太めの竹を長さ一メートル程に切り、半分に割って、三分の一ぐらいの所を火で炙って少し折り曲げ、これをミカン箱の底に

釘で打ち付けて作る。

3 人生儀礼

出産 お産に際して、卯酒を飲むと心安く生まれると言つてよく飲んだ。ムラに産婆はおらず、年輩の女性が立ち会い産婆としてお産の手伝いをした。茨川でのお産は、母方の祖母が執り行うのが一般的であった。サカゴの取り上げ方や呼吸困難に陥っている赤子、体温の下がっている赤子など様々な赤子の出産について母から子へと受け継がれてきた。

通婚圏 戸数が少なくムラで結婚相手を見つけることは難しく、蛭谷の住民と婚姻を結ぶ例が多く、ムラとムラとが親類関係のようなものであった。また、経済的に結びつきの強い旧北勢町や旧大安町の住民との姻戚関係も多い。

疱瘡送り 疱瘡の予防接種をしたのち、疱瘡送りをした。ワラで編んだサンダワラの上に赤い色紙を乗せて、御幣と一緒に赤飯のおにぎりを乗せ、道の曲がり角に置いておく。一晩のうちにカラスが食べると疱瘡が早くカセル（瘡蓋が早くとれる）といわれた。

葬式 ムラで葬式があると、手分けをして親類・縁者に連絡をする。これを葬式触れと呼ぶ。親類の多い三重県方面や蛭谷に、いずれも峠越しで葬式触れに出かける。ほとんどの家が君ヶ畑の金龍寺の檀家で、葬式には金龍寺の住職を導師に頼む。

納棺 納棺に際して、身内がサラシを用いて着物、キャハン、手甲を作り、これらを着せてミノカサを被せる。杖、木製弁当（ご飯を入れる）、六道銭などを入れて、手を組んで座らせ、足には草履を履かせ善光寺詣での服装にする。棺は座棺で、白木で御輿のような形を作り、色紙を張って装飾する。棺の頭部には鳳凰を乗せる。サンマイはムラの外れにあり、

埋め墓である。血縁関係の薄い者が墓穴を掘る。墓穴は縦二メートル、横一メートル、深さ二メートル程の堅穴である。

葬列 葬列は、血の濃い親類が掲げる先火（松明）を先頭に、孫が提灯、喪主や濃い親類が輿、喪主の妻が位牌をもち、その後に、天蓋、弁当、香爐、水鉢、死花、団子、菓子、墓標、鋤、旗、生花、造花、盛籠などを持った親類が並んで、葬列を組んで野辺送りをする。サンマイに到着すると、棺桶を担いで墓穴の周囲を反時計廻りで三回まわり、横に置く。読経のあと、北枕になるようにして埋葬する。サンマイは廃村後も残されていたが、平成二十四年の洪水により流失した。

第五節 交通・交易

茨川と他のムラとを結ぶ道は、君ヶ畑越し、治田峠越し、茨川林道の三つがある。君ヶ畑越しは役場に行くための道、治田峠越しの道は経済的な道、茨川林道は森林資源を運び出すための道だった。

君ヶ畑越し 君ヶ畑越しは、ノタノ坂を越えて君ヶ畑に至るルートで、約四キロメートルの山道である。この道は、役場（政所支所）へ行く時によく往来した。

治田峠越し 治田峠を超えて三重県北勢町新町に至る約六キロメートルの道で、茨川の住民にとつて最も重要な生活道路だった。

行きはさほど疲れないが、帰りは登り道が多く、休憩をとりながら帰宅した。新町から南河内谷辺りまで林道がある。林道の終点をヤスミといい、治田や阿下喜で買物をしてバスで新町まで戻り、ここから徒歩でヤスミまで戻って休憩する。青川沿いに二十分ほど登ると隧道が見えてくる。隧道を通ってしばらく登ると、日ノ岡の稲荷さんが見えてくる。この稲荷は、かつて山師が鉾山の稼業安全を祈願して勧請したものであ

る。治田峠まで辿り着くと、伊勢谷を下り四十分程で茨川に着く。

生活必需品の大半は、この治田峠越しで担がれて運ばれた。月に二、三回は治田や阿下喜方面へ買い出しに行った。買い出しに出る時は、いつも夜明け直後頃に出発した。険しい道を夜に歩くのは危険だからである。茨川から治田峠を越えて新町に着く頃には、服が濡れたり汚れたりしていた。いつも新町のバス停前家で休憩させてもらい、そこで服を着替えてバスに乗って阿下喜に向かった。買い物をして新町に戻ると、またその家で休憩して着替えをした。

茨川林道 昭和二十九年、茨川林道（全長十二キロメートル）が開通し、車がムラまで入ってくるようになった。茨川で焼いた炭はトラックで政所や八日市方面へ出荷するようになり、米や味噌、醤油などを政所方面で買入れるようになった。

茨川林道の開通により、ムラの生活は一変した。炭より割り木（薪）の方が効率よく出荷できるため、割り木生産を優先して炭を焼かなくなった。杉の伐採も始められ、連日のように丸太が切り出された。植林も本格的に行なわれるようになった。チェーンソーの利用が主流になり、鋸による木こり仕事や加工作業も行わなくなった。また、荷物運びなどの単純労働がなくなった。開通後の三、五年は活気付いたが、木を伐りつくして売れる物がなくなった。

「辺地に道がついたら過疎が進行する」という現象は茨川にも当てはまり、林道が開通して十年余りで廃村となった。昭和三十四年の伊勢湾台風により多くの橋が落ち、その後復旧されたものの昭和四十年には不通となった。

郵便 茨川は辺地のため、郵便物の無配地区であった。そのため、新町の木炭問屋が、茨川の住民宛の郵便物の取継ぎを行っていた。買い出し

の際に受け取って帰路についた。

木炭問屋 新町の木炭問屋は、茨川の木炭・薪の仲買のほか、茨川住民の日用品の仲介や郵便物の取継ぎまで引き受けていた。茨川の五戸の家がこの問屋を通じて炭を出していた。

運びさん 農閑期には、治田や石榑方面の住民が、茨川から新町まで炭を運び駄賃を稼ぐ人が多数あった。これを「運びさん」といい、駄賃は昭和十六年頃で一俵につき五十銭、十七年で六十銭、十八年には八十銭であった。男性なら一駄二俵を二往復して、一日に三円近い収入が得られた。

第六節 その他

村人足 一月から二月にかけてのムラを挙げての仕事の一つに、道の除雪、治田峠越し・君ヶ畑越しの道の雪踏み、神社の社務所や学校の屋根の雪落としなどがあった。春から夏にかけては、雑草や木々が道を塞ぐため、ムラ総出でノタノ坂越しや治田峠越しの道草刈りを行った。神社から学校までの道の修繕、神社の石垣直し、サンマイの草刈りなども行った。また、秋の大祭直前に、生徒が総出で境内の除草や清掃作業を行った。

学校の冬支度でもムラを挙げての仕事だった。秋に学校用の薪を入会山から切っておき、子供たちがワッパ（細い針金）で縛り校舎の側に積んでおいた。

普請 ムラの中を茶屋川が貫流しており、丸太の橋や板橋が架けられている。木の橋は、洪水が発生するたびに流された。一九三五年に学校前の板橋が洪水で流されたため、翌年にムラの大人が総出で橋を架けた。

銀山の伝承 茶屋川上流の蛇谷には銀山があり、江戸初期から中期にかけて大量の銀を産出し、幕府の直轄領として、四日市阿倉川代官の支配

を受けていた。各地から山師が入り込み、家もかなりあったため蛇谷千軒と呼ばれた。

蓮花寺の伝承 茨川から川上へ五百メートル余り行くと、蓮華寺と呼ぶ所がある。今日でも石垣の跡が見られ、かつて寺院があったと伝わる。

七人塚の伝承 七人塚と呼ぶ所があり、木地屋の祖神惟喬親王の従者七人が亡くなった場所と伝わる。惟喬親王にまつわる伝承は、鈴鹿山系の至る所に残されている。

三筋の滝の伝承 茨川から約一里ほど奥に三筋の滝がある。これを「大ガエリの滝」とも呼び、惟喬親王が御池山へ登った時に連れていた犬がここから帰ったことからこの名が付いたと伝わる。

人呼びの岩の伝承 人呼びの岩という大きな岩がある。ここは昔、惟喬親王が従者を連れてここまで来たがはぐれてしまった。親王がこの岩のところから大声で従者を呼んだので、ここを人呼びの岩と呼ぶようになったと伝わる。

長瀬の身替わり伝承 茨川から君ヶ畑へ行く途中に長瀬と呼ぶ所がある。骨董商が彦根へ向かう途中、ノタノ坂の峠から狼に狙われたが、長瀬の地蔵が身替りになったと伝わる。

茨川分校 明治八年に茨川学校が設けられ、同十九年簡易科君ヶ畑小学校に統合された。大正三年に、政所小学校茨川分校が設置された。

開校当時の児童数は七名で、小学校を卒業すると政所の中学校へ行った。中学校までは片道約十三キロメートルで通学は不可能であり、多くは蛭谷などの親類宅に寄宿して通学した。

大正時代の児童数は十二、三名であったが、昭和に入ると五、六名に減少した。茨川出身の教員が、昭和五、三十九年までの三十五年間に渡って茨川分校で教鞭を取った。教室は一部屋しかなく、先生は一人で全校

生徒（一、六年生）が同じ教室で勉強する複式の単級であった。

学校生活の思い出 昭和

和三十七年に茨川分校に入学した時の生徒数は六名だった。入学式などの学校行事はな

く、上級生に「これから宜しくお願いします」と挨拶した程度である。

教室には机、椅子、オルガン、理科の実験用具、地球儀、ソロバン、図書があった。一つの教室に一年生から六年生までの児童が混在し、授業は上級生を中心に行われたため、低学年には意味が分からなかった。

話者が小学三年生の時に本校（政所小学校）の運動会に参加した。運動会への参加はこの一回きりだった。政所小学校の校舎の大きさや生徒数の多さに驚いたことを覚えている。

二年生の春に遠足で三筋の滝に行った。三年生の頃には藤原岳に登った。多くの子供が幼少の頃から父母に着いて炭焼き小屋まで行き来したり、旧北勢町まで約三時間の道程を歩いて買い出しに出かけたりしていたため、みな健脚だった。



写真 54 茨川分校の児童たちと七夕飾り（昭和 10 年）筒井正氏提供

参考文献

- ・『滋賀県物産誌』（滋賀県、一八七九年）
- ・菅沼晃次郎「鈴鹿山中に消えた村の民俗」『民俗文化 二十一号』（滋賀民俗学会、一九六四年）
- ・菅沼晃次郎「ブトヒネリとチンツクリ」『民俗文化 二十六号』（滋賀民俗学会、一九六五年）
- ・『滋賀県文化財調査報告書 第二冊 愛知川ダム水没地域民俗資料緊急調査報告』（滋賀県教育委員会、一九六七年）
- ・菅沼晃次郎『木地屋のふるさと 君ヶ畑の民俗』（民俗文化研究会、一九七一年）
- ・橋本鉄男『日本の民俗 滋賀』（第一法規出版株式会社、一九七二年）
- ・『鈴鹿山麓の民俗』（伊勢民俗学会編、一九八三年）
- ・小牧実繁「愛知川上流の村々―その生活の断片―」『近江国見聞録 伝承を訪ねて五十年』（滋賀民俗学会、一九八四年）
- ・『ふるりの写真集』（大字佐目役員会、一九八八年）
- ・『滋賀県の諸職 滋賀県諸職関係民俗文化財調査報告書』（滋賀県教育委員会、一九九〇年）
- ・村井博一「消えた愛知川上流の村」『湖国と文化 五六号』（滋賀県文化体育振興事業団、一九九一年）
- ・深谷弘典『永源寺町の歴史探訪Ⅰ』（近江文化社、一九九三年）
- ・『滋賀県の祭礼行事 滋賀県祭礼行事実態調査報告書』（滋賀県教育委員会、一九九五年）
- ・『滋賀県の伝統食文化 滋賀県伝統食文化調査報告書 平成六年度～平成九年度』（滋賀県教育委員会、一九九八年）
- ・『永源寺日和』（永源寺町、二〇〇五年）
- ・『永源寺町史 通史編』（永源寺町市史編さん委員会編、二〇〇六年）
- ・『滋賀県の自然神信仰 滋賀県自然神信仰調査報告書』（滋賀県教育委員会、二〇〇七年）
- ・『あおの 一九五七―二〇〇六 入植五十周年青野町誕生記念』（青野町五十周年記念事業実行委員会、二〇〇七年）
- ・『悠久の山里 ふるさと高野の歴史』（永源寺高野字史会編、二〇〇七年）
- ・筒井正『廃村 茨川の思い出』（私家版、二〇一二年）
- ・『長老が教えてくれたこと』（私家版、ありがとうボランティアグループ編、二〇一四年）
- ・『よもやま和南のはなし』（和南町自治会、二〇一二年）
- ・高橋繁行『近江の土葬・野辺送り』（サンライズ出版、二〇一三年）

協力者一覧

※敬称および故人の注記は省略します。

甲津畑

古谷 勇

平木正俊

黒川 茂

田井中善久

蒲生俊男

古谷 孝

和南

小寺盛夫

横山鉄男

池田義昭

高野

上田眞太郎

門阪奎平

谷 富美子

田口敬一

西澤千恵子

木村揮美江

木村與志雄

九里重義

相谷

今若フサ

今若稲蔵

今若イクエ

寺田清司

寺田茂信

端 修吾

佐目

河合正男

大西 徹

大西 保

大西あや子

青木多津子

青木 昇

尾崎信夫

萱尾

原 達彦

瀧本和夫

瀧沢一馬

瀧本英夫

辻 みよ子

辻川修治

九居瀬

中村幸子

左近弘國

左近俊二

蓼畑

端 多美江

中川孝太郎

吉澤幸次

河島さく江

吉澤佳世子

中川美雪

河島邦夫

河島和代

河島金与門

森 信一

小辰比呂志

杠葉尾

小口幹男

池田志かの

福井たか子

小口たつえ

鶴田 登

小門フサエ

廣瀬 功

仲谷登喜夫

池田光子

中谷チヨ子

井ノ口初男

山口 博

黄和田

西村伊三夫

疋出安繁

野神幸夫

疋出廣幸

政所

高橋辰次郎

白木駒治

川上喜久雄

小椋久美子

川上喜代美

河居純子

左近 修

箕川

川嶋いさ

阿野肇一

川嶋ソエ

谷田政次

蛭谷

小椋茂子

小椋良枝

小椋一衛

小椋重則

君ヶ畑

野瀬タマエ

辻 光嘉

城戸辰之

野瀬芳孝

瀬戸洋海

有馬殿 清

田中 透

小椋猪久男

茨川

筒井みつ江

宮島洋子

森 千恵子

筒井宏幸

西原美江子

高木より子

山本 潔

調査員一覧 ※敬称は省略します。

民俗分野調査員

市川秀之	滋賀県立大学教授	平野愛華	滋賀県立大学院生
大塚活美	元京都府立京都学・歴史館職員	堀 絢音	滋賀県立大学生
米田 実	元甲賀市教育委員会職員	松本 唯	滋賀県立大学生
		山岡奏史	滋賀県立大学生
		柚木重敬	滋賀県立大学生

東近江市

筒井 正	東近江市参与
明日一史	東近江市企画部政策推進課森の文化博物館整備室参事
竹村祥子	東近江市企画部政策推進課森の文化博物館整備室主任
野瀬芳也	東近江市文化スポーツ部博物館構想推進課主任
菅原碩和	東近江市文化スポーツ部歴史文化振興課主事
石川純歌	東近江市文化スポーツ部歴史文化振興課文化財専門員

調査補助員

井上 司	滋賀県立大学生
小野隼一郎	滋賀県立大学生
岡崎梓織	滋賀県立大学院生
奥野歩夢	滋賀県立大学生
川山富音	滋賀県立大学生
後藤史羽	滋賀県立大学生
佐藤 唯	滋賀県立大学生
竹田圭乃	滋賀県立大学院生
チョウ リン	滋賀県立大学生
西口ゆうな	滋賀県立大学生
八田将史	滋賀県立大学生

東近江市森の文化資源調査報告書 1

民俗調査報告書

令和七年三月

編集・発行 東近江市企画部政策推進課

森の文化博物館整備室

〒五二七―八五二七

滋賀県東近江市八日市緑町一〇番五号

印刷・製本 株式会社デジ・プリント 滋賀